年報

名古屋大学大学院人文学研究科
教育研究推進室

2023

目　次

巻頭言　名古屋大学大学院人文学研究科長　周藤芳幸　i

I　教育研究推進室の活動報告 …… 1

1．大学院生支援事業　1

1-1　研究発表支援事業一覧（2023年度）　1

1-2　フィールド調査プロジェクト一覧（2023年度）　1

1-3　フィールド調査プロジェクト報告書　3

荒川兼汰　東條一堂の『左伝』注釈に見る中井履軒の影響　3

GONG Crystal　Linguistic Practices in Japanese Lesbian Communities: Identity Construction via Gendered Language　5

郭 姣　六朝古小説文献に関する調査 ——張華『博物志』、郭璞『玄中記』、任昉『述異記』を中心に　6

GUTIERREZ Nayla B. Community and Memory in the Context of National Cinema in the Western Region: A Case Study of Fukuoka City Public Library Film Archive　8

原 真由美　サガダ町における伝統豊穣儀礼（Begnas di Yabyab）及び米国聖公会による葬送慣習（Panag-Apoy）の調査と分析　9

広瀬八重子　日本語母語大学生英語学習者の発話の複雑さと発話能力の関係　11

頼 宇韓　大正期における貞明皇后の軍事活動——未公刊の宮中・軍の関係史料の調査　14

劉 亜銘　在日中国人ニューカマーの渡日経験と中国海外移民様式の変化について　17

彭 健　中近世『伊勢物語』注釈書の収集と翻刻 ——中近世知識人の知の連関を考える　19

鈴木寧々　熱田神宮史料の原本調査　20

WENSE D. V. da S. Marina 愛知県のブラジル人コミュニティーの言語に関する音声学的分析　22

2．教育研究推進室主催の行事（FD・ワークショップ・その他）　24

2-1　FD・ワークショップ・その他一覧（2023年度）　24

2-2　自己紹介の会開催一覧（2023年度）　24

2-3　FD 報告

生成系 AI と人文系の教育・研究　宇都木 昭・岩田直也（司会：吉田早悠里）　25

Ⅱ　人文学研究科の教育・研究活動 …… 41

1．教員の著書

1-1　出版著書一覧（2023年度）　41

1-2　受賞著書一覧（2023年度）　41

1-3　教員の自著紹介（氏名 ABC 順）

秋田喜美　『言語の本質――ことばはどう生まれ、進化したか』中央公論新社（今井むつみ・秋田喜美著）　42

影山悦子　『玄奘三蔵がつなぐ中央アジアと日本』臨川書店（近本謙介・影山悦子編）　43

河西秀哉　『昭和天皇拝謁記』全 7 巻、岩波書店（古川隆久・茶谷誠一・冨永望・瀬畑源・河西秀哉・舟橋正真編、2011～2023年）　45

小栗栖 等　*Edition électronique du « Roland » de Cambridge*. (Geste Francor 2)　46

斎藤夏来　『徳川のまつりごと――中世百姓の信仰的到達』吉川弘文館　48

2．各種報告

2-1　大学院教育の国際化に向けて

国際化推進室活動報告（曾 煒）　50

第10回名古屋大学・台湾大学大学院生研究発表会（飯田祐子）　51

日中学術交流推進プロジェクト（杉村 泰）　53

Ⅲ　各種データ …… 54

巻 頭 言

今号の年報は、2023年度における名古屋大学人文学研究科の教育研究活動の概要をまとめている。まず、当該年度は名古屋大学文学部創立75周年にあたることから、11月25日に野依記念学術交流館において記念講演会とシンポジウム、及び記念式典を挙行した。イベントの前半では、名古屋大学の旧文学研究科で初めて課程博士号を取得された坪井秀人名誉教授に、「世界文学と日本語文学の過去現在未来」というタイトルでご講演をいただいた。また、後半では、「人文知を未来に紡ぐ デジタルヒューマニティーズから見る世界」というタイトルで、若手教員を中心に学外からのゲストもお招きして、デジタル人文学についてのシンポジウムを開催した。オンライン同時配信ということで、出席者だけではなく多数の方にも視聴していただくことができた。部局長として、実行委員長を務められた飯田祐子教授をはじめ関係各位のご尽力に厚く御礼申し上げる次第である。なお､2017年度の文系再編にともなって文学部も大きな変革を余儀なくされたところであるが、この機会に刊行された『名古屋大学文学部創立75周年記念文集』に寄せられた同窓生や教員のエッセイからは、文学部・人文学研究科で営々と積み重ねられてきた教育研究活動のかけがえのない価値を再確認することができた。こちらについても、寄稿された方々に感謝の意を表したい。

研究活動の面では、前年度における超域文化社会センターの設置期限延長に引き続いて、当該年度には人類文化遺産テクスト学研究センターの設置期限延長に向けた取組を進めた。このセンターは、旧文学研究科が推進してきた21世紀 COE プログラム、グローバル COE プログラムの活動を継承し、真に実践的な人文学の創成を目指して2014年度に創設されたものであるが、2023年度には前年度末に惜しくも急逝された故近本謙介教授に替わって梶原義実教授がセンター長となり、影山悦子准教授、郭佳寧特任准教授を新たに専任教員に加えて陣容の充実を図った結果、無事に設置期限の延長を実現することができた。今後も、研究科としては、超域文化社会センター、人類文化遺産テクスト学研究センター、人文知共創センターを 3 本の柱として、さらなる研究の高度化に取り組んでいく所存である。

2024年10月 2 日

名古屋大学大学院人文学研究科長
周藤芳幸

Ⅰ　教育研究推進室の活動報告

1．大学院生支援事業

1-1　研究発表支援事業一覧（2023年度）

氏 名 （分野・専門）学年※	発表題目（使用言語）	研究集会の名称 開催地（都市名・国名）	研究集会会期 （本人発表日）
李 康元 （言語学） 3 年	Differential Discourse Strategies Regarding Pragmatically “Redundant” Information: A Functional Account of the Differential Verbalization Patterns of Referring Expressions in Japanese and Korean（英語）	16th International Cognitive Linguistics Conference Heinrich Heine University（デュッセルドルフ・ドイツ）	2023年 8 月 7 〜11日 （8 月 7 日）
片 鐘煥 （日本文化学） 1 年	遠藤周作文学におけるエコクリティシズム的アプローチ―『深い河』『沈黙』および短編小説を中心に（日本語）	第11回東アジアと同時代日本語文学フォーラム バリ大会 × インドネシア日本文学会 Grand Inna Kuta（バリ島・インドネシア）	2023年 9 月 1 〜 2 日 （9 月 2 日）
胡 勝 （中国語中国文学） 1 年	鹿地亘的抗战文艺活动与中日左翼文化交流―兼对1936–1938年相关文学史料的再整理（中国語）	「跨学科视野下的现代文学史料与文学史重构」国际学术研讨会 同济大学人文学院（上海・中国）	2023年 11月10〜12日 （11月12日）

※本支援事業の採択者は、すべて博士後期課程（当時）の学生である。

1-2　フィールド調査プロジェクト一覧（2023年度）

氏 名 （分野・専門）課程※	プロジェクト題目	調査訪問機関（所在地）	調査月
荒川兼汰 （中国哲学）前期	東條一堂の『左伝』注釈に見る中井履軒の影響	尊経閣文庫（目黒区）	2023年 9 月、12月
GONG Crystal （G30言語学・文化研究プログラム）前期	Linguistic Practices in Japanese Lesbian Communities: Identity Construction via Gendered Language	謝金助成	2023年 8 〜 9 月、2024年 3 月
郭 姣 （中国語中国文学）後期	六朝古小説文献に関する調査―張華『博物志』、郭璞『玄中記』、任昉『述異記』を中心に	京都大学（京都市）、静嘉堂文庫（世田谷区）、国立公文書館・国会図書館（千代田区）、東洋文庫（文京区）以上国内；上海図書館、南京図書館、浙江図書館（杭州市）、中国国家図書館・首都図書館（北京市）以上中国	2024年 2 月、5 月
GUTIERREZ Nayla B. （G30言語学・文化研究プログラム）前期	Community and Memory in the Context of National Cinema in the Western Region: A Case Study of Fukuoka City Public Library Film Archive	福岡アジア美術館・福岡市総合図書館・福岡ユネスコ協会等（福岡市）	2023年 9 月、2024年 2 月
原 真由美 （文化人類学）前期	サガダ町における伝統豊穣儀礼（Begnas di Yabyab）及び米国聖公会による葬送慣習（Panag-Apoy）の調査と分析	サガダ町・ケソン市各地（フィリピン）	2023年12月
広瀬八重子 （英語教育学）後期	日本語母語大学生英語学習者の発話の複雑さと発話能力の関係	謝金助成	2023年 9 月〜2024年 2 月
頼 宇韓 （日本史学）前期	大正期における貞明皇后の軍事活動―未公刊の宮中・軍の関係史料の調査	宮内公文書館・国会図書館（千代田区）	2023年 7 月、11月
劉 亜銘 （文化動態学）後期	在日中国人ニューカマーの渡日経験と中国海外移民様式の変化について	芝園団地（川口市、埼玉県）	2023年 8 〜10 月
彭 健 （日本文学）前期	中近世『伊勢物語』注釈書の収集と翻刻―中近世知識人の知の連関を考える	国文学研究資料館（立川市、東京）、宮内庁書陵部（千代田区）、九州大学（福岡市）	2023年 9 月

鈴木寧々 （日本史学）前期	熱田神宮史料の原本調査	高野山大学図書館（高野町、和歌山県）	2023年 5 月
WENSE D. V. da S. Marina （言語学）前期	愛知県のブラジル人コミュニティーの言語に関する音声学的分析	謝金助成	2023年10～11月

※本プロジェクトの採択者は、全て 2 年次（当時）の学生である。

1–3　フィールド調査プロジェクト報告書　※執筆者の学年は2023年度のもの

東條一堂の『左伝』注釈に見る中井履軒の影響

荒川兼汰　中国哲学分野・専門 博士前期課程２年

はじめに　『春秋左氏伝』、通称『左伝』は、儒教の最基本的な経典「五経」の一つであり、長らく経学の中心とされてきた。それは日本に於いても同様であり、特に江戸時代に至っては、幾人もの漢学者が『左伝』の注釈書を著した。調査者は近時、中井履軒という江戸時代の漢学者について研究しているが、履軒の『左伝』注釈書の研究を進めていく過程で、彼の『左伝』注釈が、同じく江戸時代の漢学者である東條一堂の著作『左伝標識』に大量に引用されていることに気付いた。これは、一堂の『左伝標識』が履軒の『左伝』注釈から大いに影響を受けていることに由るものである。さらに調査を進めた結果、東條一堂の『左伝経解』なる書物が前田育徳会尊経閣文庫に所蔵されていることを知った。書名から推察するに、『左伝』の注釈書であることは疑いなく、先ほど述べた一堂の『左伝標識』とは別の注釈書であると考えられた。従来『左伝標識』は、一堂晩年の著作と考えられており、従って尊経閣文庫所蔵の『左伝経解』は、『左伝標識』成立以前の著作の可能性が非常に高いと調査者は考えた。先述の通り、一堂晩年の著作『左伝標識』には、中井履軒の注釈が多く引用されており、中井履軒の影響が見られる。では、一堂の『左伝経解』はどうであろうか。尊経閣文庫所蔵の『左伝経解』を調査し、履軒の影響を確認することによって、一堂の『左伝』解釈の変遷や履軒『左伝』注釈の受容の例などが明らかになると考え、本プロジェクトに申し込み、調査を試みた。

調査日程　2023年 9 月 8 日、同12月15日の計 2 日間、東京都目黒区の前田育徳会尊経閣文庫を訪問し、文献調査を行った。調査した文献は、東條一堂『左伝経解』の写本 6 冊である。

調査結果　本プロジェクトで調査した、前田育徳会尊経閣文庫所蔵の東條一堂『左伝経解』は、一堂晩年の著作『左伝標識』と内容が全く同一であり、それどころか『左伝経解』は『左伝標識』の写本である可能性が高いと判明した。換言すればつまり、東條一堂『左伝経解』は調査者が想定していた文献とは全く異なっており、当初の目的である「履軒の影響を確認」すること、「一堂の『左伝』解釈の変遷や履軒『左伝』注釈の受容の例」を明らかに出来ないという、残念な結果に終わってしまった。しかし、当調査において私が設定した研究テーマとは別のベクトルで成果を得ることが出来、一堂『左伝標識』の写本を発見したことには一定の価値があると思われる。この貴重な発見に関しては、今後も調査を続けて、その成果を別途発表していく予定である。（成果の一部は、2024年 5 月発刊『名古屋大學中國哲學論集』第二十三号掲載「東条一堂『左伝標識』の新写本―『左伝経解』の書誌的考察―」に於いて発表した。）

むすびに　本プロジェクトのまとめとして、前田育徳会尊経閣文庫所蔵『左伝経解』の調査では、一堂『左伝』注釈に於ける履軒の影響をはかる事は出来なかった。しかし、『左伝経解』が『左伝標識』の写本であろうという、文献的に貴重な発見が得られた。今後も調査を続けて、この発見に関する論考を発表する計画である。最後に、本プロジェクトを開催し学生の研究を支えてくださった教育研究推進室の方々、調査に協力して頂いた前田育徳会の皆さま、ご指導頂きました先生方に深くお礼を申し上げます。

参考文献

鴇田惠吉『東條一堂傳』（一九五三年 東条卯作刊行）、東條卯作『儒者東條一堂小傳』（一九五九年 東條館會）、原田種成『左伝標識』（東条卯作『東条一堂著作集』所収 一九六三年 書籍文物流通會）

後進への申言と体験談　以下は簡単ながら、調査者の体験談を一、二点書き示し、以て後進への申言としたい。第一に調査者は、文献調査に行って初めて、想定していた内容と異なる文献であると知った。そのた

め調査結果は、テーマに沿った成果が得られないという結果に終わってしまった。文献調査は、入念な下調べをしていても、実物を見るまでその内容がわからないものであると今更ながら痛感した。当然のことではあるが、資料・文献調査を計画する場合は、このことを念頭に置いておくと良いだろう。第二に、一回目の調査（2023年 9 月 8 日）の際、東海・関東に台風が上陸する恐れがあり、移動手段である新幹線が運転見合わせとなる可能性があった。幸い、新幹線は通常通り運行し、文献調査も無事終えることが出来たのだが、それでも運転見合わせとなる可能性がある以上、調査前日・当日は訪問先と密に連絡を取り合う必要があった。これも当然のことであるが、訪問先、担当者様と連絡先をあらかじめ交換しておき、予想外の事態が発生した際には、密に連絡を取り合って対処するようにすべきであろう。第一第二ともに研究者として当然の心構えではあるが、改めて自分が凡事を徹底できているかを確認しておくべきである。

Linguistic Practices in Japanese Lesbian Communities: Identity Construction via Gendered Language

GONG Crystal　G30言語学・文化研究プログラム 博士前期課程２年

When I entered my master's program, my original research plan involved exploring the usage of prototypically gendered language and their indexical values in Japanese, such as first/second person personal pronouns, morphosyntactic features like sentence-final particles, and register as a resource for identity construction and negotiation within lesbian communities. While there was always a possibility for this to change due to the tumultuous process of doing research in a minoritized community such as that of lesbians in Japan, I applied for an ethics committee review with the intention of gathering data on prototypically gendered language. This project has undergone ethics review and accepted by the Graduate School of Humanities, Nagoya University, code NUHM-23-004 on May 5th, 2023. A consent form was given to participants prior to the start of the focus group that includes how much information participants wish to share, such as voice only or video recording, and they will have the option to withdraw at any point of the study. All participants were then debriefed at end of the focus group on the purpose of the study and given the option to withdraw or change levels of consent.

Two major factors played a role in preventing the possibility of this originally proposed research: the first was the recruitment of research participants, and the second was the low frequency of first/second person personal pronouns and certain gendered sentence-final particles like wa, zo, and ze in speech. A significant number of participants and data, the creation of a corpus even, would have been necessary to sufficiently analyze these variables. Therefore, I kept a flexible methodology wherein even if I was limited by the number of participants or number of tokens of prototypically gendered language, I could analyze an alternative aspect of language as related to lesbian identities, communities, and narratives that were central to participants' conversations and interactions. This was encompassed within the debrief participants received after participating in my research, as I did not specify that I was focusing specifically on prototypically gendered language, but rather that I would be investigating language in relation to lesbian identities, as mentioned in my ethics review application on the topic of deception.

This research focuses on a taxonomy of three gender-based identity terms, *femu*, *chûsei*, and *bô(isshu)*, and investigates how it operates as a point of reference in constructing lesbian communities and identities, yet simultaneously acts as a nebulous constraining diverse expression of one's gender and sexuality through the replication of hegemonic powers. Despite the frequent deployment of *femu*, *chûsei*, and *bô(isshu)*, their significance within lesbian lives in constructing linguistic realities have yet to be properly researched. Similar gender-based categories, such as English butch and femme have provided insight to the role stereotypes play in building authenticity and identity, thus, it too is essential to consider the socio-cultural contexts such as a Japanese one that are typically overlooked in larger lesbian studies.

Data was collected over the summer of 2023 in Nagoya through a mix of focus groups and interviews then subsequently analyzed using a sociocultural linguistics approach to analyze the signification of these terms in interaction by drawing from metalinguistic discourse and participants' embodied experiences within lesbian spaces. At first glance, this tripartite taxonomy seems rooted in seemingly binary terms, but participants were critical of broad definitions. While they personally did not identify with these terms, they could categorize themselves based on physical appearances and how an externalized gaze places them into certain taxonomies in contrast to diverse interpretations of individual identities. Inter- and intra-community constructions of this taxonomy further reveal a complex entanglement these terms work within as a linguistic resource for manifesting both connections and divisions.

六朝古小説文献に関する調査
――張華『博物志』、郭璞『玄中記』、任昉『述異記』を中心に

郭 姣　　中国語中国文学分野・専門 博士後期課程２年

はじめに――本研究の背景　中国古典小説の発展史において、六朝時代の古小説はその最初のピークであり、多くの優れた作品が生み出され、後世に大きな影響を与えた。中国でも日本でも、多くの学者や文人がこれらの作品を閲覧した上で、その内容に影響を受けて新たな作品を創作したり、それを研究対象として新たな学術著作を撰述したりしてきた。しかし、長い歴史の流れの中で、これらの古小説のテキストは散佚し、深刻な闕損が生じた。加えて、中国における研究関心が白話小説に集中している現状のため、これらの文言小説とその後の展開について、有効な考察がなされていなかった。

西晋・張華（232–300年）の『博物志』、東晋・郭璞（276–324年）の『玄中記』、及び斉梁・任昉（460–508年）の『述異記』、この六朝古小説の三つを中心として取り上げる博士論文『古小説と六朝人の知的世界』の執筆ため、この三つの文献について全般的に考察して整理するが必要がある。さらに、文献を充分把握した上で、文学者であり小説家でもあったこの三人の詩文作品とそれぞれの小説を結びつけ、古小説の役割と性質をより明確にし、六朝時代の文人の知的世界を窺うことを意図している。

調査の意義　この三つの古小説は、中国でも日本でも広く流伝し、それぞれに数多くの貴重な古典籍が残されている。また、長い受容史の中で、日中双方の学者による研究成果がある。しかし、地理的な障壁のため、両方の文献資源は有効活用されておらず、研究者間の交流も不足している。本調査では、できるだけ多くの中国と日本の文献を組み合わせ、東アジア的視点からこの三つの流伝と受容を解明している。

調査経過　本プロジェクトでは二回に分けられて調査を行った。まずは2024年 1 月から 2 月にかけて、日本国内の名古屋市、東京都、京都市の六つの図書機関を訪問した。その後は 5 月で、中国の上海市、南京市、杭州市、北京市の五つの図書機関に行った。調査対象のほとんどが古書であり、貴重書も多いため、上記図書機関への事前連絡や日程予約の必要がある。例えば、静嘉堂文庫（世田谷区）と浙江図書館（杭州市）は週に 1 日しか開館していないので、少なくとも 1 ヶ月前に連絡しなければならない。そして、先方の規定によって閲覧申請書に必要事項を記入し、ときには紹介状を準備した。中国の諸図書館を訪問したのは 5 月18日から31日までだが、実際に連絡を取ったのは 3 月であった。中国科学院文献情報中心（北京市）と天津図書館を訪問する予定だったが、前者は修理中、後者はすでに 5 月の予約がいっぱいで、断念せざるを得なかった。また、時間と費用を節約するため、各図書館に正式の閲覧希望資料リストを提出する前に、インターネットでできるだけ多くの関連資料を検索し、事前に読んでおくという準備をしていた。

調査内容　以下、調査対象による調査内容の詳細を述べる。

【張華『博物志』について】現存する張華『博物志』は原本ではなく、後世の人々が集録したテキストである。三十八の小分類を持つテキストと、分類のないテキストに大別でき、通常「有目本」と「無目本」と呼ばれている。この二本の条目数は同じだが、条目の順序は異なる。通行しているのは「有目本」で、明清時代の多くの叢書、例えば『稗海』『百家名書』『格致叢書』『古今逸史』『秘書廿一種』などに収録されている。この「有目本」系統において、最も古く代表的なのは明・弘治十八年（1505）刻本である。「無目本」系統において、最も代表的なのは清代の黄丕烈が出版した『士禮居叢書』本で、黄氏は「汲古閣所蔵の宋代の連江の葉氏刻本」から影刻したと述べた。

静嘉堂文庫に所蔵されている、江戸時代末期の岡本保孝の作った『博物志考』を閲覧した。岡本氏は、「有目本」と「無目本」との条目の順序を比較し、また一部の条目の下に注釈を付している。岡本氏の研究成果は、より多くの文献を入手できる現代研究者の成果には及ばないが、二つのテキストの比較研究は新たな方

向性を示すものかもしれない。加えて、その岡本氏の著作は、張華『博物志』の版本の多くが日本において幅広く流通した事実を反映し、その受容史の中で無視できない存在である。

また、『博物志』の続作も数多く日本に流伝されている。一般に、諸叢書が『博物志』を収録したときには、南宋の李石『続博物志』も一緒に収録した。ほか、明代に出版した『広博物志』・『広博物志増刪』も日本にあった。今のところ、後者は中国国内ではまだ見つかっておらず、ハーバード燕京図書館と京都大学人文科学研究所附属人文情報学創新センターにのみ所蔵されている。ハーバード大学所蔵の電子ファイルを入手した後、京都大の所蔵と比較してみたところ、後者の方が印刷の質が良いことがわかった。この『博物志』の続作の一つは今後の研究の方向性の一つになりうる。

【郭璞『玄中記』について】今回の調査対象の中で、郭璞『玄中記』は現存する文献資料が最も少ないものである。張華『博物志』と同様、その原本がすでに亡佚して、現存するのはすべて後世の人による集録されたもので、しかも最古の集録本は清代のものでしかない。現在、最も広く使われているテキストは、近代の学者である魯迅が集録した『古小説鉤沉』本（71条の佚文）である。

中国国家図書館（北京市）に所蔵されている明・万暦年間の書画家である莫是龍の書いた『崇蘭館法帖』巻三に収録される『玄中記』からの「北海之蟹」の一条を閲覧すると、明人の『玄中記』への関心が少し窺える。また、明末の毛扆『汲古閣珍蔵秘本書目』には『玄中記』（精抄）一巻本と著録されることから、少なくとも明代末には、『玄中記』集録本のものも存在していたことが分かった。ただ残念なことに、明人によるそのような集録本はもはや残っていない。

【任昉『述異記』について】現存する任昉『述異記』は二十余種あり、今回の調査でほとんどを閲覧した。そのうち、最も古いのは中国国家図書館に所蔵されている邢参抄本であり、書き手としてのこの邢参は明・弘治年間の文人である。また、明末清初の学者である葉樹廉は、1662年（壬寅）にその邢参抄本を参考して、他の三本の任昉『述異記』を校正した。そのうち二本は明・嘉靖年間の単行刻本で、現在は中国国家図書館にも所蔵されている[1)]。もう一本は明・万暦年間の『広漢魏叢書』本で、現在は上海図書館に所蔵されている。

もう一つ注目すべきは上海図書館に所藏される、「味経書屋」の朱文方印を押す清代抄本であり、その中で南宋刻本への手がかりが最も多く残されている。北宋慶暦四年（1044）に書かれた後序や、「臨安府太廟前經籍舖尹家刊行」という南宋刻本からの刊記があるに加えて、宋代の避諱字も多くある。そして、最新の避諱字――宋高宗趙構の「構（搆）」によれば、現存するすべての任昉『述異記』の祖本は、南宋初期に尹家書舗による出版物であることが推定できる。

しかし、この「味経書屋」の朱文方印の持ち主、すなわちこの抄本の書き手あるいはコレクターの由来は不明である。諸図書館の関連蔵書を調査した結果、「味経書屋」印を使用したのは清代の劉喜海及び張蓉鏡があることが分かったが、その二人の「味経書屋」蔵書印は上記の方は全然違う。ほか、版心の右下に「味経書屋写本」の表記が書かれている複数の古典籍もあるが、おそらくこの上海図書館所蔵の「味経書屋」清抄本とは無関係であろう。最終的に、この抄本の由来がわからなかったが、上記の三つのどれとも関係がないことが結論と言えるだろう。

むすびに――堅実な基盤づくり　今回の調査を通じて収集した文献資料は、博士論文の堅実な基盤となるものである。そして、この調査の中で得たすべての経験は、自立し成熟した研究者になるための堅固な土台を築くものでもあるだろう。計画力、実行力、実証的な研究の進め方、これらすべてが今後実践していかなければならない学術研究の原則である。

1）『中国古籍総目』、『中国古籍善本書目』、『北京図書館古籍善本書目』によれば、この二つは「清葉樹廉手校原本」（請求番号 A01195）、「佚名録葉石君手校本」（請求番号06093）と別々に記録され、すなわち一つは葉氏本人が訂正したもので、もう一つは無名氏が葉氏の訂正を完全に書き写したものであるとされている。しかし、今回の調査を通じて、筆者はこの二本とも葉樹廉一人によって校訂されたものであると推論した。

Community and Memory in the Context of National Cinema in the Western Region: A Case Study of Fukuoka City Public Library Film Archive

GUTIERREZ Nayla B.　G30言語学・文化研究プログラム 博士前期課程２年

From the 1990s onwards, the city of Fukuoka and its local audiovisual dissemination policies flourished in the shape of an international film festival with an Asian focus (“Focus on Asia Fukuoka International Film Festival”) and the Fukuoka City Public Library Film Archive, one of only five national film archives in Japan. The festival was inaugurated in 1991 and lasted until 2021, while the Archive was founded in 1996, and still exists. As my research interests relate to the audiovisual and cinema, I was deeply intrigued to understand how this cinema network was established. Mainly, I wanted to explore the relationship between such a network and the shaping of cultural memory in this particular Japanese region and its distinct features. I was interested in a regional approach that would counter Tokyo-centric studies to understand the contributions this Film Archive has made in the local community regarding the national and regional cinema promotion and exhibition.

For this purpose, I conducted fieldwork in the city between the latter half of 2023 and early 2024, to learn from personal experience how the cinema circuit there was functioning today, especially after the disappearance of the Film Festival. Before I actually went to the place I was under the impression I would find a vibrant cinema going community in both commercial and alternative screening spaces.

After my research, which involved archival work *in situ*, participant observation at smaller-scale film festivals such as “Fukuoka Asia Film Festival”, and detailed conversations with individuals closely related to the promotion and sustainment of alternative spaces of cinema (of which the Film Archive is part), I got the opportunity to listen to amazing, fond memories of people who remember how the Festival and Archive were created, and fascinating anecdotes of how the cinema community was so active in those days. Including how these activities helped people in the city better understand Asia and Japan through cinema and strengthened commercial and intercultural exchanges with other Asian regions.

Unfortunately, while visiting the current screenings and the festival scene, I realized today’s reality is a bit different. At Fukuoka, the Archive and similar exhibition spaces are experiencing a problem of aging and declining audiences, which they are considering how to solve soon. They have a stable number (albeit not too big) of audiences at their two exhibition halls, Cine-lá (entrance fee) and the mini-theater (free entrance). However, the majority of the patrons are elderly.

Finally, the Film Archive—a member of the renowned International Federation of Film Archives (FIAFF-continues to be a very prestigious and efficient institution in terms of preservation and collection, two of their three pillars (the other one is exhibition). From my findings and thanks to getting access to the Archive and its vaults, I was able to see that their film preservation standards are indeed rigorous. Their collection is very varied, with not only Japanese films but a large collection of Asian films, and even films from other countries and television shows from local TV stations.

サガダ町における伝統豊穣儀礼（Begnas di Yabyab）及び米国聖公会による葬送慣習（Panag-Apoy）の調査と分析

原 真由美　　文化人類学分野・専門 博士前期課程２年

調査概要　本プロジェクトは、フィリピン北部の山岳地帯に位置するサガダ町における土着のアニミズム信仰とキリスト教の信仰の実態を把握し、キリスト教の流入による土着文化への影響を現地調査によって明らかにしたものである。調査結果は、フィリピンにおける葬送儀礼の変容に関する人類学的研究をテーマとした修士論文の、外来宗教の流入による在来信仰への影響に関する考察の基盤となった。本報告は、2023年12月７日～12月11日の期間内に名古屋大学フィールド調査助成プロジェクトを受けて実施した、コルディレラ州マウンテン県サガダ町での参与観察および聞き取り調査、ケソン市のフィリピン大学ディリマン校付属図書館での文献調査に基づくものである。

調査方法　調査は英語、タガログ語を用いて実施した。インフォーマントの語りをスムーズかつ正確に理解するため、必要に応じて、タガログ語を母語とした調査同行者（報告者母）による英語およびタガログ語のサポートを受けた聞き取りも行った。詳細な調査内容、調査地の情報、インフォーマント（情報提供者）については表１を参照されたい。また、調査では、助成によって貸与されたICレコーダー（SONY・ICD-PX24）、デジタルカメラ（CANON EOS・M200）、デジタルビデオカメラ（PANASONIC・HC-W580）を用いてインタビューや儀礼の様子を記録した。

表１　調査詳細

日　程	調査内容	調査地	インフォーマント
2023/12/8	キリスト教流入以前のサガダの儀礼に関する聞き取り調査	・ガンジュアン博物館 ・聖メアリー教会附属学校	・博物館館長（30代／男性） ・聖メアリー教会附属学校校長（年齢不明／女性） ・元サガダ町長（年齢不明／男性）
2023/12/8	聖メアリー教会附属学校創立記念祭の参与観察	・聖メアリー教会 ・聖メアリー教会附属学校	・聖メアリー教会附属学校校長（年齢不明／女性）
2023/12/8, 9	他界観、死生観に関する聞き取り調査	・筆者宿泊施設 ・インフォーマント自宅 ・ガンジュアン博物館 ・観光ツアーの道中	・博物館館長（30代／男性） ・筆者宿泊施設職員（30代／男性） ・ワイン製造業男性（50代／男性） ・観光ガイド（年齢不明／女性）
2023/12/11	サガダの文化に関する文献調査	・フィリピン大学ディリマン校付属図書館	―

結果　サガダ町では在来信仰のアニミズム及び祖霊信仰と、18世紀以降流入したキリスト教が併存していることが儀礼の観察から考察できた。毎年11月に開催されるキリスト教のフィリピン聖公会墓地で行われる死者を悼む儀礼 *Panga-Apoy* では、聖公会の儀礼で通常使用されるキャンドルに代わり、在来信仰の儀礼で供犠用の動物などを焼く *saleng*（松の木）が使用されていることが聞き取り調査によって明らかになった[1)]。また、12月８、９日に開催された聖メアリー教会学校サガダ校創立119周年記念祭では、教会や附属学校で伝統儀礼を模したパフォーマンスが行われたほか、在来信仰の儀礼で供儀として用いられる *Etag*（塩漬けの豚の燻製）が提供された。このことは在来信仰とキリスト教の２つの進行の儀礼が地続きであることを示唆していると考えられる。

他方、アニミズムの思想に基づいた伝統豊穣儀礼である *Begnas di Yabyab* は10月末に開催予定であったが、

1）元サガダ町長による情報、2023年12月８日に聖メアリー教会小学校にてインタビュー。

延期となった。観光客も多く訪れる儀礼であったが､町の年長者の葬送儀礼のために延期となったことから、葬送儀礼と観光事業の複雑な関係性が認められた。調査以前はサガダ町の伝統埋葬法の *Hanging Coffins* を中心に考察を進めていたが、今回の調査で実施した他の儀礼の観察を通して、修士論文の主眼であるフィリピンの葬送儀礼や伝統文化の変容について多角的に検討できた。

フィリピン大学附属図書館では、日本の大学図書館に所蔵がない資料を閲覧した。歴史研究家であり宣教師でもあったウィリアム・ヘンリー・スコットの “A Sagada Reader” には、過去の在来信仰の実践の記述や、聖公会と在来信仰の接触があった際の所感が記されていた。これによって、修士研究に欠けていたフィリピン聖公会側の視点を補った考察ができた。

所感　今回の調査では、現地だからこそ出会えた予想外の展開や学びが多くあった。「10月末〜11月初頭に、在来信仰とキリスト教の関係を考察できる儀礼が開催される」と現地でお世話になっている方から声をかけられたことが今回の調査のきっかけとなったが、スケジュールの都合により現地での儀礼観察を実施することは叶わなかった。だが、その後も当初の目的を達成すべく、現地調査を行うために準備を精力的に進め、聖メアリー教会附属学校の創立記念祭での参与観察の機会を得た。創立記念祭では、 2 つの信仰が併存する興味深いパフォーマンスや風景が観察できたほか、町のさまざまな年代や職業の住民が集まる行事だったため、*Begnas di Yabyab* や *Panga-Apoy* に関する貴重な語りを聞くことができた。また、住民の方から別のインフォーマントや研究の参考となる場所を紹介され、予定外で嬉しい出来事に頬を緩ませながら紹介された場所に向かうこともあった。そこでは、修士論文の要となる興味深い語りを収集できた。この経験から、①余裕を持って計画を立てるために現地調査以外の期間に情報収集を行うこと、②調査の方針や今後が不安になっても調査ができるように積極的に動いてみること、③予定外をできるだけ楽しむこと、という調査への姿勢や心構えの重要性を再認識した。

むすびに　今回、調査に協力してくれたサガダ町の住民の皆さま、文献による情報収集のサポートをしてくれたフィリピン大学附属図書館のスタッフの皆さまに心から感謝申し上げます。特に、調査の実施を筆者が悩んでいた際、聖メアリー教会附属学校の創立記念祭を紹介してくださったN氏、聖メアリー教会附属学校校長のS氏、現地でサポートをしてくれた宿泊施設スタッフの皆さんや母には多大なご助言、ご協力をいただきました。本調査レポートの作成にあたり、校正や内容の確認にご協力いただきました校長のS氏、ガンジュアン博物館館長、そして私の父にも、重ねて感謝申し上げます。また、充実した調査を実施し研究に専念できたのは、名古屋大学フィールド調査助成プロジェクトの多大なる支援によるものです。厚く御礼申し上げます。

日本語母語大学生英語学習者の発話の複雑さと発話能力の関係

広瀬八重子　　英語教育学分野・専門 博士後期課程２年

はじめに　2023年度フィールド調査プロジェクトより実験謝金補助を受け、2023年9–12月に名古屋大学内で学部生の英語発話データ及び発話評価者の評価データを収集した調査の概観を報告する。本調査は、名古屋大学人文学研究科研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した。

調査の目的　名古屋大学学部生が、習得した文法や表現の知識を運用して英語で発話するための独自のタスクを用いて、対面で個別にデータを収集することを通して、英語発話の特徴を分析及び考察する。英語発話の言語構造、統語発達段階仮説（Ortega, 2009）に基づく特定文法項目（関係詞、疑問文、否定文）の使用傾向、評価者の評価の観点から分析し、発話の複雑さと聞き手の評価に基づく発話能力との関係を明らかにする。

調査方法　2023年7–11月に学内掲示や学部英語授業での案内を通して、全学部から参加希望学生（半年以上の海外経験を有さない者）を募った。実験室（図１）において、対面で英語発話データを収集した（録音用ソフトウェア：PRAAT version 6.1.42、マイクロフォン：MAONO HD300T 使用）。発話前に、実験内容を説明し、同意書への署名を求めた。次に、練習用タスクに続き、３種類の異なるトピックに基づく各３分以内の英語発話を録音した。発話後に、英語熟達度チェックテスト（Test Your English, Cambridge Assessment English）と事後アンケートへの回答を依頼し、学内で受験した TOEFL ITP スコアや他の英語検定試験のスコア等も英語熟達度を測るデータとして収集した。COVID-19の影響で、TOEFL ITP スコアをもたない参加者（４年生）が９名いたため、英語熟達度を測る手段を複数準備しておいたことが功を奏した。調査時間は約１時間（総英語発話時間：15分以内）で、終了時に謝礼（金券1,000円分）を渡した。

参加者　募集期間前半は夏期休業中で、参加申し込みは少なかった。秋学期開始後に、学部英語授業で本研究の内容や目的について説明させていただいたり、中央図書館を始め、学内の掲示板で案内したりすることで、実験内容に興味をもつ学生からの申し込みが増加した。参加者40名（男性15名、女性25名）の所属学部は図２の通りであった。学年は、１年生が21名と過半数を占めた。参加条件を「英語力や英語を話す機会の有無は不問」としたため、幅広い英語力の学生の参加があった（TOEFL ITP スコア：427–627、英語主専攻の学生０名）。参加者の42.5％（17名）は、日頃英語を話すことは全くないと回答した。実験開始時に、参加動機を口頭で尋ねたところ、「英語を話すことに普段取り組めておらず、苦手意識があるため、チャレンジしてみたかった」「実験の内容や方法に関心があった」という主旨の回答が多かった。

図３は、参加者が英語を話すことへの意識を５段階（１：とても苦手―５：とても得意）で回答した結果である。75.0％（26名）が、英語を話すことをとても苦手（1）または苦手（2）と回答していた。

図１　実験室

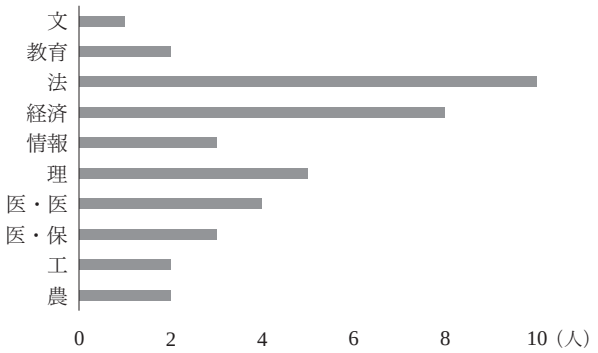


図２　参加者の所属学部

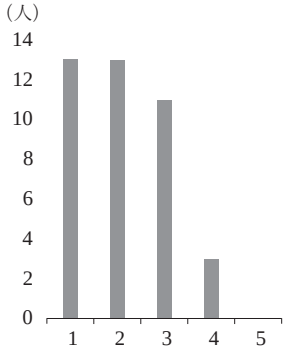


図３　英語を話すことへの意識

あなたの最も興味のある国について、英語で話してください。

英語で話す内容に、１から３の順で、説明を含めてください。

１）その国に興味をもったきっかけや、理由はなんでしたか。
２）その国で、今までに経験したことや、今後やってみたいことは何ですか。
３）その国出身の人に会って話す機会があったら、何を質問してみたいですか。

発話前の準備時間は**3分**です。

英語で話す時間は**3分以内**です。

図４　発話タスク例

発話タスク　英語発話中の文構造や文法項目の使用傾向を調査するために、3種類の異なるトピックについて、3分以内で発話を行うタスクを用いた（図4）。テーマは、日常生活や身近な問題に関連し、参加者間で使用表現の難易度の大きな差や、専門用語の使用が予想されない内容とした。また、調査対象とする文法項目や統語構造の産出されやすさや発話の展開の評価しやすさも考慮し、具体的な発話指示を設定した（図4　1)−3)）。さらに、日本語でトピックを示すことで、発話で使用する英語表現に影響がでないように配慮した。事前に、大学院生を対象に予備実験を行い、実験手順や録音状態の確認に加えて、トピックの内容や指示について、難易度や発話のしやすさを5段階で評価してもらい、タスク選定の参考とした。予備実験で収集した発話データは、後日、4名の発話評価者の事前説明や評価練習の際のサンプルデータとして活用した。

評価　2023年12月に、評価者（日本語母語高校教員2名、英語母語大学講師2名）に、TOEFL iBT Independent Speaking Rubric（ETS）に基づき、英語発話の録音データの評価（5段階）を依頼した。4名とも、日本で高校生や大学生への英語教授歴と英語発話の評価歴があり、名古屋大学学生の英語発話の評価に強い関心や意欲をもち、研究に協力して下さった。本研究では、名古屋大学学部生の英語熟達度を測るデータとして、TOEFL ITP スコアを収集し、参考としたため、スピーキング評価データの収集にも TOEFL ルーブリックを使用することとした。発話評価作業は、発話データ収集と同じ実験室で実施した。事前説明と評価練習を行い、評価方法や評価者間の結果の一致度を確認した。評価結果について、4名の評価者間信頼係数［Cronbach’s alpha］は、評価ルーブリックの全項目において0.8以上と高かった。

データ処理・分析　2024年1月に、音声データ（40名×3タスク）をテキスト（1次データ）にし、英語発話データ処理作業の経験のある大学院生4名に音声と1次データの内容の確認・照合を依頼した。1次テキストと4名の確認者の修正テキストとの一致語数割合は、98–99％と高かった。修正があった箇所は、再度音声を確認し、判断に迷う場合は別の確認者と相談の上、2次テキストデータを作成した。さらに、発話中の繰り返された語句、不完全語、フィラーなど、本研究の発話分析で使用しない部分を削除した3次テキストデータを作成した。音声データを扱う中で、PRAAT で録音したデータが途中で切れている1ファイルが見つかったため、IC レコーダーの音声データを一部使用することとなり、バックアップ・データの役割の大きさを再認識した。データ分析に、R version 4.3.3（R Core Team, 2024）を使用した。

結果概要（2023年度末までの分析）　言語的な要素の数や種類に関わる複雑さと、評価者の評価に基づく英語発話能力の関係について、9分以内の発話の言語特徴、熟達度スコア［Test Your English］、評価値の記述統計を表1に、スピアマン順位相関係数を表2に示す。評価値は、TOEFL iBT Independent Speaking Rubric の評価項目のうち、音声面や内容の展開の評価を除く、文、文法、語彙・表現の使用に関する評価項目［Language Use］の評価合計（3タスク、5段階、評価者4名）を示す。本研究のタスクには、節表現や句

表現の使用を促す指示が含まれており、調査対象項目に、(2) 発話単位中の従属節割合と (3) 発話単位中の等位句割合を含めた。図 5 は、(2) 発話単位中の従属節割合［DC_T］と評価値［lu_ev］の関係を、図 6 は、(3) 発話単位中の等位句割合［CP_T］と評価値［lu_ev］の関係を示している。

表１　記述統計（参加者40名）

	平均値	標準偏差	中央値	最小値	最大値	歪度	尖度	標準誤差
(1) 発話単位平均語数	11.95	2.28	12.12	7.55	20.05	0.94	2.09	0.36
(2) 発話単位中の従属節割合	0.51	0.18	0.51	0.19	0.83	0.06	−1.04	0.03
(3) 発話単位中の等位句割合	0.26	0.15	0.24	0.05	0.88	1.85	4.95	0.02
(4) 語彙多様性（MTLD）	42.56	7.84	41.80	23.97	59.65	0.19	−0.43	1.24
(5) 熟達度スコア	16.90	2.95	16.50	11.00	22.00	0.09	−0.80	0.47
(6) 評価値	41.42	8.23	43.00	28.00	59.00	0.22	−0.75	1.30

表２　相関係数（参加者40名）

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)
(1) 発話単位平均語数	—					
(2) 発話単位中の従属節割合	.72***	—				
(3) 発話単位中の等位句割合	.45***	.22	—			
(4) 語彙多様性（MTLD）	.18	.29	−.04	—		
(5) 熟達度スコア	.61***	.42**	.32*	.01	—	
(6) 評価値	.38**	.15	.20	−.07	.49**	—

$^{*}p<.05$, $^{**}p<.01$, $^{***}p<.001$.

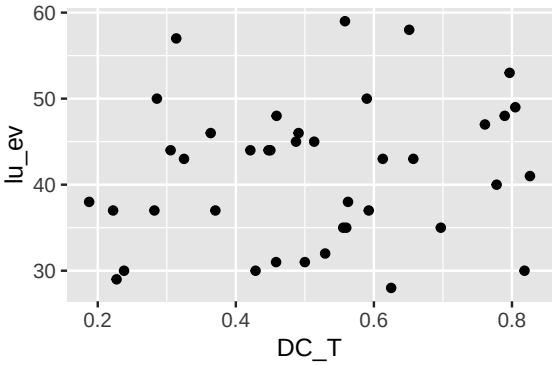


図５　従属節割合［DC_T］と評価値［lu_ev］の関係

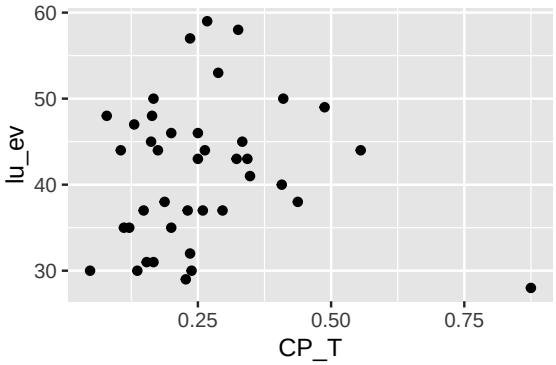


図６　等位句割合［CP_T］と評価値［lu_ev］の関係

対面実験によるデータ収集の意義　2023年度から、全面的に対面実験によるデータ収集が行える状況となり、今回の調査で得られた収穫はとても大きかった。教室環境と異なり、他の学生に声や内容を聞かれず、与えられたトピックについて英語で自分の意見を述べることに集中しやすい環境で、録音状態のよいデータを収集することができた。また、音声やテキストのデータには表れない、発話者の表情や様子を直接観察することができ、英語スピーキングに対する悩みなどを聞く機会にもなった。今後、日本語母語大学生の英語発話の特徴の分析と考察を進め、発話中の言語的要素、構造の複雑さ、文法・語彙の知識の運用が、評価者の評価に及ぼす影響やその要因を明らかにしたいと考える。今回、フィールド調査プロジェクトに参加させていただき、主指導教員の杉浦正利教授はじめ関係の先生方、研究協力者、調査参加者など多くの方々から、研究を推進する力を頂戴できたことに、心より感謝申し上げたい。

参考文献

Ortega, L. (2009). Sequences and processes in language learning. In M. H. Long, & C. J. Doughty (Eds.), *The Handbook of Language Teaching* (pp. 81−105). Wiley-Blackwell. https://doi.org/10.1002/9781444315783.ch6

大正期における貞明皇后の軍事活動――未公刊の宮中・軍の関係史料の調査

頼 宇韓　　日本史学分野・専門 博士前期課程２年

はじめに　明治国家下の女性は、政治と軍事領域から排除されるべき存在だった。しかし、これは近代女性が歴史的現実の中で政治・軍事とは全く関係のない存在であったことを意味しない。むしろ、戦時中の女性には、暴力を受けた被害者の側面だけでなく、軍事に積極的にかかわるなど暴力に加担した加害者の側面もあった。特に女性と近代天皇制・戦争との関係を論じた時、近代皇后は別格の存在である。軍事分野においても、彼女たちは軍事儀式にも出席し、多くの軍人と交流を持った。その中で大正天皇の妻である貞明皇后は、国政・軍事に対して強い関心を示した。つまり、近代日本においては、女性である皇后も男性である天皇などと同様に、特定の軍事的役割を果たすことができたのである。

調査背景と方法　近代皇后に関する先行研究においては、主に昭憲皇太后と社会事業問題に関心が寄せられ、軍事視点からの考察はほとんどなされていない。この不足を招いた一つの要因は、史料の制限だと考えられる。軍に関する公文書の相当部分が戦火で焼失されたか、敗戦時に焼却された。さらに、残された天皇・皇后の言動を詳しく記した側近・政軍要人の史料は数量が限られている。また、公文書は宮内公文書館のような機関に所蔵され、公刊もデジタル化されていないものも多く、十分に活用されているとは言い難い。

本プロジェクトは以上のような背景を踏まえ、「大正期における貞明皇后の軍事活動」をテーマとする。そこで、宮内公文書館・図書寮文庫や国立国会図書館憲政資料室に所蔵されている貞明皇后関係の未公刊の宮中・軍関係史料を調査・分析し、その内容を分析する。

調査日程・内容など　**調査先①：宮内庁書陵部宮内公文書館**　皇室と宮内省・宮内庁に関する公文書はここに数多く所蔵されている。宮内庁の部局とはいえ、宮内公文書館は一般開放とされる皇居東御苑に置かれ、所蔵史料も一般の利用に供されている。申請と利用の方法自体は便利であり、事前に電話で閲覧者に関する情報を伝え、閲覧したい史料・希望の時間を確認した上で予約を取れば誰でも利用できる。だたし、コロナ禍以降、感染予防対策として、同館は一日最大三名の隔日予約制を取っている。三回の調査（７月12日、同18日、11月２日）においては、毎回一週間ほど前に電話で閲覧の予約を取った。

ここでは、貞明皇后の軍事活動や政軍要人との接触に関わる情報の収集を念頭に、皇后の伝記である実録の草稿である「貞明皇后実録　稿本」（299点）、その編纂史料である「貞明皇后実録　編纂資料」（40点）、天皇・皇后の外出（行幸啓）等の決定・展開に係る決裁や通知等関係書類が含まれる「幸啓録」（167点）の調査を行った。史料の点数は多いものの、事前の私費での予備調査で「貞明皇后実録」の記事と「幸啓録」の目次を閲覧、それを整理した上で本調査に臨んだため、おおよそ順調に進めることができた。

「貞明皇后実録　稿本」には、実録の草稿のほか、編纂時に収集された「侍従日誌」「侍従武官府日誌」「典侍日記」など、未公開の一次史料の皇后関係記事も収録されている。それを用い、皇后による軍事行啓などの活動の情報を年ごとに整理して表にし、その特徴と変化の様相を明らかにした。一方で、「貞明皇后実録編纂資料」の中には、皇后関係者の談話聴取・書類・手記や新聞雑誌の皇后関連記事、写真が確認できた。それを利用して、関係者の視点から皇后の活動の実態とイメージ、そして世間からの皇后の評価を分析することが可能になった。なお、皇后が軍事関連施設・儀式に行啓した時、その進行過程・下賜・警備をめぐって、宮内省各部局や行啓先が作成した原案書類が「幸啓録」に収録されていることを発見できた。ここから、行幸啓の成立過程、天皇・皇后を支えた各官庁の作業実態及び天皇・皇后自身の意向の反映などを垣間見ることができる。

調査先②：国立国会図書館憲政資料室　ここには日本政治史・憲政に関する史料、アメリカ軍の日本占領関係史料及び日系移民関係史料が所蔵されている。特に日本政治史・憲政に関する史料について、これまで

出版されていない政治家・軍人の日記や書簡などの私文書が多い。そのため、その利用にあたっては、プライバシーの保護や人権、著作権に配慮する必要がある。ここを利用するためには予約は不要で、その場で同館の利用者本登録と利用者カードの発行を受け、さらに同室の閲覧者登録の手続きをする必要がある。なお、ここは原則として撮影とスマホ・カメラの使用は禁止である。もし史料をコピーしたい場合、同館の複写サービスを利用するしかない。

ここでは7月13日と同18日に二回で、「牧野伸顕関係文書」・「斎藤実関係文書」・「四竈孝輔関係文書」を対象として調査を行った。元宮内大臣・内大臣である牧野の関係書類には、大正・昭和期の詔勅案と宮中関係の史料が多い。特に調査中、十数点の皇后の軍事行啓への陸海軍の報告、侍従武官人事について皇后の意見などを確認できた。さらに明治・大正期で長い間海軍大臣を務めた斎藤の関係文書からは、皇后の軍事行啓を要請した海軍側の思惑や交渉過程、皇后への戦況報告に関わる数点の書類を発見できた。大正期に海軍侍従武官として大正天皇夫妻に仕えた四竈の関係文書では、主に大正期の日記を閲覧した。その一部はすでに『侍従武官日記』（芙蓉書房、1980年）として公刊されたものの、未刊分に宮中勤務の記録や大正天皇の病状、天皇の公務を代行していた皇后・皇太子の様子と四竈がそれについて考えた内容も発見できた。

これらの史料の収集と解読を通じて、世間には伝わっていない宮中の日常、公文書などの事務的な記録には見えない天皇・皇后の肉声、さらに天皇・皇后に対する同時代の政治家・軍人の見方や本音を把握することができた。なお、これらの史料はくずし字で書かれたものが多い。その解読には、普段参加している学部のくずし字演習が役に立った。また、一次史料の原本とマイクロフィルムのスキャナー・リーダーを扱うことで、これまで大学で学んだ古文章・史料学の知識を実践できる機会を得た。この点については、大変貴重な経験だった。

調査の成果・結論　近代皇后たちは、①内外の軍人・軍属の応接、②軍儀式・施設への行啓、③出先部隊・事故に対しての侍従武官差遣、④慈善・後方支援事業への支持、⑤軍事活動・品物の見学など、幅広い軍事関連活動を展開していた。明治天皇の妻である昭憲皇太后によって確立された近代天皇制において皇后が果たすべきこうした軍事的役割は、貞明皇后も基本的に受け継いだ。

貞明皇后は、大正期の前半には、軍の士気を鼓舞し、軍と皇室の絆を強化する役割を大正天皇・裕仁皇太子とともに担った。そして大正期の後半においては、天皇の引退など新たな状況に直面する中で、皇后は徐々にその存在感を高め、一部の政治家・軍人の理解と支持を得て、軍事関連活動の範囲を拡張していった。貞明皇后自身もこの過程で、軍事、特に海軍への関心を高め、それを自分の軍事的役割へと転化していく。

調査の難点・不足　第一に、調査できなかった箇所があることである。調査を計画している段階では、宮内庁書陵部図書寮文庫への調査も日程に組み込んでいた。ここは、皇室に伝わってきた古典籍・古文書類を中核とする史料を所蔵している。史料の閲覧は事前予約制であり、場所と開館時間は宮内公文書館の場合とほぼ同じであるが、申請・利用方法が異なっている。ここでは、書面郵送による申請とインターネットからの申請がある。調査を予定していた史料は、皇后と三男である高松宮宣仁親王の往復書簡が収集されている高松宮家蔵の「貞明皇后御書簡」（73点）である。宣仁親王は海軍軍人で、その中に皇后の海軍に関する評価と軍人皇子の教育に対する意見が含まれる可能性は高いと考えた。

そして、調査予定日（11月2日の一か月前に、閲覧申請フォームを記入して図書寮文庫へ送信した。しかし、先方からは「個人情報が含まれる可能性の高い資料」という理由から閲覧ができない旨の返答があった。親子の間の通信記録には、個人情報が含まれる可能性は確かに高い。そのため、最後に図書寮文庫への調査を断念せざるを得なかった。

第二に、実際の調査に余裕をもって取り組まなかったため、後から史料の分析が大変だったことである。今回、宿泊代を節約するために、一回目の調査を除いて名古屋⇔東京で日帰り調査を行った。調査の時間が短く閲覧したい史料の点数も多いので、毎回調査先の閲覧室に一日中こもって閲覧・撮影・筆耕をしていた。

その結果として急いでいたため、一部の史料の撮影がおろそかになり、結果的に事後の判読が困難になったため、分析に悪影響を与えた。余裕を持って調査に臨み、撮影した史料をその場で再確認することは、今回の調査の反省点であり、今後の調査にも意識すべき点である。

調査の感想　まずは、調査内容・成果が必ずしも事前の予想どおりにはいかないことを痛感した。事前には史料のタイトルと目録しか見ることができないため、その内容を具体的に特定することはできず、予想とは異なる史料を閲覧することもあった。調査の時に欲しいと事前に考えていた史料が見つかるとは限らない。そのため、実際に史料を閲覧した後、史料の内容やそれから導かれた結論は事前の予想と異なる可能性が常にある。

一方で、それは調査の過程で、新たな史料を発見し、それまで考えもつかなかった新たな結論が出てくる可能性が高いことをも意味する。したがって、先入観をもって史料を閲覧するのではなく、史料の文面を最初から一字一句丁寧に解読し、あるいは複数の史料を組み合わせて読むと、新たな発見を導き出すことができるかもしれない。歴史の面白さを感じる瞬間は、まさにここにある。

第二に、事前に周到な準備を行っていくこと、一方で臨機応変に対応することの重要性を感じた。宮内庁書陵部宮内公文書館・図書寮文庫のように、事前予約制を取るだけでなく、開館時間や入館者数に制限を設けている調査先は他にもある。さらに、プライバシーに関わる史料などは目録に掲載されていても審査の結果閲覧できない場合もある。調査先や史料によって、早めに調査を申し出して、閲覧に関する審査を受ける方が良い（一週間〜一か月ほど前）。閲覧ができなかった場合は、代替可能な史料や調査先を早めに探し、それを補完する必要がある。余裕のある調査計画を練り上げるとともに、予定どおりに進まなくなった場合に計画を変更する可能性も覚悟しておく必要もある。

参考文献

石田暁子・境野由美子（2004）「国立国会図書館憲政資料室の概要」国立公文書館編『アーカイブズ』17、pp. 82–85.
小田部雄次（2010）『昭憲皇太后・貞明皇后――一筋に誠をもちて仕へなば』ミネルヴァ書房.
片野真佐子（2003）『皇后の近代』講談社.
堀口修（2014）「『貞明皇后実録』の編修について」明治聖徳記念学会編『明治聖徳記念学会紀要』第51号、pp. 252–290.
丸山寿典（2014）「宮内古文書館について」国立公文書館編『アーカイブズ』52、pp. 50–55.

在日中国人ニューカマーの渡日経験と中国海外移民様式の変化について

劉 亜銘　文化動態学分野・専門 博士後期課程２年

調査概要　在日中国人は1978年を境にして､「オールドカマー」と「ニューカマー」に分類される。ニューカマー中国人が急増し始めたのは90年代に入ってからであり、2010年代初頭と2020年前後に一時的な停滞があったものの、基本的に持続的に増えてきたと言える。特に2010年からは若年層のニューカマー中国人がほぼ持続的に増加してきたが、彼らの生活実態に対する社会学的研究は限られている状況にある。ニューカマーを対象とした研究は膨大な蓄積があるものの、「ニューカマー」というカテゴリーの内部でも時期によって状況が変化している。その実態に対する質的な考察が十分ではない。本研究はここ10年間に来日した20～30代のニューカマー中国人に着目し、まずかれらの来日動機にどのような変化と特徴がみられるかを明らかにする。それから、日本での日常生活においてホスト社会とどのようなかかわりを持ち、自分の生活の営み方をどのように捉えているかを個々人のライフストーリーを通して考察し、ホスト社会との関係のあり方を分析していく。

調査対象　法務省のデータによれば、本稿の対象となるニューカマーの中に「留学」と「専門的・技術的分野」にあたる在留資格者が多く、20～30代の若年層が大半である。調査者は2020年から東京と名古屋の大学を中心に、中国出身の留学生に聴き取り調査を行ってきたが、今回の調査を「専門的・技術的分野」の在留資格者を中心に展開した。

調査方法　埼玉県川口市にある「芝園団地」は若年層の在日中国人を中心とする在日外国人が住民全体の半分以上も占める点から全国で特徴的である。ニューカマー中国人は個々人にネットワークを形成している場合が多いため、極めて少数な在日中国人ニューカマー集住地域である。団地との接点をつくるために、団地の学生ボランティア団体「芝園かけはしプロジェクト」のメンバーに登録し、団体活動と自治会に参加しながら、団地と周りの町のコミュニティ状況を考察する。

聴き取り調査は団地や近所の中国人住民16人、日本人住民 4 人に協力してもらった。そのうち、ニューカマー中国人にあたる者が10人、残りがその家族や80年代生まれの人である。対象者の基本情報以外、来日経緯や在日生活に対する満足度、団地での居住状況、住民間の交流などについて半構造化インタビューを実施した。 8 月下旬に予備調査を 1 回行い、10月上旬に 2 回目の調査を行った。

結果と考察　芝園団地は最初から転居率が高く、1990年代末には空き部屋が多かった。外国人住民が現れたのは1997年からで、2010年代に入ってその増加が激しくなった。2015年になると、ついに住民の半分以上が外国籍を持つ人々となり、その比率は2023年現在で約 7 割にまで上がっているという。外国人住民の構成を見ると、移住者の大半が80年代・90年代生まれの中国出身者である点が最初から特徴的で、現在も変わっていない。ただ、その中身を見ると、最初の移住者には中国本社から海外へ転勤する IT 系社員が多かったが、ここ数年はより多様なケースが見られるようになったと言える。それから、中国出身者だけでなく、ここ 1 ～ 2 年でベトナム、フィリピン、インド、タイ、パキスタンなどの出身の住民も急速に増えてきたと見られる。

移動様式に関して2010年代以降来日するニューカマーは経済面の動機が後退し、かわりに日本の生活様式や留学生活への憧れ、電子メディア上で触れた日本文化への興味というソフト面の要素、あるいは本社からの海外転任など個人レベルの要因が多く見られた。「留学生」を対象とした既済調査の結果とほぼ同じ傾向を見せている。

ホスト社会との関係について、まず、多くのニューカマーは日本の社会・生活文化を認知し、ある程度受け止めており、表立った対立や矛盾はみられず、溶け込んでいる側面がみられる。一方、日常生活において

ホスト社会とは浅い関係を維持しており、それを深めることに興味を持たない状況もみられた。このように、若年層のニューカマー中国人は日本社会に「共存」程度の統合はできているが、「共生」まで実現できたとはいいがたい。

その原因に複数の要素が考えられる。「日本人も私たちとコミュニケーションを取ろうとしたがらないでしょう」というように、ホスト社会へのステレオタイプや自らの体験によって消極的な溶け込み方につながっていると聴き取り調査でわかった。それから、ホスト社会と弱いつながりを持つ状況を「分断」と捉えず、ごく普通の生活スタイルとして認知されているケースもあった。SNS などの電子メディアを介した関係維持のほうを優先し、オフラインの生活空間における社会関係の需要が後退したと考えられる。

参考文献

藤田結子（2008）『文化移民――越境する日本の若者とメディア』新曜社.
小林多寿子・浅野智彦（2018）『自己語りの社会学――ライフストーリー・問題経験・当事者研究』新曜社.
李文（2015）「中国人留学生の友人ネットワーク」『同志社社会学研究』19: 47–63.
宮内洋・好井裕明（2010）『〈当事者〉をめぐる社会学――調査での出会いを通して』北大路書房.
永野武（1994）『在日中国人――歴史とアイデンティティ』明石書店.
―――（2010）『チャイニーズネスとトランスナショナルアイデンティティ』明石書店.
奈倉京子（2010）「中国人留学生の文化的経験」『中国21』33: 103–120.
――――（2018）『中国系新移民の新たな移動と経験』明石書店.
中島恵（2018）『日本の「中国人社会」』日本経済新聞出版社.
宋弘揚（2017）「中国人技能実習生とホスト社会との接点――石川県白山市と加賀市を事例に」『地理科学』72 (1): 19–33.
坪谷美欧子（2008）『〈永続的ソジョナー〉中国人のアイデンティティ』有信堂.
山下清海（2007）「第二次世界大戦後における東京在留中国人の人口変化」『人文地理学研究』31: 97–113.
――――（2014）『改革開放後の中国僑郷――在日老華僑・新華僑の出身地の変容』明石書店.

法務省（2019）「出入国在留管理基本計画」，法務省ホームページ（2024年 2 月30日取得，https://www.moj.go.jp/isa/content/930002144.pdf）.
法務省入国管理局（2023）「在留外国人統計（旧登録外国人統計）統計表」，法務省ホームページ（2024年 2 月30日取得，https://www.moj.go.jp/isa/policies/statistics/toukei_ichiran_touroku.html）.

中近世『伊勢物語』注釈書の収集と翻刻
――中近世知識人の知の連関を考える

彭 健　　日本文学・博士前期課程２年

はじめに　『伊勢物語』は、和歌の抒情性と散文の叙事性を融合した文学作品であり、歌物語の代表的な作品といわれ、『古今和歌集』、『源氏物語』などとともに、詠歌の「手引書」として広く読まれてきた。この物語の研究史は長く、歌道伝授の重要な書物として、中世から繰り返し注釈作業が行われてきた。この長い注釈史の中で生まれた多数の注釈書は、その時代の『伊勢物語』の読まれ方を示し、当時の人の思想や価値観などさまざまなものを見せている。さらに、中近世の知識人たちの間で分野を越えて共有された知の連関も関わっていると考えられる。大津有一氏（『伊勢物語古註釈の研究』、宇都宮書店・1954年、増訂版・八木書店・1986年）の研究によれば、『伊勢物語』注釈史はおおよそ三つの時代に分けられる。すなわち、鎌倉中期から室町初期を「髄脳古注の時代」、室町中期の『伊勢物語愚見抄』（以下『愚見抄』）から江戸初期を「旧注の時代」、それ以降を「新注の時代」とする区分である。「旧注の時代」の幕を開いた『愚見抄』の序文では、「髄脳古注の時代」の注釈を厳しく批判し、実証主義への進歩が見られる。数多くある「旧注の時代」の注釈書の中で、宗祇・三条西家流の注釈を継承し集大成とされた細川幽斎の『伊勢物語闕疑抄』（以下『闕疑抄』）が特に注目される。本プロジェクトでは、この中近世の境界にある『闕疑抄』と、その周辺の諸注釈との関係性に注目しながら調査を行った。

調査日程等　今回の調査先はいずれも愛知県外の機関である。本プロジェクトで訪問したのは、9/20の九州大学附属図書館細川文庫、9/25の国文学研究資料館鉄心斎文庫、9/26の宮内庁書陵部であった。神宮文庫は諸般の事情により調査を実施しないこととした。調査は、『伊勢物語闕疑抄』に限らず、それと関連する中近世に成立した『伊勢物語』注釈書や講釈の聞書も対象とした。

先行諸注釈との関係　『闕疑抄』の注釈内容を検討した結果、たしかに、『闕疑抄』は『伊勢物語惟清抄』などの先行する諸注釈の形式を踏襲しており、諸注集成の観がある。こうした享受のあり方には、『闕疑抄』が三条西家流の正統を残そうとする幽斎の苦心がうかがわれる。幽斎は跋文で「愚見・肖聞等の諸抄をあはせ、御説の義にしたがひて、これを用捨せしむ」といったように、諸注を取捨選択して智仁親王への講釈資料である『闕疑抄』をまとめたという事実から考えれば、『闕疑抄』が三条西家流説の流布においても重要な役割を果たしたと考えられる。

作り物語論の展開　「作り物語」論は、『愚見抄』からすでにみられたが、兼良が展開した「作り物語」は、事実かどうかという実証主義にとどまってしまった。幽斎が先行諸説を敷衍したうえで、さらに「作り物語」論の可能性を拡大した。契沖を代表とする国学者が施した新注は、従来旧注と分断的に見えるとされている。しかし、本調査で検討してきたように、注釈史において、『闕疑抄』が旧注と新注の中間的な位置にあり、こういう広く流布した旧注の集大成といえる注釈書があるからこそ、次代の新注の展開の基盤をつくりあげたのである。新注と旧注の間に、歴史的にも性質的にも、『伊勢物語』注釈の連続性が見えてくると考えられる。

むすびに　今回の調査により、近世前期の『伊勢物語』注釈学の実態と、幽斎の『闕疑抄』が『伊勢物語』古注釈史における重要な地位がわかった。今後、『闕疑抄』の諸本調査、翻刻作業を続けて行い、多くの伝本を有している『闕疑抄』の版本系統を明らかにする。そして、『闕疑抄』周辺の諸注釈の文献調査、翻刻作業を行い、中近世の過渡期における『伊勢物語』注釈の実態及び知識人の知の連関をさらに考察していきたい。

熱田神宮史料の原本調査

鈴木寧々　　日本史学分野・専門 博士前期課程２年

はじめに　私は、熱田神宮の縁起・信仰史料を分析し、熱田神宮と尾張国の社会の関係を明らかにする研究に取り組んでいる。研究のため熱田神宮の信仰に関係する史料を収集している。その一環として、フィールド調査プロジェクトの助成を受け高野山大学図書館所蔵『熱田明神講式』の調査を行った。『熱田神宮史料　縁起由緒編』の解題に基づいて、『熱田明神講式』の概要を説明する。「居諸漸遷、一千余廻之霞送り、聖朝遥継、七十八代之月に及ぶ」と記されていることから、第七十八代二条天皇の時代、すなわち永暦・応保・長寛年間頃（1160−1165）に撰述されたものと推定される。本史料は、南北朝期の写本。高野山金剛三昧院に伝来し、現在は高野山大学図書館寄託。講式とは、信仰を同じくする人々が、神仏を礼拝する次第を記したもの。講では、本尊の図像が掲げられた。

調査内容について　高野山大学図書館にて、『熱田明神講式』の調査を行った。調査を通して、『熱田神宮史料　縁起由緒編』解題で指摘されている通り、『熱田明神講式』の外題は「熱田□神講式」とあり、その下に「遍照院」、その下に壺形朱印「性吽□」が押されていることが分かった。また『熱田明神講式』と、その他の熱田神宮の信仰に関係する史料を比較したところ、『熱田明神講式』は熱田神宮周辺で流布した言説を踏まえていることが分かった。根拠としては、『熱田明神講式』には、熱田神宮周辺で流布した『熱田宮秘密百録』の内容を踏まえた記述があることが挙げられる。『熱田宮秘密百録』には、「（日本武尊）其後東夷随申間、尊御帰国有シ時、尾張ノ国氷上宮酢姫ニ彼御剣ヲ預申サレテ、尊ハ御崩御成セ給、其後宮酢姫彼御剣ヲ尾張愛知郡松炬島ニ崇申サレサ、熱田太神ト号シ申畢」という記述が、熱田明神と伊勢・熊野の神の同体説の直前にある。『熱田明神講式』にも、「（日本武尊）征（ウチ）㆓随テ東夷ヲ㆒、帰リ㆓留テ尾州愛智ノ郡ニ㆒、則解テ㆓佩釼ヲ㆒璧ク置㆓旅宅ニ㆒、今ノ熱田大明神是也」という記述が熱田明神と伊勢・熊野の神の同体説の直前にある。一方で、叡山周辺で流布した『熱田宮秘釈見聞』や『熱田の深秘』には、同様の記述が存在しない。谷口潤氏が指摘するように、熱田神宮においては、熱田神宮の神官の先祖とされる宮簀姫が、日本武尊から草薙剣を預けられ、草薙剣を祀るために熱田神宮を開いた伝承が重視されてきた。以上のことから、『熱田明神講式』は、熱田神宮周辺で流布した言説をある程度は踏まえていると判断した。

フィールド調査経験談　フィールド調査の準備として行ったことを紹介する。名古屋大学附属中央図書館を通して、高野山大学図書館に『熱田明神講式』の閲覧を希望する旨を連絡した。その際、「『高野山講式集』DVD-ROM は確認済みであり、影印では確認できない、料紙、使用されている紙継ぎ、朱の有無などを確認することを希望する」と原本を調査する意義を強調した。史料に用いられている料紙について知るため、『必携　古典籍・古文書料紙事典』を事前に参照した。次にフィールドワーク体験においてどんな困難があったかを紹介する。高野山大学図書館は、遠方のため交通機関の乗り継ぎ時間を入念に調べてから調査に行った。史料の所蔵機関に調査許可を得る方法については、研究室の先輩の指導を仰いだ。次にフィールド調査を経験したことの意義を記す。日本中世史の史料は翻刻されているものが多いため、これまで原本調査を経験したことがなかった。原本調査の手順・方法を学ぶことができた。助成をいただいたフィールド調査を契機に、熱田神宮信仰に関する史料である『熱田の深秘』の原本調査を実施した。

まとめ　調査と内容検討を通して、熱田神宮周辺で流布した言説を踏まえた『熱田明神講式』が、南北朝期に書写され高野山に伝来したことが分かった。また、フィールド調査プロジェクトを契機に、史料の調査依頼の方法等のフィールド調査の方法を学ぶことができた。

参考文献

熱田神宮宮庁（2002）『熱田神宮史料 縁起由緒編』.
阿部泰郎（1993）「日本紀と説話」本田義憲ほか編『説話の場―唱導・注釈』勉誠出版.
同上（2013）「熱田宮の縁起―『とはずがたり』の縁起語りから」（初出1998）阿部泰郎『中世日本の宗教テクスト体系』名古屋大学出版会.
同上（2020）「中世日本紀と王権―即位法と三種神器説をめぐって」阿部泰郎『中世日本の王権神話』名古屋大学出版会.
伊藤正義（2022）「熱田の深秘―中世日本紀私注」（初出1979）伊藤正義著、片桐洋一・信多純一・天野文雄監修『伊藤正義中世文華論集 第4巻』和泉書院.
同上（2022）「続・熱田の深秘―資料『神祇官』」（初出1982）伊藤正義著、片桐洋一・信多純一・天野文雄監修『伊藤正義中世文華論集 第4巻』和泉書院.
谷口潤（2021）「『尾張国熱田太神宮縁起』を読む―『古語拾遺』との比較から」佛教大学大学院『佛教大学大学院紀要 文学研究科篇』49.

愛知県のブラジル人コミュニティーの言語に関する音声学的分析

WENSE D. V. da S. Marina　　言語学分野・専門 博士前期課程２年

はじめに　この研究の対象となる在日ブラジル人は、日本における主要な外国人コミュニティーのうちの１つである。出入国在留管理庁（2023）によると、ブラジル人は日本在留の外国人を国籍別にみて 5 番目に多い。さらに、日本からブラジルへの「出稼ぎ」、ブラジル日系人の日本への「出稼ぎ」といった長い移民の歴史もある。それにもかかわらず、在日ブラジル人が話すことばに関する研究は少ない。本プロジェクト以前に行った予備調査において、在日ブラジル人の音声の諸特徴のうちでも特に閉鎖音の発音に特徴があると思われたため、本プロジェクトでは閉鎖音の発音に焦点をあてた単語リストを作成し、録音をとって音響分析を行うこととした。調査対象は、在日ブラジル人10名に加え、比較対象としての日本語とポルトガル語モノリンガル10名ずつである。主な研究課題は、「バイリンガルブラジル人における母語と第 2 言語の VOT パターンは日本語モノリンガルやポルトガル語モノリンガルのパターンとは異なるのか」である。

先行研究　閉鎖音の音響的特徴を示す主要な指標として VOT（Voice Onset Time）がある。VOT とは、閉鎖音の破裂の瞬間から声帯振動が開始するまでの時間のことである（Lisker & Abramson 1964）。バイリンガルを対象とした研究では、バイリンガルの VOT がモノリンガルの VOT とは異なるという報告がある（Harada 2003, Osborne & Simonet 2021）。また、高田（2011）は20–78歳日本語話者のデータベースの分析結果に基づき、日本語の有声閉鎖音がネガティブ VOT に限らず、若年層の日本語の有声音 VOT がポジティブになる傾向にあると述べている。

調査内容　調査に参加したブラジル人は、ポルトガル語と日本語のバイリンガル話者で、男女 5 人ずつで合計10人であった。参加者はみな愛知県在住であり、出身地は主にブラジルのサン・パウロ市の郊外であった。参加者のうち 7 人は日系ブラジル人で、彼らの両親・祖父母の出身は様々だが、茨城県出身が特に多かった。比較パラメーターとして、日本語とブラジル・ポルトガル語のそれぞれのモノリンガルの音声データを使用した。モノリンガル話者については同様に10人（男女 5 人ずつ）のサンプルを取った。調査方法としては、両言語の語頭閉鎖音の読み上げリストを用意して録音をした。その上で、録音した音声ファイルをもとに、VOT を音響分析ソフトウェアの Praat で分析した。読み上げ調査においては、/p t k b d g/ の有・無声閉鎖音から始まる、各言語の70個の単語を用意した。子音の後続母音には /a i u e o/ の各音がくるようにし、２・3・4 音節の長さがある単語を 1 つずつ選んだ。キャリアセンテンスとして、日本語で「____って読むよ」と、ポルトガル語で同じ意味の “____ se lê assim.” を使用した。文章中の最初の単語に現れる、/p//t//k//b//d//g/ 語頭閉鎖音のみが分析された。

最後に　分析の結果、日本語の有声音の発音においてポジティブ VOT が多く観察された。これは、先行研究において近年の若年層の日本語にみられる特徴とされているものである。日本語モノリンガルの場合は、有声音の390トークンのうち、188トークンがポジティブ VOT であった。ポルトガル語モノリンガルの場合は、ポジティブ VOT のトークンが 1 つのみ観察された。バイリンガルの場合は、日本語は94トークンであったが、ポルトガル語の場合はこれより少なく、54トークンであった。この結果から、バイリンガルの日本語とポルトガル語の VOT は、モノリンガル話者と異なっていることが明らかになった。そして、バイリンガルの第 2 言語の習得が、その言語を発音する時に限らずバイリンガル話者の母語にも影響することが示唆される。日本語能力レベルによって VOT に違いはあったが、在日期間・言語習得年齢においては、一部の話者において違いが観察された。日本語能力レベルが高ければ高いほど、母語（ポルトガル語）への影響が顕著だった。日系ブラジル人とそうでないブラジル人の間には大きな差が観察できなかった。ただし、日系ブラジル人とそうでないブラジル人との比較は本研究の中心的な課題ではなく、話者数が十分ではないため

（日系ブラジル人 7 人、その他のブラジル人 3 人）、話者数を増やしての検討は今後の課題である。

参考文献

出入国在留管理庁（2023）「令和 5 年 6 月末現在における在留外国人数について」https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/13_00036.html［2023年12月アクセス］.

高田三枝子（2011）『日本語の語頭閉鎖音の研究― VOT の共時的分布と通時的変化―』くろしお出版.

Harada, T.（2003）L2 influence on L1 speech in the production of VOT. *Proceedings of the 15th International Congress of Phonetic Sciences (ICPhS)*, 1085−1088.

Lisker, L., & Abramson, A. S.（1964）A Cross-Language Study of Voicing in Initial Stops Acoustical Measurements. *Word*, 20, 384−422.

Osborne, D. M., & Simonet, M.（2021）Foreign-Language Phonetic Development Leads to First-Language Phonetic Drift: Plosive Consonants in Native Portuguese Speakers Learning English as a Foreign Language in Brazil. *Languages*, 6（3）, Article 112, 1−26.

２．教育研究推進室主催の行事（FD・ワークショップ・その他）

2-1　FD・ワークショップ・その他一覧（2023年度）

年 月 日	発 表 者	題目・概要等
2023年 4 月12日	ホアーン ティン ラン フォン・松波伸浩	日本学術振興会特別研究員応募説明会（ 1 回目）
2023年 4 月～2024年 3 月	別途記載	自己紹介の会（通算第10～18回目）
2023年 7 月12日	宇都木 昭・岩田直也	生成系 AI と人文系の教育・研究
2024年 1 月12日	ホアーン ティン ラン フォン・松波伸浩	日本学術振興会特別研究員応募説明会（ 2 回目）
2023年 2 月21日		フィールド調査プロジェクト報告会

2-2　自己紹介の会開催一覧（2023年度）

通し回数	年 月 日	登 壇 者	所属・分野専門	発表タイトルもしくは研究分野やキーワード	参加人数
10	2023年 4 月 4 日	秋田喜美	英語学	オノマトペ（擬音語・擬態語）の言語学	27
		佐野誠子	中国語中国文学	（仏教）志怪・伝奇小説・中国古典文学	
11	2023年 5 月 8 日	磯村朋子	心理学	社会認知機能・発達・内受容感覚	32
		佐野大介	中国哲学	中国思想史・懐徳堂・孝	
12	2023年 6 月 2 日	岩﨑陽一	人文知共創センター	印度哲学・言語理解・価値創造	18
		岩田直也	哲学	知識の基盤：ギリシア哲学の視点から	
13	2023年 7 月 7 日	鄭 弯弯	人文知共創センター	テキストマイニング・機械学習・ノイズ検出	20
		HAIG Edward	メディア文化社会論	批判的言説分析・選択体系機能言語学・メディア学	
14	2023年 9 月12日	加藤真生	超域文化社会センター	軍事史・疾病史・日本近現代史	20
		WRIGHT David, T. H.	超域人文学繋	Creative Writing, Contemporary Literature, Postmodernism	
15	2023年10月25日	コンラード	文献思想学繋	Historiographie, Buchgeschichte, Aufklärung	20
		郭 佳寧	人類文化遺産テクスト学研究センター	ことば・ほとけ・図像が記憶する中世日本—高野山大伝法院を中心として	
16	2023年11月29日	影山悦子	人類文化遺産テクスト学研究センター	エフタル、ソグド、壁画	24
		MCGEE Dylan	メディア文化社会論	Lending Libraries, Advertisements, Early Modern Publishing	
17	2024年 2 月 6 日	中川朋美	考古学	暴力の考古学	16
		小川翔太	映像学	紀行映画、アーカイブ映像論、在日・コリアンディアスポラの映像表現者	
18	2024年 3 月 8 日	樋口 諒	YLC	社会基盤・建築史・意匠	10
		岩田クリスティーナ	日本文化学	エコクリティシズム・ポストヒューマニズム・ジェンダー研究	

2-3　FD 報告

生成系 AI と人文系の教育・研究

宇都木 昭・岩田直也（司会：吉田早悠里）

以下の記事は、今回の FD が開催された2023年 7 月12日時点の情報に基づいています。生成系 AI については、日々、新しい技術やサービスが登場し、提供される内容も刻々と変化しています。そのため、報告書が刊行されるときには、内容が既に古くなっていると受け止められる可能性がありますが、ご了承いただければ幸いです。

吉田早悠里　今回の FD の映像は、オンデマンド公開のため録画され、期間限定・学内限定で後日配信します。それぞれのご発表の後に質疑応答があり、文字起こしをして推進室『年報』に掲載する可能性があります。掲載するのは、後日承諾いただいた方のご発言のみになりますので、ご了承願います。

最初に趣旨をお話しします。ChatGPT などをはじめとする生成系 AI が､近年､世間の注目を集めています。大学・研究コミュニティにおいても、教育・研究への有効活用、気を付けなければならない点、学生に対しての注意喚起等、教育・研究に対する影響が議論されています。今回の FD では、人文系の観点から、これらの論点と関係する話題提供と意見交換をしたいと思います。

初めに宇都木昭先生に、その後岩田直也先生にご発表をお願いします。各20分程度のご発表の後、発表内容に関する質疑応答の時間を 5 分程度取る予定です。それらの後で全体的な質疑に移っていきます。

では宇都木先生、よろしくお願いします。

○話題提供その 1

宇都木　言語学分野の宇都木です。よろしくお願いします。

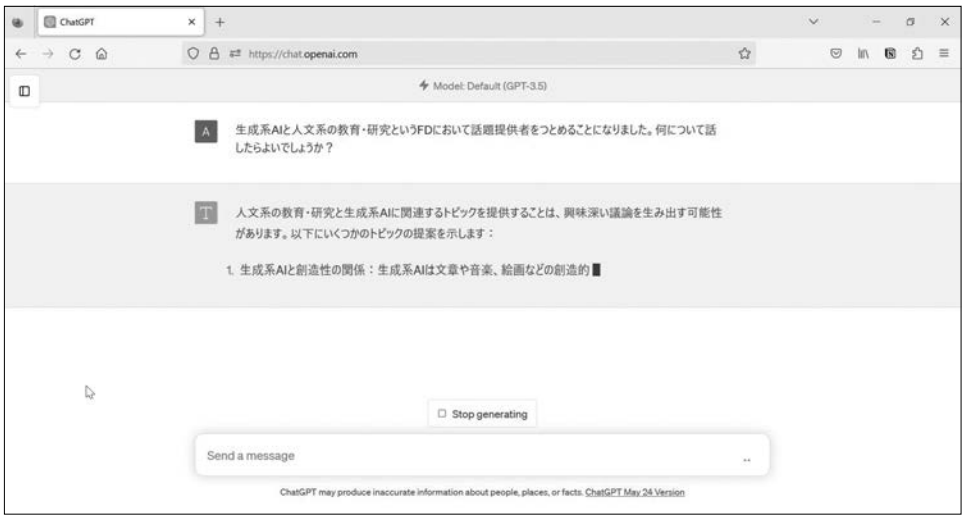
今日は私と岩田先生が話題提供者ということで、私は主に教育の観点からの話が多くなると思います。先ほどのご紹介では20分程度ということですが、スライドを作ってみたら結構多くなってしまって、一枚一枚の内容は詰まっていませんが、20分よりは長めになるかもしれません。ご了承ください。それでは始めます。

生成系 AI にも色々ありまして、テキストだけじゃなく画像生成もありますが、今回は専らテキスト生成に関する話です。大規模言語モデルによるテキスト生成 AI が最近話題になっているところですが、主に ChatGPT の話になります。

はじめに～デモンストレーション～

ChatGPT はどんなものか、触ったことがある方も多いかもしれませんが、あらかじめ録画をしておいたのでお見せします。ここに ChatGPT の画面、3.5 と 4 、この辺は後でお話ししますが、今入力されているのがいわゆるプロンプトと呼ばれるもので、ChatGPT に対して自分で考えて指示を出すところです。ここでは、「『生成系 AI と人文系の教育・研究』という FD において、話題提供者を務めることになりました。何について話したらよいでしょうか？」と入力すると､「生成系 AI と創造性の関係｣､「AI による人文学の進化｣､「倫理、社会への影響」など、出力を出してくれる。「なかなか便利だ」、「すごいな」と思うか、あるいは「学生が使った場合にいいのかどうか」など、議論の余地・論点があると思います。

今日は、「GPT、ChatGPT とは何か」というイントロ的な話を少しして、人文系の教育といった話をしていきたいと思います。



GPT・ChatGPT とは何か

私は AI の専門家でもなく、研究科の中で特に詳しいということもないですが、私の理解で少しお話をしたいと思います。ChatGPT というのは、昨年出た、GPT-3.5をもとに構築された人口知能チャットボットです。のちに GPT-4に基づくバージョンも登場しました。GPT-3.5あるいは GPT-4とは、「OpenAI 社」によって開発された大規模言語モデルです。ChatGPT も OpenAI 社が開発したもので、今右側に出ている図は、OpenAI 社のホームページの ChatGPT の箇所です。ここからログインやサインアップをして、ChatGPT を始めることができます[1)]。GPT-3.5や GPT-4は他社のサービス、例えば Bing とか Microsoft 365 Copilot にも利用されています。ただし、Microsoft 365 Copilot まだ限定的にしかリリースされていない感じです[2)]。その他、Chat PDF、Duolingo など本当に色々あります。

スクリーンショットのソースは以下の通り。
https://openai.com/chatgpt/（2023年 7 月アクセス）

最近の動向ですが、OpenAI 社が GPT を出したのは随分前ですが、バージョンを重ねて、2022年11月に ChatGPT がリリースされてから非常に話題になってきました。「なんかすごいものが出てきた」と。2023年 3 月に GPT-4が出て、GPT-4を使った ChatGPT も利用できるようになりました。今は、GPT-3.5を使った

1）2024 年 4 月 1 日から、ログインなしで ChatGPT（GPT-3.5 を使うバージョン）が利用できるようになった。
2）Microsoft 365 Copilot は本 FD 開催時点では一般提供されていなかったが、その後2023年11月 1 日に一般提供が開始された。

ChatGPT は無料で使えて、GPT-4を使うバージョンが有料になっています。

他社だと、Microsoft が2023年 2 月に Bing の「AI チャット」を出しました。これは GPT-4を利用しています。Microsoft は OpenAI 社に多くの出資をしており、「同じ陣営」ですが、それに対して Google も、2023年 3 月に「Bard」を出しました。2022年の終わりから2023年にかけて動きが非常に活発で、次から次へ話や情報が出てきて追い付くのが大変で、私の話も最近のことをどれほど捉えられているか分からないです。

ChatGPT で何ができるかは、皆さん既にご存じかもしれませんが、アイデア出しや情報探索など色々できます。ただ、何かを調べるときには「幻覚」（Hallucination）に注意が必要です。情報探索に限った話ではないと思いますが、特に情報探索において幻覚が問題になります。誤った情報が含まれることがありますね。平気で嘘を言ってくるので、例えば ChatGPT に「宇都木昭ってどんな人ですか」と聞くと、「農学の、農業分野の教授です」と平気で言ってくることがよくあります。

情報流出もよく言われます。入力した情報が取られてしまうのでは、という話です。ChatGPT に関しては、申請することで情報の取り込みをオプトアウトできるという話はあります[3)]。ただ、色々な会社が色々な生成系 AI のサービスを出していて、無料・有料ありますが、取り込んでいる情報と抜かれている情報がそれぞれ少しずつ違いますので、その辺は気を付けたほうがよく、流出したらまずい情報はそもそも入力しないほうがよいです。例えば、学生の成績情報を入力して成績処理に役立てるのは、まずいことになると思います。

ChatGPT と人文系の教育

教育に関する名古屋大学の立場は、2023年 7 月 5 日に総長名で、『教育・研究における生成 AI の利活用について』が出ました[4)]。皆さん既にご覧になったかもしれませんが、ご覧いただけるとよいです。後でこの話にちょっと戻ります。

同じ 7 月 5 日に、学生向けに『生成 AI の活用について』も出ました[5)]。さっきより短いですが、学生への注意喚起がされているので、これもご覧いただければと思いますが、私の思う一番重要な点はここです：「なお、授業における生成 AI の利用については、担当教員の指示に従ってください」。私たちに任されているということですね。私たちが学生に対して、自分の授業でどうするかは指示しないといけない、聞かれたら答えないといけない立場にあります。

ChatGPT では色々と文章が書けてしまうので、ChatGPT はレポートが書けるか試しにやってみました。最初に架空の話題を作りました：「大学で以下のレポート課題が出ました。どのように答えればいいですか？」。実際にこういう課題を出したわけではなく、架空の課題で「世界中には消滅の危機に瀕する言語が多くあると言われています。それについてあなたはどのように考えますか」と ChatGPT に聞いてみたところ、こんな感じで答えてくれました：「言語の消滅の危機について考える際には」と色々と出してからこの後も続きます。どうでしょうね。レポートになるといえばなるかもしれないし。例えば、「 1 番の論点についてもうちょっと深く書いてください」と追加でプロンプトに入力すれば、さらに書いてくれますので、ChatGPT と対話しながら、何かそれらしいものができます。

ChatGPT にレポートを書かせてしまったとして、次は、ChatGPT を使って書いた文章を見抜くことができるか、やってみました。まずは剽窃（ひょうせつ）チェックの iThenticate に掛けたところ、24％でした。ヒットしているのは割と一般的な表現なので、これだけ見たら剽窃にはならない感じです。これは当然といえば当然で、一般的に剽窃チェックのソフトは、Web 上の論文の類いと同じようなテキストがあった時に、これと同じで、どれくらい一致しているかを教えてくれる。ChatGPT や生成系 AI は、ネット上のものを生成系 AI が取り込んだ大規模言語モデルがあり、それに基づいて新たに言語を紡ぎだしていく感じで、ネット上に特定のソー

3 ）https://privacy.openai.com/policies

4 ）https://www.nagoya-u.ac.jp/aboutnu/declaration/ai/index.html

5 ）https://www.nagoyau.ac.jp/academics/curriculum/generative_ai/index.html

スがあるわけではないので、剽窃チェックはそもそも意味がないです。

そこで、ChatGPT に聞いてみました：「以下の文章はあなたが書いたものですか？」。言語の消滅、ここでは途中で切って全部は示していないですが、先ほど ChatGPT が出力したものを丸ごと、あなたが書いたものか、ChatGPT に聞いてみました。すると、「上記の文章は私が書いたものです」と認めました。

ただ、これは本当に見抜けているのか、疑問が出てきます。そこで、こんなのを作ってみました：「以下の文章はあなたが書いたものですか」。ここにある文章は、私が何も見ずに一から書いた文章で、ChatGPT が書いたものではないです。別に私の意見ではなく、学生が書きそうなそれっぽいことを書いてみただけですが、ChatGPT に、あなたが書きましたかと聞いたら、「はい、上記の文章は私が生成したものです」と言われてしまった。こんなことも言ってしまうのです。先ほど幻覚についてお話ししましたが、ChatGPT は嘘も平気で言うので、こういうことも当然あります。

生成系 AI が出力した文章を検出できるかについては、OpenAI 社自身で検出ツールも出していますが、それでどれくらい検出するか、生成系 AI が書いていないものは生成系 AI が書いたものじゃないとちゃんと言えるか、そもそもそれが技術的に可能なのか。色々議論があると思います。

生成系 AI に文章を書かせることの是非

著作権の観点から見た場合、文化庁著作権課が先月（2023年 6 月）、著作権セミナーでオンライン講演会を行い、その講演が今もオンライン上で見られ、スライドも見ることができるようになっています[6)]。文化庁・政府の見解の要点は、利用者は AI に書かせたものの著作権を主張することができるか、です。特別な指示を与えずただボタンをポンと押して出てきたものは、著作物とは認められないが、プロンプトに工夫をしながら出力したものは、道具を使って自分が作ったということで利用者の著作物になる、という見解を示しています。これは著作権の話です。

法律的な著作権上の話と、研究倫理上の話はまた別で、研究倫理上は、幾つかの学会やジャーナルがそれぞれ見解を出しています。アメリカ心理学会、これは三輪晃司先生に教えていただいたもので、APA のスタイルチームのブログでは、「ChatGPT にプロンプトでこういう質問をしたら、ChatGPT はこんな答えを出しました」と、私信を引用するように引用すればいい、参考文献にはこのように書けばいい、と示されています[7)]。

Nature という有名な国際ジャーナルでは二つの原則を出していて、一つめは、大規模言語モデルツールを研究論文の著者としてクレジットすることは認められない。著者・共著者にはならない。これは色々なジャーナルで言っています。二つめは、利用した場合は利用したと書けばいい、方法なり謝辞なりに書けばいいと[8)]。使ってはいけないのではなく、使ったらどう使ったかを書きなさい、と言っている。色々なジャーナルや学会がそれぞれに立場を出して、似たところがあったり違ったり、私もつぶさに見ているわけではありませんが、色々言われています。使っては駄目だと言っているところはあまりないと思います。

6）https://www.bunka.go.jp/seisaku/chosakuken/93903601.html
なお、その後2024年 3 月19日に開催された文化審議会著作権分科会（第69回）において AI と著作権についての報告がなされ、資料がウェブ上に公開されている。
https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/chosakuken/bunkakai/69/index.html

7）https://apastyle.apa.org/blog/how-to-cite-chatgpt

8）「ChatGPT と類似ツールの利用に関する Nature の基本原則」Nature ダイジェスト Vol. 20 No. 4.
DOI: 10.1038/ndigest.2023.230405
https://www.natureasia.com/jajp/ndigest/v20/n4/ChatGPT%E3%81%A8%E9%A1%9E%E4%BC%BC%E3%83%84%E3%83%BC%E3%83%AB%E3%81%AE%E5%88%A9%E7%94%A8%E3%81%AB%E9%96%A2%E3%81%99%E3%82%8BNature%E3%81%AE%E5%9F%BA%E6%9C%AC%E5%8E%9F%E5%89%87/120071
原文：“Tools such as ChatGPT threaten transparent science; here are our ground rules for their use.” Nature (2023-01-24), DOI:10.1038/d41586-023-00191-1
https://www.nature.com/articles/d41586-023-00191-1 … [1]

私の授業の場合

私は、「音声学講義」という、主に文学部 2 年生の授業をやっていますが、いつも授業の初回に課題の説明をしています。余裕を持って準備してもらうため、そのようにしています。

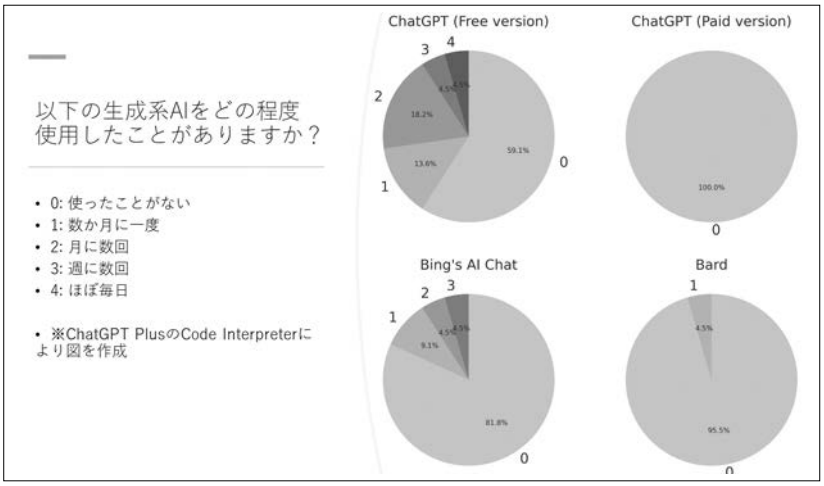
課題の概略は、「一つの言語・方言を選び、特定の文献にもとづき、その言語・方言の概略と子音体系をまとめる」、「上述の文献のほかに、同一の言語・方言または系統論的に近い別の言語・方言に関する文献を参照し、比較考察する」です。

４月の最初の授業で生成系 AI の話もして、「他の授業は別として、私の授業に関しては生成系 AI を使ってもいいです。ただ、どのように使ったかをレポートの中に書いて下さい」と。また、例年よりも締切を早めました。なぜかというと、ツールを使った場合、ちゃんと自分で理解して書いているかをチェックしたいからです。その課題にもとづいて 7 月下旬（来週なんですが）に発表を行ってもらうためにも、課題のレポート自体は締切を 6 月中旬に早めました。その分、 6 月までに（レポートが）できるよう、少し内容も変えました。

また、初回の授業では、ChatGPT のデモンストレーションを行い、注意点を説明しました。例えば、「韓国語の子音体系を教えてください」とプロンプト出すとこんな感じで出ますね。文献に適切に言及していないし、正確性もどうかというところがあり、これではレポートにならない、という話をします。「韓国語の子音に関する参考文献を教えてください」と質問すれば何か教えてくれますが、例えば 3 番の文献は実在しないのです。著者は確か実在しますが、そういう実在しないもの、いわゆる幻覚を出してくる点は注意しましょう、と話をしました[9)]。

「ChatGPT や生成系 AI を使ったら『使った』と書いてね」と言いましたが、レポートを締め切ってみたら、誰も「使いました」と書いていませんでした。使ったが「使った」と書いていないのか、そもそもこの課題をやる上で使えないから使わなかったのか、そこは分かりません。

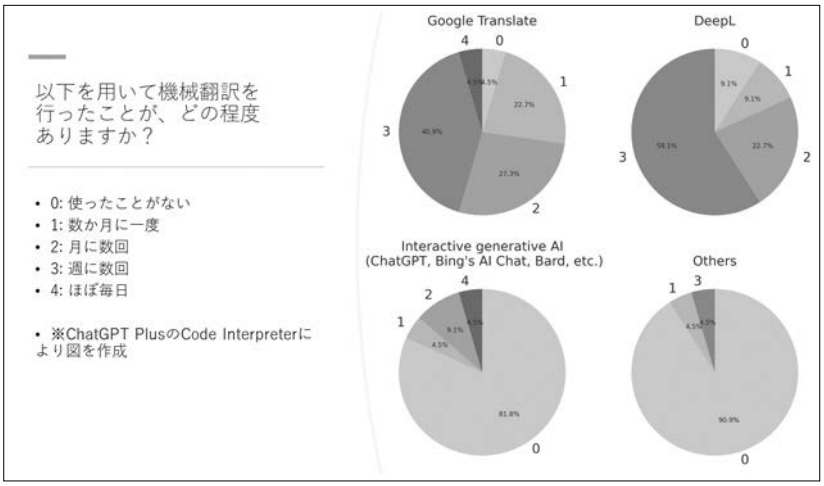
そのあたり、学生は実際、生成系 AI をどの程度普段利用しているか気になったので、先週、受講生に匿名アンケートを取りました。回答者数26名、内文学部生22名です。私の授業は、言語学分野・日本語学分野・英語学分野の 2 年生が大半を占め、その他の分野が少々入っている感じで、文学部（2 年生）全体を反映していませんが、参考までにどうなったか：「以下の生成系 AI をどの程度使用したことがありますか」。ちな



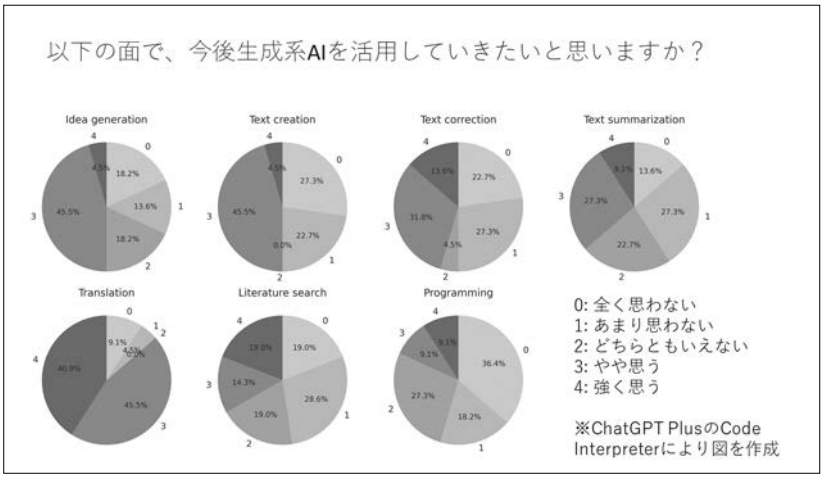
9）ChatGPT による回答の一部を抜粋すると以下の通り。著者名として挙げられているのは実在の韓国語学者だが、挙げられた書籍自体は実在しない。
「3. “A Phonetics Workbook for Students of Korean” by Sungdai Cho and Hyunsook Ko
・このワークブックは、韓国語の音声学を学ぶ学生向けに作られています。子音の発音に焦点を当てており、練習問題や実践的な演習が含まれています。」

みにデータの集計は、先週出た ChatGPT Plus、Code Interpreter を利用しました。これは、図などを作ってくれますが、結果、ChatGPT の無料版を使っていない人が過半数で、他はもっと使っていない感じでした。英語になっているのは、質問自体は日本語で聞きましたが、Code Interpreter で処理すると文字化けが起きてしまったので。これも、ChatGPT に翻訳させた上で処理しました。翻訳の正確さの程度は様々であるかもしれません。

こういう質問もしてみました：「以下を用いて機械翻訳を行ったことが、どの程度ありますか」。結構驚きましたが、「週に数回 Google 翻訳」が40％。もっと多いのは、DeepL を週に数回ほど使っている学生が半分以上いる。



それから、「以下の面で、今後生成系 AI を活用していきたいと思いますか」。先ほども言いましたが、英語なのは処理上の問題ですが、注目すべきは、翻訳に関して「強く思う」「やや思う」がかなりの割合を占めていて、翻訳に使えそうだと学生は結構思っているのかな、と。生成系 AI はプログラミング関係に結構使えると思いますが、その必要性を感じている人はそんなにいないというところです。



おわりに～今後の注目点～

ちょっと予定より長めにしゃべっています。生成系 AI は急速に発展してとても動きが速いので、今できないとしても数カ月後にはできるようになっているかもしれません。それも見越した上での議論も必要だと思います。それから、生成系 AI を取り巻く研究倫理や、教育の中でどうするべきか、教育における対応など、まだ議論の途上にあります。色々な人が色々言っていたり、ジャーナルによっても言っていることが違って

いたり、今後議論が進んでいく、その議論に我々も参加していくべきか、というところです。

それから、先ほどの総長名で先週出たものにこんなことも書いてありました：「今後は学生の生成 AI の利用を前提とした課題設定や評価方法を検討することで、生成 AI の高度な機能を積極的に活用できる人材の育成を図ることが重要です」。課題の出し方自体も見直したほうがいいかもしれないですね。また、「データサイエンス、Society5.0 に向けた総合知、人文学におけるデジタルヒューマニティーなど」、デジタルヒューマニティーズというべきだと思いますが、「我々の教育研究活動は、常に新たな挑戦を続けています」。デジタルヒューマニティーズなどはこの後の岩田先生のお話とつながってくると思います。

私はここまでです。以上です。

質疑応答 1

吉田　宇都木先生、ありがとうございました。では、宇都木先生のご発表についての個別の質問を受け付けたいと思います。先生方の中で質問等ありましたら、挙手してご発言ください。どなたかいらっしゃいませんか。

私は個人的に、学生の DeepL 利用率が結構気になりました。英文講読や卒論の中で英語文献を使っている学生がいて、翻訳ソフトを使ったのが丸分かりの日本語訳が出てくることがありますが、読んでみて日本語がおかしいことに学生は気付かないだろうか、と思うことが多々あります。

宇都木　そうですね。私も、DeepL を使っているというのが驚きでした。

吉田　長山智香子先生、どうぞ。

長山　今のお話をそのまま続けていただいてもよかったのですが。ごめんなさい、ちょっと先に挙げておこうと思って。他に質問がなければ。

最後に見せていただいた杉山直総長の、「賢く活用しましょう」ですが、それがどういうコンテクストから出てきたのか気になる、警戒するところがあります。一つは「生成系 AI の学術的な正しさ」ですね。正確性というか、先ほどおっしゃった幻覚を見せるどうのこうの。それは向上していく可能性があります。あとは倫理的な問題ですね。ソースが分からないものを盗んでいるので「吸血鬼」と表現しているナオミ・クラインのような評論家もいます。でもそれ以外に思うのは、大学がそれにイエス・ノーと言える力があるのか、それを拒絶するパワーがアカデミアに残されているのかどうか。非常にスケプティカル（懐疑的）かもしれないけれど。というのは、「産学合同」ともう 30 年ぐらい言われていると思いますが、IT 産業自体が力を持っている中で、生成 AI がどれぐらい学術の世界に取り込まれていくか、認められていくかというのは、学術の正しさとか妥当性の範囲だけで決められることなのか、それともももっと大きなモノポリーのような、経済的なゲームの中で決まっていくものなのかというのは、私はちょっと……。せっかくの議論の場なので、懐疑論として申し上げたいと思いました。

吉田　はい。ありがとうございます。

宇都木　難しいですね。後でたくさん時間があるので、他の方のご意見も伺えればと思いますが、なんとも言えないです。ただ私が思うのは、生成系 AI に関して言うと、生成系 AI をどう活用していくかという話と同時に、アカデミアの関係で言うと、生成系 AI をどう懐疑的に見ていくか。こういうものがあるとして、それをどう位置付けてどういう未来を築いていくかについて発信していくのも、またアカデミアだと思います。特に人文系は貢献できる面がきっとあるのではないかと思います。

長山　じゃあそれに力づけられて、頑張って発信していきたいと思います。ありがとうございます。

吉田　周藤芳幸先生が手を挙げて下さっています。よろしくお願いします。

周藤　今、宇都木先生に先に答えを言われてしまった気がしますが、DeepL について、僕は最近まで全然知りませんでしたが、この前上の子が実家に帰ってきた時に、上の子は外資系のコンサルで働いていますが、毎日ひたすら DeepL だと。それで報告書を作るのが仕事だと言っていました。社会へ出たら、業種によっ

てはこういうものを使いこなさねば生きていけない中で、人文系の部局、文学部で、どのような教育をしていくべきか。宇都木先生にその答えを先に言われてしまいましたが。

強いてお尋ねしたいのは、個々の先生がそれぞれに対応ということももちろんありますが、人文系・文学部としてはこういうことに関して、やはりなんらかの形である種共通の授業をしていかねばならないと思わないでもない。誰がやるか、どのようにやるかはちょっと置いて、そのように感じますが、宇都木先生個人としてのお考えはいかがでしょう。こういう状況に対してバラバラに対応していいのか。

宇都木　そうですね。そのための今日の FD とも思います。私は勝手にやってきましたが、勝手に対応しろと言われても難しいところもあるだろうと思います。答えになっていませんが。

吉田　ありがとうございます。まだ話題はいろいろありますが、一旦ここで切りまして、次の岩田先生のご発表に移りたいと思います。宇都木先生、ありがとうございました。

宇都木　ありがとうございました。

〇話題提供その 2

吉田　では岩田先生、よろしくお願いします。

岩田　こんにちは。岩田です。よろしくお願いします。それでは始めさせていただきます。専門分野は哲学です。私は、先日の西洋古典学会でも、ChatGPT などの生成系 AI は研究に非常に使えるという話をしたことから、話す機会をもらったと思います。専門家では全くないので、素人が最近使っている感じから、今後どのように使えるのかを話します。四つセクションがありまして、「はじめに」の後、どのように使えるのかが二つ（「プラグイン」と「API 利用」）で、主に有料アカウントを使っての紹介ができればと思います（最後のセクションは「まとめと今後の展望」）。

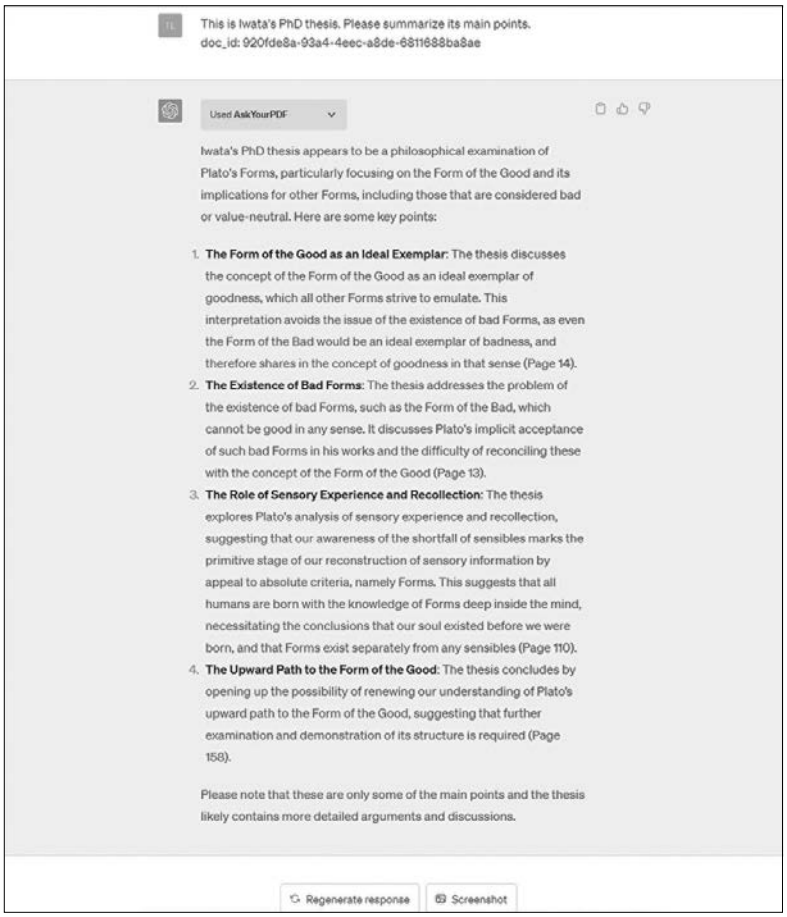
はじめに

先ほど宇都木先生からも、無料と有料があるという話でしたが、基本的には有料版の紹介です。まだ有料に登録している学生はほとんどいないと思うので、この辺はあまり心配する必要がないと思いますが、他の FD や勉強会を見ている限り、有料版だと日本語能力に非常に大きな違いがあるようです。私も登録して使っていますが、かなり精度が違うと感じます。さらに重要なことに、今からご紹介する「プラグイン」は有料版でしか使えません。今は月20ドルでそんなに高くなく、すごいなと思うことが多いので、ぜひ一度使っていただければと思います。ただ、利用者が多いようで、最近は「数時間に25メッセージまで」など制限が掛かる場合があります。自由に使えるわけではないですが、私の利用法ぐらいであればそこまで制限が掛かることはないと感じます。

宇都木先生のお話にもありました幻覚ですが、理由の一つとして、ランダムに学んだところから可能性の高い回答を生成するものなので、全然関係ないことが出てくるためです。以前私が、「今授業でやっている内容の文献表を作成して下さい」と言ったらもっともらしいのが出てきたのですが、調べてみたら一個も実在していなかった。しかし、それなりにそれらしいものを並べてくるものの、信頼性の問題があることから学問的に使えないことになります。しかしながら、文章の要約や翻訳（translation）、データを分析する点では非常に優秀なことをやってくれます。ChatGPT の基にある GPT-4の学習データからありもしないものを引いてくるのではなく、信頼できるソースや信頼できる研究者が書いたもの（情報の確かなデータ）を与えて分析させるなど、信頼できるデータから回答を出力すれば、幻覚の問題は可能な限り回避できると思います。実際、そういう仕方で使うと的確に論文などをまとめてくれるので、研究にもかなり使えると思います。

プラグイン～Ask Your PDF～

私が実際にやったものを、画像、動画で埋め込んでいます。プラグインは、外部（サードパーティー）の人が作り、それを ChatGPT と連携させることができるもので、よく使われているのは、読み取った PDF か



ら情報を分析させられるものです（2024年 7 月21現在、ChatGPT そのままでも PDF の読み取りが可能であり、Ask Your PDF は GPT として提供されている）。長くなってしまったので全部はお見せできませんが、300ページまでのテキストを分析させられます。今、画面でやっているのは、私が書いた博士論文を「Ask Your PDF」にアップし、そのリンクをプロンプトに入れてサマライズしてもらっているところですが、かなりさっと出てきます。単に「要約してください」と指示を出すだけでは、あまり重要でもない論点をランダムにピックアップするだけですが、より的確にプロンプトを書いて、これについてはまあ私の論文なので、「私は何をやっている？（笑）」と聞くと、「私が書いたアーギュメント」をかなり的確にまとめて出してきます。さらに、そのソースやページ番号も、200ページぐらいの博士論文の中から概ね正確に抽出します。私が書いたのでどこかも分かっていますが。

情報データセキュリティの問題で、どこまでやっていいか微妙なところですが、まだ読んでない本一冊の PDF があれば、この著者はこれについてどこで何を言っているのかを知りたい、検索する、あるいは、どういうアーギュメントをしているのかを分析するなど、ChatGPT と対話するような方法で研究内容を展開していくことは、今の段階でも全くできます。

プロンプトの書き方を工夫していくと、このように的確なものを、ソースまで出してくれるから、幻覚のようなありもしないものを出しているわけでは全然ない。使えるプラグインです。

プラグイン～Link Reader～

もう一つが、リンクを使って Web 上のデータを読み込む、これもサードパーティーのプラグインで、他にも最近新しいプラグインが出ているようです（2024年 7 月21現在、ChatGPT そのままでも Link 先を読み込むことが可能）。Web サイトだったらリンクを与えることができますが、どうもこの説明を見ていると、クラウド上に保存している PDF や Word データも与えることができそうです。もちろん、セキュリティでパ

スワードを掛けていると読み取れないと思いますが、フリーでリンクを読み取れる状態にしておけば、その情報を ChatGPT に与えて、何らかの文書作成をしてもらえます。読めない言語の場合は翻訳し、その中から関係している情報だけ取り出すことも、もちろんできます。

先日、ChatGPT をレポート課題に使ってよいか、文献思想学繋で議論が回っていたので、「ChatGPT 有料版を使うとこんなことが簡単にできます」というメールをお送りしました。私の専門は古代哲学ですが、何も書かなかったソクラテスについて、「どうやってソクラテスという人物を知り得るのか」という課題について「レポートを書いて下さい」とやっているところです。有名な研究者が Web 上に書いている事典からソクラテスのリンクをここに貼り付けて、「リンク上を参照しながら、このソクラテスの問題について言えることを書いて下さい」と指示しました。英語だと 4,000 トークン＝3,000 words ぐらいの文章を一気に作れます。日本語にすると大体半分ぐらい、2,000 文字ぐらいが限界なので途中切れてしまって、延長してもうまく接続しなかったりします。そこで、英語で一貫したきれいな作文を一旦書いてもらったところ、回りくどい情報が多かったので、「2,000 字にして」と書き直してもらいました。今度はソクラテスの周辺情報ばかり書いたので、「そうじゃなくて特定の問題に絞って書き直して下さい」と指示を書き直したら、ほぼ 2,000 words で構成までしっかりしたレポートを一瞬で作ってくれる。その後に、「今作成したレポートを日本語に直して下さい」とすれば、完全に優れたレポートができました。ソースは優れた研究者が書き、その内容をまとめる仕方でレポートを書いているので当然です。

こんなことを学生がやりだすと、もはやカンニングやコピペのチェッカーにも全く引っ掛かりませんし、生成 AI チェックは現状まだうまくいきません。もともと、生成 AI が勝手に一から創り出したものというより、ベースソースを基に行っているので、こういうのはなかなか判定できないと思います。本当に 10 分足らずで完全にレポートを完成します。

プラグイン～Code Interpreter～

先ほど宇都木先生もご紹介されていました。今週ぐらいに出て、サードパーティーではなく OpenAI 自体が提供しているプラグインなので、メニュー自体に登場します（2024 年 7 月 21 現在、Data Analyst という GPT として提供されています）。自然言語を用いて Python のコードを作成し、さらに ChatGPT 上で実行できるので、X（旧 Twitter）やニュースを見ているとみんな非常に盛り上がって、「こんなこともできる！」と言っていました。文学部としては、テキストファイルのような外部データを読み込ませて分析できればと思ったのですが、どうも PDF など論文は分析があまりうまくいかないようです。いちいち Word にテキストを貼り付ければ、ある程度しっかり読み取って分析するようですが、どうもこの点では Ask Your PDF などのプラグインのほうが優秀かと思いました。

しかし、Excel や CSV の情報データなど、先ほど宇都木先生もグラフを作られていましたが、データを非常に的確に作ります：「名古屋市のホームページから各区の人口推移を書いて、データにしてもらえますか」としたところ、「元の Excel データがきれいではないのでうまくいきませんでした」と言っていますが、勝手に自分でコードを書き換えて、うまくいくように Excel ファイルを直して、各区の人口推移のグラフまで作成し、「今後 20 年間で最も人口が増える区を分析できますか」など、過去のトレンドを使って分析した結果も出し、グラフも作成します。この説明を読んでいると、「Python でできることは基本的にはなんでもできる」と書いているので、これはすごいと。私は、プログラミングは詳しくないので、勉強して使い方を把握する必要がこれから出てくると思います。

このように、ChatGPT 単体で有料プラグインを使うと、非常に多くのことができます。

API（Application Programming Interface）利用～GPT-4 のさらなる活用～

次に、もう一つの利用方法、GPT-4 をさらに活用していく話です。ChatGPT は、大規模言語モデル（LLM）を使っています。ChatGPT だったら有料版の場合 GPT-4 です。BingAI も GPT-4 を使っています。Google の

Bard は PaLM2 という違った言語モデルを使っています。ChatGPT も GPT-4を使って作られた Web サービスですから、API を使って ChatGPT とは異なる外部プログラムを開発すれば、そこまで本格的なアプリを作らなくても、プログラム上で GPT-4をダイレクトに使えます。

API を使うと、ChatGPT で限定されていたより多くのことが現状でも可能です。例えば、（先ほどお話ししたように）テキストのプロンプトを入れて返ってくるまでに4,000トークンぐらいしか入れられませんが、API を使って GPT-4をそのまま使うと、32,000トークン。英語にしたら大体75％という話だったので、24,000 words ぐらいを一気に入れられます。出力トークンも合わせてなので、24,000 words そのままは入れられませんが、しかしながら論文 1 ～ 2 本ぐらいの分量はそのままいけます。Ask Your PDF がどのようにプラグインをやっているか、仕組みはそれほど分かっていませんが、これだけの情報量を一気に処理できます。

プラグインは、おそらく「埋め込み API」を使っていると思います。私も、勉強会などに何回か出て説明してもらい、仕組みをある程度理解できたという段階です。基本的には、テキストを埋め込む（embedding）方法を使えば、より長いテキストでも処理が可能になるそうです。入力トークンに制限はありますが、LlamaIndex や LangChain のような外部ライブラリを活用すれば、入力トークン数におさまるテキスト量をその都度取得できる。仕組みはまだよく理解していませんが、自然言語の文章の「ベクトル化」・「数値化」をすると、文章の意味内容の近似性が測れるようになるらしいです。非常に長いテキストをインデックス化して少しずつ分類・区別する必要がありますが、数値化・ベクトル化しておけば、「こういうことについて教えてくれ」、「このテキストは何を言っているのか」とプロンプトに入れた場合、近似値を測った中で近いものを引っ張り出して、その中でトークン量に収まる分を GPT-4に投げる。つまり、入力したプロンプトと検索・抽出した情報によって分析・返答する、というプログラムも作ることができるわけです。このような外部システムを使えば、非常に長いテキストも処理ができます。どこまでできるのか、西洋古典の文献全部をできるのか、どうやるのか、は技術的にはまだよく分かりません。詳しい方がいらっしゃったら教えてもらいたいです。

先ほどの「埋め込み」は、モデルに外部データをその都度プロンプトとして与えるだけですが、外部データによってモデル自体をファイン・チューニング（変更）することもできるようです。GPT-3では既にできるそうですが、最新の GPT-3.5 Turbo と GPT-4のファイン・チューニングに関しても、「2023年後半に公開」という記事もあったので、新しいプログラムやソフトは、我々が作らなくても誰かが作る可能性がいくらでもあります。

しかし、いろいろ聞いているとこのファイン・チューニングは、「データセット」を GPT に適切に学ばせるよう構造化しなければならず、データ量が多くなるほど準備が非常に大変だそうです。しかし、読み取らせた外部データにもとづいて返答・分析をするとなると、さらにデータを使った分析の研究を大規模に行う可能性はいくらでもあると思います。お金がかなりかかるとは思いますが。

API 利用～Azure～

今から、YouTube にアップロードされている外部の 1 分ぐらいの動画を再生しようと思います。音量だけ注意して下さい。ここまで、「API を使って外部プログラムを作る」話をしていましたが、そもそも Microsoft が外部データを使ったサービスを作り始めています。この間、Microsoft の人が（営業かも知れませんが）来て、総長も来ていた勉強会に出ましたが、この「Azure」を使うことで GPT-4をカスタマイズする話で、名古屋大学の学生データや規程などを全部読み取らせれば、教員や学生に自動で問い合わせ対応ができる、という話でした。基本的には事務的利用が前提だと思います。しかしながら、さっき言った埋め込みやファイン・チューニングも、「難しいプログラミングもせずに、Azure のプラットフォーム上で全部可能にする」と言っていました。かつ当然、「外部データは漏洩がないよう、セキュリティを担保した上で各大学に提供していく」という話もしていたので、既に実現可能だと思います。ちょっとご覧いただければそ

の仕組みがある程度分かると思います。

〈動画 約50秒〉

私も登録できるかもと思いましたが、どうも個人には対応していなくて、法人等大きい単位のようなので、これからどうなるかという感じです。

API 利用～Copilot～

最後にもう一つ。先ほど宇都木先生も言及されましたが、Microsoft Office 全体に GPT-4が搭載されることになり、今一部で公開されているようで、数カ月以内に365に搭載されるという話があります。これを見ていると外部データの取り込みがすごい。クリックしてアップロードするだけで、先ほど私がプラグインを使ってどうこう言っていたのがほぼ自動化される。出力まで全部してもらえるので、こうなるとレポート課題を出すのは不可能かと思われます。どういうものか、こちらをご覧ください：

〈動画　1 分〉

他にも、Excel や PowerPoint などに搭載される紹介動画もあります。一番関係がありそうな Word でご紹介しましたが、Word ソフトにこういうものが組み込まれると、使う・使わない、という話にもならず、使うのが当然な状況になってきます。どこまでデータのプライバシーが保証されるかは微妙なところですが、持っている論文や PDF をどんどん入れていって、「先行研究ではどう言われているのかまとめて」とやると、バーッと文章まで出てきてしまい、その上で自分の考えを書くとなっても、全然不思議ではないと思われます。

まとめと今後の展望

もともと幻覚に対処するためにどうするかという話から始まりましたが、外部データは自分でしっかり「信頼性」が分かっているものを使う。これを使って分析させる手法が普及してくるのは、もう確実だと思います。特に最後の「Microsoft Copilot」が出てきたら、ほぼ全員が使うことになると思いますが、将来的に研究方法を大々的に変え得ると思います。今は論文数本しかできないです。大規模な外部データ、数百～数千本の論文も読み取れるのか、私もまだ分かりませんが、現状では技術的に難易度が高そうです。しかしながら、いくらでも出てくる可能性はあると思います。そうなると、実際にこれまで発表された論文を読むというより、既にカスタマイズした「GPT モデル」を相手に対話しながら、向こうは「論文を全部読んでいる専門家」な感じで、キャッチボールじゃないですが、「アイデア出し」をぽんぽん投げながら、という研究方法になるかもしれない。ChatGPT や GPT モデル自体が、論文を本当に解釈し「新しい分析」を出してきたら、新しい研究はどうなるのか。えー！という状況にもなり得ると思います。

レポートの話だと、Copilot のようなものが普及すれば、使用規制はほぼ不可能に思います。むしろ、外部データを研究・教育にどのように活用していくか。最新の情報やメソッドを共有して積極的に使い、「こういうふうにできますから使いましょう」と推進したほうがむしろいいのでは、という気がします。使用を前提とした上で、citation の問題や「全ての研究内容を外部に頼らない」という規程を作っていったほうがいいと思います。

先ほどもファイン・チューニングや embedding の話をしましたが、結局はデータの状態がどうかということで、汚いデータだとやはりうまく読み取ってもらえないので、データをどのように整備していくかは非常に重要です。整備されたデータがあるほど、特定のジャンルや分野や問題点を体系的に分析させることができるので、データの扱い方をこれまで以上に学ぶ必要がある、と私は思い始めています。

ちょうど「デジタル人文社会科学研究推進センター」が設置予定ということで、よいタイミングだと思います。他の大学はどうなのか、全然網羅的に調べていませんが、例えば京都大学の文学研究科を見ていたら、

既に文学研究科内の教職員と学生向けに「Python」や「R 言語」の教室を開講して情報技術を教えていました。こういう取り組みは今後どうしても必要になってくると思います。まだ全然しゃべりきれていないので、また議論できればいいと思います。私は以上です。ありがとうございました。

質疑応答２

吉田　岩田先生、ありがとうございました。では今の岩田先生のご発表につきまして、質疑応答に入りたいと思います。先生方の中で質問がありましたら、挙手してご発言下さい。宇都木先生、よろしくお願いします。

宇都木　生成系 AI を研究に活用していく際、今までも出来なくはなかったが、技術的にハードルが高かったのがハードルが下がってきたのか、あるいは、そもそも今までとてもできそうになかったことが、生成系 AI の登場によって研究の可能性が広がってきたのか、どういう感じでしょうか。

岩田　西洋古典学会では話をしましたが、私は古代ギリシャとかラテン語を使う分野なので、多言語能力がかなりすごくて、GPT-3.5 は微妙だと思いましたが、-4だと古典ギリシャ語は翻訳もかなり的確で、「これだけ分析ができるのか！」と。ネット上で出ているテキストを大規模に分析できれば、研究は変わると非常に思った。きっかけはやはり、最新の GPT-4 の多言語的な能力は大きいかな、という話で。デジタルヒューマニティーズ専門の人とも話しましたが、これだけギリシャ語やラテン語を使えるものは全然なかった。同様のことをやろうとしている人たちはいたが、「大規模言語モデルは今出ているのが革命的だ」という話でしたね。

宇都木　ありがとうございます。

吉田　他の先生方はいかがでしょうか。

◎全体的討論

吉田　もしなさそうでしたら、全体質疑で宇都木先生のご発表も含めてディスカッションできればと思います。先ほどの宇都木先生のご発表では全体的な話にもなっていましたが､皆さんいかがでしょう。長山先生、お願いします。

長山　ハローアゲインです。岩田先生の発表の最後のほうにも関わってきます。London School of Economics のメディア学の学者で、mediatization（メディア化）についてよく論じている Sophia Livingston について、たまたま他で話す機会があったので調べていたのですが、その人がメディア化を論じるに当たって、今まで本や教科書を読んでいた教室に iPad を導入する時のインパクトは、ツールとしてのインパクトを見るだけじゃなくて、経済的、政治的、あるいは教育制度的なコンテクストの中で、何十年間かかってどういう変化が起きてきたかという中で、そのツールが持つインパクトも見るべき、考えるべきだと言っているのです。

それで先ほどは産学合同と言っていたのですが、今最後のほうで Microsoft の Copilot が出てきて、「これだけ早くビジネスプロポーザルが書けます」というのを見た時に、私は非常にやばいと思いました。というのは、先ほどからとても大きな話ばかりしますが、仕事が早くできるのはそれだけ見るといいことですが、そのコンテクストにあるのは資本主義じゃないですか。だから、「より productivity の高い人が昇進する、給料もらえる、生活保障される、どんどん物の値段が上がっていく、戦争が終わらない」という世界に生きている中での「仕事が早く捗る」というのは、研究者同士の中でも、一瞬にして何万文字というテキストを処理できる人と、なかなかそれが理解できない人の差が、これから広がっていくのか、と。あるいは競争の問題ですね。競争がこれから広がっていくことに「生成系 AI がいい、OK を出す、どんどん使っていきましょう」ということの、持つ意味の問題。

もう一つは、早くできるのがいい、たくさん処理できることがいい、となった時に、時間のかかる仕事を人はやらなくなってしまうことが、ちょっと怖いと思います。というのは、今日も私が ChatGPT に、英語

で色々なテキストを質問しながら答えてもらうと、やっぱり答えがリベラル系に偏るのです。ジェンダー、人種、政治認識の問題など、英語のテキストの中ではリベラルな答えが多いからです。それは良さげに見えますが、実はそれ以外の counter points、左翼やゴリゴリのナショナリズムもそぎ落とされていくので、どうやってそれらを synthesize していくかというと、非常に時間がかかるのです。だから、時間のかかる仕事が評価されなくなる、さらに見えなくなってしまうことについて、私は今まで箸にも棒にも掛からないことを滅茶苦茶一生懸命やってきたので、今さら存在意義を認めてくれというのは、「け！」みたいなところもありますが、せっかく FD だからちょっと言ってみようかと。言わないとまた鬱になったりするので、精神衛生のために話しています。以上、問題提起でした。

吉田　ありがとうございます。今、長山先生がおっしゃったように、時間がかかる仕事に、という点は非常に納得できます。今、私は論文を書いていまして、この15年間ずっと追ってきた開発プロジェクトがやっと終わりかけたので、そろそろ書こうかな、と書き始めたのですが、長期的なスパンで見ていかないといけないものをどう扱い、どう評価するのかは、早さが求められると難しい問題だと感じました。

宇都木　今のことについて何かお答えしたほうがいいのかな。でも私がお答えするには大き過ぎる問題ですね。他の方の意見も聞いてみたいですが、人文学というよりは社会科学的なところで、社会・政治・経済など、色々な世界に対するインパクトはきっと大きいだろうと思うのですが、どのようにそれがインパクトを与えるかを語れるほど、私が何かを知っているわけでもないですが、きっと大きいし、もっと社会科学方面の先生方の話も聞いてみたいと思います。

それから、「ChatGPT で出てくる答えがある方向に寄ってくる」については、ChatGPT や GPT はチューニングをしているのです。大規模言語モデルからそのまま出てくるわけではなく、おそらくそのままでは差別に満ちあふれた危ないものが出てくるのを、そういうものが出ないようにチューニングをした上で OpenAI 社が出してくるわけです。そのチューニングプロセスは、何かしらの倫理観が反映されているとも言えます。「そこで寄って立つ倫理観は何だろう」について人文学的に言えることは、色々あるかもしれません。

岩田　「勉強会」にはちょこちょこ出ていますが、理系の人は特に脅威に感じている。なぜならば、例えば医療系では、「特化型」AI、つまり「特定の医学系分野でこれまでに発表されたメジャーな論文を全部読んでいる」モデルが出てきているからです。そのモデル自体が新しい開発の知識を示し出すなど、特に知識としてはほぼ確実に「万能」なものが現れてきているから、「もう研究する意味がなくなるのでは？」という話も結構しています。これが人文系にどこまで通用するか、同じような状況にあるのか、はまだ分からないですが。

しかし私が思っているのは、今は大学院で文献を外国語で読むことや読解のような訓練を非常にしている。必要なくなることはないと思いますが、今は翻訳を DeepL でやりますし、代替マシンのようなものが出てくると、教育とか研究の在り方はかなりの程度変わるとは思います。

吉田　ありがとうございます。

宇都木　よろしいですか。今の「文献を読む」のは、分野ごとに考えることもあるだろうと思いますが、例えば、日本語学分野の人は今まで英語で論文を読むトレーニングもそんなにしてない。でも、「英語の論文も読めるようになってくる」「ドイツ語やフランス語の論文も読めるかもしれない」から広がっていくところがあるかもしれない。一方で、英語学分野の人が、DeepL や生成系 AI を使ってどんどん論文を読んで自分で読むトレーニングをやめてしまったら、それはもはや英語学ではないのでは？　分野ごとにどういう人材を養成するかのゴールがあって、それによってどれくらい生成系 AI に頼るか、頼らないトレーニングをどれくらいやるべきか、は違ってくるのではないかと思います。

吉田　ありがとうございます。残り 3 分ほどありますが、他の先生方いかがでしょうか。

鈴木真　具体的な問題になりますが、期末課題や期末テストを与える時に、どういう課題を与えては駄目で、

どういう課題だったら本当に学生の力を試せるのかは悩んでいるところです。単にまとめるとか翻訳させるというのをレポートで出すのは絶対駄目でしょうが、どういう課題だったらいいのかは迷うところなので、駄目なことがあったら教えてほしいですし、どうしたら学生の力を真に問えるか、お考えがあればお聞かせ願いたいです。よろしくお願いします。

吉田　これは先生方全員が思っていることだと思います。

宇都木　難しいですよね。生成系 AI を使わないタイプの成績評価は、対面の試験をするのが一番確実だと思います。対面・持込不可でその場で書かせるのであれば生成系 AI は使えない。反対に生成系 AI を使うことを前提にするのであれば、非常にレベルを上げて、生成系 AI でできるけれどもっと上を要求する。漠然としていますが。

例えば学術論文的なクオリティのものは生成系 AI ではできないだろうし、そこまで求めるかは難しいですが、要求するクオリティを高めた時に成績評価が大変そうですね。非常にいいものが出てきたら評価しますが、それは学生のレポート一つ一つを、論文を査読するぐらいの真剣さで見てあげないと評価できないのではないかと。私もどうすればいいのかよく分かりませんが、一番簡単なのは対面試験をすることかと思います。

鈴木　ありがとうございます。

吉田　私は対面試験と、レポートでは必ず出典を明記することを強く打ち出しています。

安井永子先生、手を挙げてくださっていらっしゃいます。

安井　すみません、ありがとうございます。時間が来てしまったタイミングで申し訳ないです。レポートをどうするかに関連して、学生に任せるというか、何のために大学に来てどういう力を養成したいのかを自分たちに真剣に考えさせる。単に単位を取りたいだけで、全部機械に頼る形で出すのがいいのか、読解力・思考力・発想力などを訓練したいならば、「ちゃんと自分でやりなさい」と指導していくことがある程度必要では、と考えていました。宇都木先生は ChatGPT を使うことも前提にした課題の出し方をされていましたが、学生に対して（ChatGPT の）使用に関して何か指導されていますか。

宇都木　課題を出した時はまだ 4 月だったので、大して情報を持っていない段階で見切り発車的にやったので、あまり（指導は）できていないですね。（生成系 AI を使用）させたらどうなるか、気になってはいました。生成系 AI を使っても、使っただけだと難しいと思いますが、もし学生が、岩田先生が紹介されたような論文の PDF まで読み込んでやることまで知ってやっていたら、結構できたかもしれない課題だったと思います。

吉田　川本悠紀子先生、よろしくお願いします。

川本　今日お話しいただいた内容と逸れると思いますが、哲学科の先生方がいらっしゃるので伺いたいです。デジタル化社会において、ChatGPT や生成系 AI など「人間を助ける」ものをどこまで使っていいのか、そういった「倫理観」に関する研究は既に出てきているのか、まだないのか。というのも、人文学の領域で ChatGPT を考えると、今後恐らく倫理的な問題を考えていかねばならないと思ったのですが、何かご存じでしたらお教えください。

岩田　鈴木先生がお詳しいかもしれませんが、私が見る限り、AI の ethics は結構やられていますが、ChatGPT や生成 AI は社会的に大きなインパクトが本当にごく最近という感じなので、学会でもそれぞれ独自のガイダンスぐらいは整っていても、倫理的な研究までいっていないのではないか。しかし AI の倫理は、既に色々なところでかなり本格的に研究されている印象です。私は専門ではないので分かりませんが。鈴木先生いかがですか。

鈴木　ChatGPT とか生成系 AI の倫理に関しては、論文は幾つか出ている感じです。ただ、私はそれを専門にしていないので、今ここで「それはこうなっている」というトレンドをまとめてお話しすることはできな

いです。情報（学研究科）の久木田先生が専門家なので、呼べば、AI の倫理に関して語ってくれると思います。

川本　どうもありがとうございました。

吉田　ありがとうございました。時間が超過しましたので、今回の FD は終了したいと思います。ご発表いただいた宇都木先生と岩田先生、ありがとうございました。

宇都木　ありがとうございました。

吉田　では以上で終了させていただきます。先生方、ご参加ありがとうございました。

Ⅱ　人文学研究科の教育・研究活動

1．教員の著書

1-1　出版著書一覧（2023年度）

著者名	書 籍 名（単著）	出 版 社	発行年月
大名　力	英語の記号・書式・数量表現のしくみ	研究社	2023年 7 月
Hitoshi Ogurisu	Edition électronique du « Roland » de Cambridge	Independently published	2023年 9 月
大名　力	英語の発音と綴り ――なぜ walk がウォークで work がワークなのか	中央公論新社	2023年10月
斎藤夏来	徳川のまつりごと――中世百姓の信仰的到達	吉川弘文館	2023年10月

編者・監修者名	書 籍 名（単独編集・監修）	出 版 社	発行年月
河西秀哉（監修） 小川金男（著）	皇室の茶坊主――下級役人がみた明治・大正の「宮廷」	創元社	2023年10月

著者名	書 籍 名（共著　～2 名）	出 版 社	発行年月
今井むつみ・秋田喜美	言語の本質――ことばはどう生まれ、進化したか	中央公論新社	2023年 5 月

編者名	書 籍 名（編集　～2 名）	出 版 社	発行年月
近本謙介・影山悦子	玄奘三蔵がつなぐ中央アジアと日本	臨川書店	2023年12月
大塚英志・星野幸代	労働と身体の大衆文化	水声社	2024年 1 月

1-2　受賞著書一覧（2023年度）

賞の名称	編著者名	書 籍 名	出版社	受賞年月
第 6 回八重洲本大賞／新書大賞2024	今井むつみ・秋田喜美	言語の本質 ――ことばはどう生まれ、進化したか	中央公論新社	2024年 2 月
国立国語研究所宮地裕日本語研究基金学術奨励賞	秋田喜美	オノマトペの認知科学	新曜社	2023年 6 月
第77回毎日出版文化賞	田島道治／古川隆久・茶谷誠一・冨永 望・瀬畑 源・河西秀哉・舟橋正真編	昭和天皇拝謁記 ――初代宮内庁長官田島道治の記録 （全 7 巻）	岩波書店	2023年11月

1-3　教員の自著紹介

今井むつみ・秋田喜美『言語の本質――ことばはどう生まれ、進化したか』中央公論新社

人間の言語はどうやって生まれたのでしょう？　この壮大な超難問に対する認知科学的な見解の一つを提示したのが本書です。「記号接地問題」と「アブダクション推論に基づくブートストラッピングサイクル」という概念を両輪としたストーリーを展開していますが、その出発点となるのが「オノマトペ言語起源論」です。オノマトペとは「ワンワン」「キラリ」「ドギマギ」のような擬音語・擬態語のこと。そこから言語ができていったのだとする仮説は、18世紀、あるいはそれ以前から存在します。近年、心理学・言語学を含む認知科学における研究の進展により、この仮説が再び注目されています。

本書の要点のみを噛み砕くと、以下のようになります。オノマトペは感覚印象を音で模倣的に写し取った言葉です。例えば「ワンワン」は、犬の声を言語音で真似た言葉。なので、身に沁みてわかりやすく、小さな子どもにも獲得しやすい。ただ、「ワンワン」は犬を指すのか、モフモフの動物一般を指すのか、動くもの一般を指すのか、あるいは目の前にいるポチだけを指すのか。子どもが言葉の本当の意味にたどり着くには、大人との交流を通した地道な試行錯誤が必要になります。何度も間違え、成長していきます。こうした自主的な試行錯誤が子どもの言語獲得、さらには人間ならではの言語進化を駆動してきたのではないか、というのが本書の提案です。

一方、オノマトペだけでは、記憶にもコミュニケーションにも限界があります。言葉がすべてオノマトペだったら、似た感覚印象には似た名前が付くはず。手術道具なら、メスAは（切る様子を模して）「スー」と呼び、メスBは「スィー」、メスCは「シュー」、メスDは「シー」。助手は、執刀医の指示を頻繁に聞き間違ってしまうことでしょう。単語が増えれば増えるほど、オノマトペ的な名前は覚えにくく、伝えにくくなります。さらに、オノマトペは、〈愛〉や〈１＋１＝２〉のような抽象的な概念を表すのが苦手だという欠点があります。その結果、「愛」や「１足す１は２」のような、模倣的でない「普通の言葉」が必要になってきます。先の自主的な試行錯誤の能力は、普通の言葉の獲得・創発にも応用されると考えています。

さて、第一著者の今井先生は子どもの言語発達などをご専門とされている心理学者、私（秋田）はオノマトペマニアの言語学者です。オノマトペを共通の関心として15年以上交流させていただく中で、今回の共著企画にお声がけいただきました。「言語研究の成果は英語で執筆し、国際誌で出版すべき！」と盲信している人間としては、日本語で一般書を書くことには何となく抵抗がありました。『言語の本質』というタイトルも何だか挑発的です。それでも、分野横断的な連携がうまくいくと、普段、言語理論の中でばかり考えてしまう「言語」という存在が、俯瞰的に捉え直され、新鮮な魅力を帯びはじめるのも事実だと感じています。

実は、本書の執筆は何年も遅延し、一時は断念の危機すらありました。ただ、そのおかげで、ちょうど生成AIが話題を呼んでいるタイミング（2023年５月）での出版となり、予想の数十倍の読者に恵まれました。今、「人間はなぜ言葉を使えるのか」「人間とは何なのか」といった根本的な疑問が、身近な関心事になっているのだと思います。人間の言語を問い、人間の知性を問うこと。まさに人文学の意義が試される時代です。

近本謙介・影山悦子編『玄奘三蔵がつなぐ中央アジアと日本』臨川書店

本書は、2021年９月29日に名古屋大学の最先端国際研究ユニット「文化遺産とアジア共創研究ユニット」（代表：近本謙介）が主催した国際ワークショップ「玄奘がつなぐ中央アジアと日本」がきっかけとなって企画された論文集である。

最先端国際研究ユニットとは、名古屋大学の研究大学強化促進事業の一つとして設置された。本学の研究活動の強みをより一層強化し、世界的な研究拠点の形成を目指し、2014年度以降、11のユニットが設置されている。理系のユニットがほとんどの中、2019年度に近本先生が代表となって応募した「文化遺産と交流史のアジア共創研究ユニット」が採択された。研究ユニットの初期メンバーは、学内メンバーとして日本考古学の梶原義実先生、海外の研究者として日本仏教史が専門のハンブルク大学の Steffen Döll 先生、若手研究者として当時名古屋大学の YLC 助教だった程永超先生（現在は東北大学准教授）の４人で、筆者（影山）は２年目にメンバーに加えていただいた。研究ユニットの目的は、アジア文化遺産プロジェクトと東アジア交流史プロジェクトを進め、文化遺産と交流史のアジア共創研究拠点を形成することである。

国際ワークショップ「玄奘がつなぐ中央アジアと日本」は、日本の中世宗教文芸を専門とする近本先生と、中央アジア文化史を専門とする影山が共同で企画したものである。玄奘に関する研究は様々な領域で盛んに行われている。対象とする時代や地域の異なる研究者が交流する機会になればと思い、このようなワークショップを開催した。コロナ禍によりオンラインで開催したワークショップには、国内外から150名近くの参加があり、玄奘への関心の高さが改めて感じられた。

本論集はワークショップの発表内容をもとにしているが、そのときの発表者・コメンテーター４名に加えて６名の方に寄稿していただいた。４部構成で、玄奘による中央アジアの旅の記録、玄奘の信仰と訳経活動、そして中央アジア、中国、日本における玄奘の記憶に関する研究論文10本を収める。

第１部　玄奘が旅した中央アジア　歴史、言語、美術
　第１章　玄奘とトゥルファン（荒川正晴）
　第２章　玄奘とソグド人（吉田豊）
　第３章　玄奘のコータン来訪とドモコのトプルクトン遺跡（エリカ・フォルテ）
第２部　玄奘の弥勒信仰と観世音信仰
　第４章　バーミヤーン西大仏と仏龕壁画　弥勒信仰の生成と玄奘の見聞・信仰（宮治昭）
　第５章　玄奘と観世音信仰（佐野誠子）
第３部　玄奘の訳経　造形と教義
　第６章　敦煌莫高窟初唐期仏龕内に描かれた維摩経変
　　玄奘訳『説無垢称経』による図像解釈（濱田瑞美）
　第７章　玄奘の訳経と教義論争（小野嶋祥雄）
第４部　玄奘の記憶
　第８章　敦煌文献『仏説金剛経纂』に見られる玄奘三蔵とその信仰（荒見泰史）
　第９章　古テュルク語訳『慈恩伝』研究の現在地と新視座（橋堂晃一）

第10章　玄奘が見たソグド人と「玄奘三蔵絵」のソグド人（影山悦子）

既に述べたとおり、本書が企画された契機は2021年のワークショップであり、その案内を見た出版社の方が近本先生に論文集の出版を打診したことが始まりであった。近本先生からすぐに電話があり、とても嬉しそうに企画の内容をお話しくださった。先生は、その頃、別の出版社から刊行される玄奘に関する論文集を編集しておられた（佐久間秀範・近本謙介・本井牧子編『玄奘三蔵――新たなる玄奘像をもとめて』勉誠出版、2021年）。玄奘を対象とする点は同じだが、玄奘を通して中央アジアから中国、日本をつなぐような論文集をつくることを企画した。そこで、ワークショップでご登壇いただいた荒川先生、吉田先生、フォルテ先生、荒見先生に加えて、宮治先生、佐野先生、濱田先生、小野嶋先生、橘堂先生に寄稿していただくことになった。

近本先生の訃報が届いたのは、原稿が集まり始め、刊行に向けて作業を進めていこうとしていた2023年２月半ばのことだった。あまりに突然のことで、とても現実のこととは思えなかった。論文集は予定通り刊行することが決まったが、経験のない筆者が編者の役目を果たすことができるとは思えなかった。近本先生がいらっしゃらない中でも刊行することができたのは、執筆者の方々のお力添えと臨川書店の西之原さんの支えのおかげである。心より感謝いたします。そして、本書の刊行を承諾してくださった近本先生のご家族に感謝申し上げます。

2024年３月、本論集の書評が読売新聞に掲載された。そこには近本先生のご業績の一つとして、「日本に残る仏教絵画や説話の分析を通じて、シルクロードをたどってもたらされた「西域」の影響を、日本の仏教文化の中で再評価したこと」が挙げられている。これは近本先生が組織した研究ユニットにおいて目指していたことでもある。2023年３月に、近本ユニットの活動継続が承認され、梶原先生が代表を引き継ぎ、さらに近本先生のもとで中世日本の宗教文芸について研究を行ってきた郭佳寧先生が新たにメンバーに加わった。近本先生が目指していたアジアの文化遺産と交流史の研究拠点の形成にむけて、今後も共同研究を続けていきたい。

［付記］本稿は、本論集の「はじめに」と「あとがき」、2024年３月16日に名古屋大学で開催された「故近本謙介教授追悼シンポジウム」での報告内容をもとにしている（影山悦子）。

古川隆久・茶谷誠一・冨永望・瀬畑源・河西秀哉・舟橋正真編
『昭和天皇拝謁記』全7巻、岩波書店、2011〜2023年

2019年8月、NHKによるスクープという形で、初代宮内庁長官の田島道治が執筆した、5年あまりに及ぶ昭和天皇との会話の詳細な記録「拝謁記」が公表され、大きな反響を呼んだ。本書は、その「拝謁記」を第1巻〜第5巻、その期間の田島の日記の一部を第6巻、長官退任後の日記の一部と田島宛の手紙、そして田島家に残された書類を収録した第7巻から構成される。このうち特に天皇と田島の会話記録である「拝謁記」は、同種の史料はこれまでにはなかった。たしかに天皇の発言は断片的な形で史料に残されていることはあったが、この「拝謁記」は二人の会話がそのまま記録されている。皇太子（現上皇）のことを「東宮ちゃん」と言ったり、軍人や政治家の人物評を繰り返すなど、昭和天皇の言葉遣いがそのまま伝わってくる史料である。その点で大変貴重と考えられる。

NHKスペシャルで放送された当初、今回の編者に掲げた最初4人が監修者となり、「拝謁記」の分析が行われた。私自身はその時は別のNHKスペシャルに関わっていたため、これには関係していなかった。そのため放送によってこの史料の存在を知り、ビックリしたことを今でも覚えている。その後、刊行するためそれに向けて手伝って欲しいという要請を受け、放送時に協力者であった舟橋氏とともに新しく加わった。そして科学研究基盤研究(B)「田島道治文書の分析と研究―象徴天皇制形成期の天皇と宮中―」（2000〜2023年度、課題番号20H01317、研究代表者：茶谷誠一志學館大学教授）を得て、刊行に向けての作業を行った。

しかし、その作業は困難を極めた。まず、昭和天皇と田島の会話がそのまま記録されているため、膨大な量であったことである。1949年2月3日から、宮内庁長官として最後の拝謁となる1953年12月16日までの622回分の拝謁、100万字を超える大量の記録内容が、手帳やノートなど合計18冊に会話調で記されている。後半になると田島も記録としてこれを残そうとしたのか、ノートに文字が几帳面に記されており読みやすい（しかし、後半になるにしたがって、一回あたりの文字数もより膨大になっている。本当に会話すべてを記録したのだろう）。ところが、前半は手帳にやや殴り書きしているかのような文字もあり、判読することが難しい。この活字化については、上記の科学研究費を使って、人文学研究科の大学院生や、旧知の東京大学などの大学院生にも手伝ってもらった。彼らの専門知の結集ともいえる。そしてそれを再確認する形で、編者が何度も原史料と突き合わせて文字を確定する作業を行った。　さらに、コロナ禍であったことが作業をより困難にした。「拝謁記」に出てくる人物や事項については、読者の便宜を図って注記を付けることにしたが、それを調べるために図書館などに通うことができない時期がコロナ禍ではたびたびあった。しかしオンラインでの史料調査などには限界もあり、緊急事態宣言やまん延防止等重点措置をかいくぐって、東京や各地での史料調査を重ねたこともある。また、本来ならば、編者が一同に集まって、読めない文字を確定する作業などをする必要があったが、それがなかなかできなかった。そのため、オンライン会議を多用し、「拝謁記」の読めない文字を画面共有しながら、全国各地から編者たちで知恵を出し合った。

NHKのスクープはあくまで「拝謁記」の一部を紹介したものであったため、刊行後はこれまで知られていなかった点が注目され、多くのメディアで紹介された。また、第7巻には、田島が長官退任後にかかわった皇太子妃選考に関する日記が収録されている。正田美智子に皇太子妃が決まるまでの過程が、断片的とはいえ記される。しかも、同巻に収録されている田島宛の手紙のなかには、精神科医の神谷美恵子のものがいくつかある。皇太子との結婚後、美智子妃は精神的に追いつめられることもあった。その時、田島は旧友の娘であった神谷を皇太子妃に紹介した。神谷は美智子妃の信頼を勝ち得たようで、美智子妃はその苦悩を神谷に話した。神谷は自らを紹介した田島にその様子を手紙で知らせており、これはこれまで外部には出てこなかったものである。その点でも貴重な史料集を刊行できたのではないか。こうした意義もあり、本書は第77回毎日出版文化賞（企画賞）を授賞した。今後、研究などで大いに活用されることが期待される。

小栗栖 等 Hitoshi OGURISU
Edition électronique du « Roland » de Cambridge. (Geste Francor 2)

フランス最古の文学作品の一つとされる『ロランの歌』は11世紀末頃に成立したとされるが、その物語を今日に伝える写本は 7 つ存在する。ただし、それらの筆写年代は12世紀から15世紀にわたっており、各写本が伝えるテクストは、極めて近い関係にある 2 つを除いて、互いに大きく異なっている。本書は、最も年代が新しい「ケンブリッジ写本」の刊行本である。

当該写本はこれまでに三度刊行されている。まず、19世紀末にヴェンデリン・フェルスターが校訂したものである。これは、u と v、i と j を区別しないディプロマティック版であり、句読点や詩行番号も付されておらず、文学的・言語学的な研究の素材とするには大変扱いづらいものであった。20世紀半ばにラウール・モルティエが手がけた校訂本は、上記の欠点を克服しているものの、写本ではなくフェルスター版に基づいて作成されたものであり、しかも誤植が多数ある。しかし、20世紀の研究者たちは、研究の基礎資料とするには信頼度に欠けることに気づいていながら、モルティエ版を利用し続けた。こうした嘆かわしい状況は、『ロランの歌』の研究が、ほとんどの場合、最古にして最良とされた「オックスフォード写本」のみを対象としてきたことと無関係ではない。モルティエは、『ロランの歌』のすべての写本を刊行したが（ただし、１写本は写真版である）、その難事業が引き継がれるには、まず、「オックスフォード写本」以外の写本が復権されなくてはならなかった。幸いなことに、20世紀の最後の四半世紀は、まさにその復権の時代であった。21世紀初頭に刊行された、ウォルフガング・ヴァン・エムデンの校訂本は、『ロランの歌』の全写本の刊行を目指す『フランス語コーパス ロランの歌』の一部である。これは、ジョゼフ・ダガン率いる英語話者の研究チームによって進められたプロジェクトで、モルティエの場合とは異なり、すべて写本に基づいた校訂本である。

上記の経過を考慮すれば、今日、「ケンブリッジ写本」を改めて校訂する意義が問われるのは当然のことであろう。実を言えば、『フランス語コーパス ロランの歌』が刊行された際（2005年）、私は『ロランの歌』の全写本のテクスト校訂を計画し、すでに、その作業に着手していた。したがって、当該校訂本の登場は、私の研究計画そのものを危機的状況に追い込んだのである。しかし、ここでは、「ケンブリッジ写本」だけに話をとどめよう。ヴァン・エムデンの校訂テクストに目を通して判明したのは、彼と私の間では方法論が大きく異なっているということであった。「ケンブリッジ写本」は多くの詩行で韻律が乱れている。基本的には10音節詩行で書かれているが、行によっては1–2音節（時にはそれ以上）が増減する。ヴァン・エムデンは他の写本に基づいて、あるいは純粋な推測によって、それらの詩行をできる限り「修復」しようと試みる。しかし、多くの場合、韻律の乱れは、フランス語の歴史的変化の結果にほかならない。それゆえ、韻律の「修復」は「ケンブリッジ写本」の言語を犠牲にしたものとならざるを得ない。実際、ヴァン・エムデンは、15世紀にはもはや使用されていない単語や語義を、他の写本から借用し、校訂テキストに流し込んだのである。そして、その借用は、往々にして、写本の関係性を考慮せず、韻律を合わせるためだけになされる。さらに、最新の写本を修復するために、最古の写本オックスフォード本を優先的に援用する傾向も見られる。しかも、ここに述べたことが、韻律と関係のない「修復」にも当てはまる。最悪のケースでは、オックスフォード本に従い、ケンブリッジ写本の詩行末の単語を置き換えたために、脚韻が破壊されてしまったのである（以上の問題点については、「ウォルフガング・G・ヴァン・エムデンのケンブリッジ版『ロラン』校訂本の方法論的問題（Problèmes méthodologiques de « The Cambridge version » du *Roland* éditée par Wolfgang G. van Emden）」で詳述した）。他方、私の方法論の基礎は、「ケンブリッジ写本」を15世紀のフランス語の証拠として、可能な限り尊重する、という点にある。そのため、韻律を理由にした「修復」は一切行なわない。また、私は『ロランの歌』の全写本校訂のため、膨大な数の作品テクストや辞書をデータベース化し、さまざまな電子ツールを開発した。それらを活用することにより、テクストに詳細かつ綿密な注釈を施した。そ

れらは、ヴァン・エムデンの説に異議を唱えるものもあるが、新しい視点から彼の説を補強したり、支持したりするものもある（これについては、拙論「ケンブリッジ写本『ロラン』の問題詩行についての注釈（Commentaires sur des vers problématiques du manuscrit de Cambridge du *Roland*）」を参照）。その点でも、新しい校訂本を刊行する意義があったと自負している。

本書の刊行は、長年の科研費の補助があって初めて可能となった。その研究計画で明記した通り、本書のPDF 版をすべての人に無料で公開する（具体的には、名古屋大学学術機関リポジトリで2024年10月頃を目処に公開する）。そのため、権利の問題が生じないよう、Amazon の Kindle Desktop Publishing を利用して出版を行なった。これは、出版費用の自己負担は全くないが、版下 PDF を自分で用意しなければならない。そこで、本文は MacTeX を使用して組版作業を行ない、表紙デザインは画像ソフト GIMP を用いて行なった。これらのソフトを維持管理し無料で公開してくださっている人々に感謝している。最後に、フランス語のネイティブ・チェックは同僚（現神戸大学専任講師）のクリストフ・ガラベ先生にお願いした。大部の本一冊のチェックは、通常の業務をはるかに超える作業であるにも拘らず、研究費から謝礼を出すことができず、心苦しいことこの上なかった。

斎藤夏来『徳川のまつりごと――中世百姓の信仰的到達』吉川弘文館

私の現在の専門は、日本列島の中世史、とくに信仰史、なかでも禅宗史である。ただ、歴史学を志す若者に時折みられる志向だが、学部生時代の私は自身に近いと思える「ごく普通の人々」、いわゆる「民衆」の地道な営みに興味があり、卒業論文では江戸時代の農村の古文書類を研究した。このような経緯から、私は最近の愛知県下の自治体史編纂事業ではおおむね「近世部会」に属し、独力では到底集め得ない大量の江戸時代の古文書類に、自分の力の及ぶ限りで接し続けてきた。近世から中世へと時代をさかのぼると、どうしても伝存史料は社会のごく一部を占めた支配層由来のものが中心となってくるが、江戸時代の古文書類は、「ごく普通の人々」により書き記され保管されてきた史料群の比重が高く、前近代世界における「民衆」の肉声を伝える点では世界史的な価値を有していると思う。こうした膨大な江戸時代の古文書類をみてゆくと、たしかに当時の社会は現代より不条理な面が多かったかもしれない。しかし、だからこそ、被支配層に属する人々ほど、自身が不条理な「社会の一員」であるだけでなく峻厳な「自然の一部」でもあるという紛れもない事実を強く意識しており、ゆえに信仰を大切にしており、そのような点では、「宗教の無用」を誇りがちな現代人より優れていた面があったのではないか。そうした問題関心をもってまとめたのが本書である。

論理的な構成は度外視して、所収論考の成り立ち順にみてゆくと、初出が一番古い論考（2007年）は、瀬戸市史編纂事業に参加していたときに接した、尾張藩祖徳川義直の廟所を擁する定光寺伝来の史料に関する検討である。江戸時代後期の尾張藩主は、将軍徳川吉宗の血筋をひく養子たちで占められるようになるが、彼らはかつてみられた天候不良による藩主の義直廟参詣延期を頑として認めず、従来なかった雨天時の対応を決めさせるなど、いわば「天候」よりも「血筋」なる「自然」を優先させるかのような高圧的な振舞を示している。藩主と対等に座して語り合ってきた定光寺の住持にも、土間で「平伏」せよと命じる有様であった。ところが領内における自然災害や歴代藩主の若死にが連続し、自然界の峻厳さというものに繊細な感覚をもっていたらしい新しい藩主の個性のもとで、一転して藩祖廟の藩主参詣の雨天延期が復活しているのは面白い。こうした史料に取り組んでいたころ、私は非正規の職員として名大附属図書館の新規購入資料であった尾張藩医野間家文書の展示（2008年）にも携わっていたが、愛知県史の調査（2009年）で訪れた知多半島の寺院に、全く思いがけず関連史料があることに気づいた。私はこの偶然の発見を、知多地域の市民向け講座で紹介し（2017年）、ついで附属図書館の研究年報にまとめた（2020年）。結論を簡単に言えば、尾張藩士野間家の先祖とも目された知多の中世菩提寺の個人主義的な檀那と、そのあと知多に存続した近世檀那寺の家主義的な檀家とは、相互に先祖―子孫とみなされた形跡がなく、血縁なる自然事象のつながりよりも、中世と近世との信仰観、価値観、自然観の断絶の方が深かったのである。

豊田市史編纂事業での知見をまとめた論考（2015年）では、三河や尾張の地域社会に多く残る綸旨や口宣案の徹底的な収集を試みた。これらは天皇の名をもって、地域の僧侶や神職らに種々の栄誉を付与していた文書類である。関連史料に恵まれている事例をみてゆくと、江戸時代の百姓出身の僧侶は、果たして個人として天皇に認められているというべきかどうかが、綸旨や口宣案などの文書の精確な様式理解、あるいは脱社会を志した中世仏教の到達と絡めて、鋭く論争されていた。この場合、実際の天皇の意志などはもとより副次的な問題にすぎなかった。ついでコロナ禍のころ、私はオンライン授業の素材として、徳川将軍が膨大に発給していた寺社領朱印状をとりあげることにした。パソコン上の暗い画面を相手に話すのは侘しかったが、意見を求めると、今の対面授業よりもはるかに「挙手」してくれる学生が多く、学生の方も膝を抱えてパソコンをみているだけでは侘しかったのだろうかと想像する。寺社領朱印状とは、徳川将軍が直々に、地方寺社のきわめて零細な規模の所領にいたるまで手厚く保護すべく発給していたもので、社会から隔絶した高い地位にあるかにみえる最高権力者の文書が農村史料と混在するかのように伝わっている点では、綸旨や口宣案と同様の不思議さがある。朱印状で所領を手厚く保護されていたいわゆる朱印寺社は、一般に地域

住民から嫌われていたが、嫌われていたこと自体にどうも意味があったらしい。すなわち関連史料を得られる事例をみてゆくと、朱印寺社は地域社会の矛盾を一手にひきうけ不満のはけ口となること、いわばスケープゴートに類する役割を果たすことを幕府からも村役人からも期待されており、最高権力者の名による不満のはけ口の消滅阻止は、村役人の難しい村運営において不可欠であり必要とされていた様相がみえてきたのである（2020年）。

三河足助の有力商家には、死ぬまで和解できなかった亡母と、愛してやまない亡妻とを等しく供養することで、自らも救われようとした当主が、「先祖」の個別の性格を問わない「歴代」の供養を成立させていたと読み取れる古文書や肖像画類が残されていた。通説では、歴史の基幹というべき経済的な「発展段階」のなかで、江戸時代の百姓に広く「家業」が確立すれば、「先祖歴代」の観念もおのずから成立すると考えられているが、疑う必要があると思う。この論と並行して、江戸時代初期の西尾藩主に仕えた儒者井川春良の詩文集を素材として、近世武士をめぐる信仰に関する新稿を構想していたが、その途上で、学生が卒論で取り組んでいた近世の黄檗僧・鉄牛道機の詩文集ともども、社会的な色眼鏡を外して人間をみようとする志向性があると気づき、思い切って学生の研究成果（2022年度卒論）に学ぶことにした。もちろん指導学生の卒論に依拠したことは注で明記し、それでも未発表の卒論を盗用しているような箇所があれば指摘してもらうべく、その卒業生に本書を謹呈したが、早々に興味深く読ませてもらったとしらせてくれた。お世辞もあろうが、名大の学生には難渋な専門書でも厭うことなく目を通せる読書家がいると実感できた。

反省点は多々ある。たとえば、もはや著者校正のない段階で追加した史料の「不孝」の表記が「不幸」となったのは、まさに不幸なことであった。また、膨大に残る徳川の寺社領朱印状について、よくあることだが刊行後に重要な見落としに気づき、旅行先の京都の古寺で、なんと！その朱印状の原本が「虫干し」されている現場に行き合い、まじまじと徳川家康の捺印がある朱印状原本に対面し、落胆と高揚とが入り交じった不思議な感覚を味わった。

ところで、私が研究上の関心事としている宗教や信仰などの営みは、歴史学ではともすれば、何らかの社会的・経済的な打算と論じられがちである。しかし信仰とは本質的に、どのような社会的打算とも一切無関係に万人に訪れる生老病死など、峻厳な自然事象に対する抜きがたい好奇心が根本にあるはずではないか。私はそうした恐怖と探究心とのないまぜとしての信仰史を、科学史から学び再構築する必要があるのではないかと考え始めている。科学史に名を残す自然科学者が、古今東西の古典に深い関心をもっていたことは半ば周知の事実だが、分断の進む理系と文系とが再度連携を取り戻し、学問の総体的な発言力を取り戻す手がかりにもなり得るかと思っている。

量子力学の創設者の一人とみなされているデンマークのニールス・ボーアは、歴史や哲学の専門家たちと深く交流しつつ、また、いたずらに国際語や数式を操り社会から隔絶するのを避け、母国語でじっくり考えてこその成果を示しつつ、シラー「孔子の格言」を愛唱し仏典「雑譬喩経」の内容を好んでいたという。ボーアを批判的にみる必要もあろうが、そのためにも科学史上の類例をさがすことが今の私の関心事の一つである。そのボーアによると、「達人とは、人が最も制限された分野の中ですら冒すことがありうる最悪の誤りのあるものについて、ほんのわずかな断片を、自らの苦痛に満ちた経験によって学びとった人のこと」だという。しめしめ、よかった、私も「達人」に近づいているのかもしれない、と思ってしまうのはおこがましすぎるだろうか。

２．各種報告

2-1　大学院教育の国際化に向けて

国際化推進室活動報告（曾 煒）

国際化推進室では、次のような業務を行っています。留学生への支援（相談、チューター配置、オリエンテーション、日本語添削室など）、国費留学生や私費外国人研究生の受け入れ（面接など）、協定校への交換留学生の派遣、協定の締結、協定校との交流事業（研究集会の実施）です。これらの日常業務に加え、近年、日本での就職を目指す留学生が増えているため、全学の留学生支援事業費を利用してキャリア支援事業も展開しています。また、留学生と日本人学生の異文化理解を深めるため、「名古屋大学多文化共生川柳コンテスト」も開催しています。以下では、2023年度に行ったキャリア支援事業と「名古屋大学多文化共生川柳コンテスト」について報告します。

2023度のキャリアサポート活動として、外部講師に依頼し、計 4 回の就職セミナーとワークショップを行いました。具体的に、実施したセミナーとワークショップは以下の通りです。

1．文系留学生のための就活セミナー（2023年 9 月20日）
2．競争力のある応募書類の作成：ES と CV の違い（2023年12月 6 日）
3．グループディスカッション訓練（2024年 1 月17日）
4．模擬面接ワークショップ（2024年 2 月 7 日）

これらのイベントに加え、キャリアカウンセラーによる個別キャリア相談を 9 月から 3 月まで毎月 1 回、計 7 回（対面とオンラインの両方）で実施しました。

また、国際化推進室が主催して、「第四回名古屋大学多文化共生川柳コンテスト」をオンラインで開催しました。本コンテストは、留学生と日本人学生の相互理解を深め、多文化共生を推進することを目的としています。川柳という日本の伝統的な文芸形式を通じて、多言語での表現を奨励し、参加者が自国の文化と日本文化の共通点や相違点を見つける機会を提供します。川柳の創作を通じて日本語の微妙なニュアンスや表現を学ぶと共に、自国の文化を再認識し、それを日本語で表現することに挑戦する機会を得ました。さらに、今年度のコンテストは名古屋大学ジェンダーダイバーシティセンターの協力で、「ダイバーシティ」をテーマとして選びました。ダイバーシティ教育は、現代社会において不可欠な要素であり、学生が多様な価値観を理解し、尊重するための重要な基盤です。「ダイバーシティ」をテーマにした作品を作成することにより、学生が他者の立場や背景を理解し、共感する能力、多様な視点や考え方を受け入れ、柔軟な思考を養うことを目指しています。今年度は本学の学生（留学生を含む）、職員、協定校の学生、社会人から日本語と英語の作品が600首以上の応募がありました。そのうち、ジェンダーダイバーシティ、文化の多様性に関する優秀な作品も多数あります。

留学生のニーズは多様であり、年々変化しています。国際化推進室では今後も、異文化理解、留学生教育に役に立つイベントやサポートを提供していく予定です。

第10回名古屋大学・台湾大学大学院生研究発表会（飯田祐子）

2023年度、第10回となる名古屋大学・台湾大学大学院生研究発表会が台湾大学にて開催され、人文学研究科研究プロジェクトの支援を得て、名古屋大学からは四名の院生が参加した。引率は飯田祐子・星野幸代・宮地朝子の三名が行った。 9 月21日に現地に到着し、中正紀念堂をはじめとする台北市内の歴史的な建築物などを見学した。22日午前には、台湾大学内の校史館や原住民族の展示などを案内していただき、台湾や台湾大学の歴史について学ぶ機会を得た。

13時より、共同教学館407教室にて、院生発表会を実施した。プログラムは、以下のとおりである。

12:40–13:00：報到
13:00–13:05：開幕式　致詞：曹景惠（臺灣大學日本語文學系副教授兼主任．日本研究中心主任）
13:05–13:10：紀念合影

論文發表 (一)　主持人：飯田祐子（名古屋大學人文學研究科教授）
13:10–13:40　發表人：蔡知穎（臺灣大學日本語文學系碩士班）
題　目：坂口れい子の作品における優生思想―「時計草」と「番地」を中心に
評論人：飯田祐子（名古屋大學人文學研究科教授）
13:40–14:10　發表人：江口航（名古屋大學人文學研究科映像學修士課程）
題　目：侯孝賢作品における翻案研究の不足とその原因からの探究
評論人：王憶雲（臺灣大學日本語文學系副教授）
14:10–14:40　發表人：MOREIRA DE SOUZA Beatriz（名古屋大學人文學研究科日本文化學博士課程）
題　目：妻から母へ：明治女流文学における家制度、出産、母性に着目して
評論人：洪瑟君（臺灣大學日本語文學系副教授）
14:40–14:55　綜合討論
14:55–15:05　Break Time

論文發表 (二)　主持人：星野幸代（名古屋大學人文學研究科教授）
15:05–15:35　發表人：林祐儀（臺灣大學日本語文學系碩士班）
題　目：日本語における漢語の意味変遷についての一考察―「深刻」を例として
評論人：星野幸代（名古屋大學人文學研究科教授）
15:35–16:05　發表人：呂冠儀（臺灣大學日本語文學系碩士班）
題　目：修飾語としての「かわいい」とその修飾名詞について
評論人：宮地朝子（名古屋大學人文學研究科教授）
16:05–16:15　綜合討論
16:15–16:25　Break Time

論文發表 (三)　主持人：林立萍（臺灣大學日本語文學系教授）
16:25–16:55　發表人：古木龍太郎（名古屋大學人文學研究科日本史學修士課程）
題　目：大学紛争と学生自治会：愛知県内の学生自治会を中心に
評論人：安井伸介（臺灣大學政治學系副教授）
16:55–17:25　發表人：岩崎はづき（名古屋大學人文學研究科文化人類學修士課程）

題　目：日韓現代美術の比較：光州ビエンナーレと国際芸術祭あいち2022を例に
評論人：田世民（臺灣大學日本語文學系副教授）

17:20–17:35　綜合討論

17:35–17:40　閉幕式　致詞：飯田祐子（名古屋大學人文學研究科教授）

名古屋大学の発表については、台湾大学の先生方より貴重なコメントをいただいた。台湾大学の院生は3名が発表し、本学教員がそれぞれにコメントを行った。聴衆には、台湾大学の院生・学生のみならず、近隣の大学からも参加があり、十年間継続してきた本研究発表会の広がりが感じられた。発表会後は、懇親会が催され、院生間の交流を図った。

たいへん充実した研究会となり、発表した院生にとっては、海外の研究者の意見を得るとともに、同世代の院生とのコミュニケーションを図る貴重な機会となったといえる。コロナ禍の期間は、オンラインで開催する形で継続してきたが、久しぶりの対面開催となり、その有り難みが実感される三日間であった。

日中学術交流推進プロジェクト（杉村 泰）

日中学術交流促進プロジェクトは中国の大学との学術交流を目的としたもので、2007年 3 月に西安外国語大学と合同研究会を開催して以来現在まで続いている。近年は上海の大学と交流を続けており、日中の言語、文学、文化などの学術交流を促進するとともに、本研究科の受験生募集や修了生の就職に貢献している。2023年度は次の 3 つの合同研究会を開催した。

1．第 5 回上海財経大学・名古屋大学合同研究
　2024年 3 月15日（金）　於 上海財経大学
　発表12本（名古屋大学 5 、上海財経大学 6 、青島農業大学 1 ）
2．東アジア日本学研究シンポジウム
　2024年 3 月16日（土）　於 上海外国語大学（東華大学共催）
　発表29本（名古屋大学 5 、上海師外国語大学15、東華大学 8 、上海大学 1 ）
3．第 8 回上海師範大学・名古屋大学言語文化学術交流会
　2024年 3 月17日（日）　於 上海師範大学
　発表12本（名古屋大学 5 、上海師範大学 6 、上海大学 1 ）

発表の内容は日本や中国の言語、文学、文化、歴史、言語教育などに関するもので、いずれも日本語による発表・討論である点が特徴である。国際語といえば英語が連想されやすいが、日本語で高度な研究交流ができることは重要である。

本研究科には300人以上の留学生が在籍しており、その大半が中国人留学生である。文系の大学院が中国人留学生によって支えられていることは他大学でも同様で、各大学とも優秀な中国人留学生の獲得に向けて戦略を立てている。このような中で本プロジェクトは本研究科の研究力を中国国内に発信するのに大きな役割を果たしている。

最初に本プロジェクトを実施した西安外国語大学とは2016年に学術交流協定を締結した。西安外国語大学の日本文化経済学院は中国北西部で最も有力な日本語の教育研究機関である。毎年ここから来る交換留学生は優秀で、本学で博士号を取得した後、現在西安外国語大学に戻って教育研究に従事している人もいる。

上海財経大学も中国の有名大学の一つで、日本語学科には現在本研究科（前身も含む）の修了生が 3 名在職している。上海外国語大学は北京外国語大学と並ぶ中国の名門外国語大学であり、東華大学も日本語関連の教育研究が盛んな大学である。両校とも本研究科と学術交流協定を結んでおり、毎年優秀な学生が交換留学生として来ている。上海師範大学は上海市直属の教員養成系大学で、上海市における教員養成や教員のリカレント教育に力を入れている大学である。

いずれの大学の日本語学科も高水準の日本語人材を輩出し、教員の研究も盛んに行われている。毎年これらの大学と学術交流を行うことにより、本研究科の教育研究を中国国内に発信し続けている。

Ⅲ　各種データ

1．教育の現況

1-1　教育プログラムの構成

資料1-1-1　人文学研究科の学位プログラム・コースと分野・専門（2023年度）

学位プログラム	分野・専門／コース／プログラム
言語文化学繋	言語学・日本語学・日本語教育学・応用日本語
英語文化学繋	英語学・英米文学・英語教育学
文献思想学繋	日本文学・中国語中国文学・ドイツ語ドイツ文学・ドイツ語圏ドイツ文化学・フランス語フランス文学・西洋古典学・哲学・中国哲学・インド哲学
超域人文学繋	映像学・日本文化学・文化動態学・ジェンダー学・メディア文化社会論
歴史文化学繋	日本史学・東洋史学・西洋史学・美学美術史学・考古学・文化人類学
英語高度専門職業人	英語高度専門職業人コース
多文化共生系	国際・地域共生促進コース
G30国際プログラム	言語学・文化研究プログラム
	「アジアの中の日本文化」プログラム

資料1-1-2　文学部のコースと分野・専門（2023年度）

学位プログラム	分野・専門／プログラム
言語文化学繋	言語学、日本語学
英語文化学繋	英語学、英米文学
文献思想学繋	ドイツ語ドイツ文学、ドイツ語圏文化学、フランス語フランス文学、日本文学、中国語中国文学、哲学、西洋古典学、中国哲学、インド哲学
歴史文化学繋	日本史学、東洋史学、西洋史学、美学美術史学、考古学、文化人類学
環境行動学繋	社会学、心理学、地理学
G30国際	「アジアの中の日本文化」プログラム

1–2　国際化

資料1–2–1　大学院生の海外研修（オンライン含む延べ人数）（2023年度）

学年（人数）	研修先の国名（機関名）	研修期間
D3（11）	韓国（成均館大学校・**韓国外国語大学校 2 名**・なし 5 名） インドネシア（なし 2 名） カナダ（ウインザー大学）	10日・**1 日 2 名**・7 日／10日 2 名／半月 2 名 3 日／ 5 日 7 ヶ月
D2（10）	イタリア（ブリティッシュスクール） インドネシア（なし） オーストリア（科学アカデミーアジア文化思想史研究所） 韓国（韓国外国語大学校・**韓国外国語大学校**・なし ） 中国（南京大学・なし 3 名）	半月 5 日 7 日 3 日・**1 日**・4 日 5 ヶ月・6 日／1 ヶ月半／9 日
D1（10）	中国（復旦大学・延吉大学・なし） インドネシア（なし） 台湾（国立台湾大学・なし） 韓国（韓国外国語大学校・**韓国外国語大学校 2 名**・韓国外国語大学校一般大学院と国際地域大学院）	10日・8 日・半月 5 日 2 日・8 日 1 日・**1 日 2 名**・3 日
M2（12）	ポーランド（なし） オーストラリア（なし） 台湾（国立台湾大学・なし） 香港（香港大学） 韓国（木浦大学 2 名・**韓国外国語大学校**） フランス（なし 2 名） フィリピン（なし） ブラジル（カンピーナス大学）	1 ヶ月 6 日 9 ヶ月半（～2024年度）・3 日 9 ヶ月（～2024年度） 2 日 2 名・**1 日** 7 日／8 日 6 日 1 年
M1（13）	ベトナム（ベトナム国家大学ハノイ） ドイツ（フライブルク大学） フィリピン（3 D アカデミー） 中国（大連理工大学） 台湾（国立台湾大学 3 名） アメリカ（オレゴン大学） 韓国（梨花女子大学・木浦大学 3 名・韓国外国語大学校）	9 ヶ月半 1 ヶ月 1 ヶ月 9 日 2 日 3 名 1 ヶ月 半月・2 日 3 名・1 名

注：オンライン研修は太字で示されている。
　　協定校は下線で示されている。
出典：文系教務課

資料1–2–2　学部生の海外研修（オンライン含む）（2023年度）

学年（人数）	研修先の国名（機関名）	研修期間
学部 4 年（4）	カナダ（オタワ大学・スプロットショウランゲージカレッジ） イギリス（リーズ大学） フィンランド（ヘルシンキ大学）	8 ヶ月半（2022年度～）・ 5 ヶ月半 9 ヶ月（～2024年度） 5 日
学部 3 年（9）	フランス（リヨン第三大学） ノルウェー（オスロ大学 2 名） オーストラリア（西オーストラリア大学） デンマーク（コペンハーゲン大学） アメリカ（フロリダ大学） 台湾（国立台湾大学） イギリス（ウォリック大学） 韓国（ソウル国立大学校）	10ヶ月半（2022年度～） 10ヶ月半（2022年度～）／11ヶ月（～2024年度） 5 ヶ月（2022年度～） 11ヶ月（～2024年度） 9 ヶ月（～2024年度） 1 年（～2024年度） 9 ヶ月（～2024年度） 10ヶ月（～2024年度）
学部 2 年（16）	カナダ（LSI トロント校・なし） イギリス（LSI ロンドンセントラル校） 中国（大連理工大学 5 名） アメリカ（オレゴン大学 ） タイ（チュラロンコン大学） オーストラリア（西オーストラリア大学 4 名） 台湾（国立台湾大学） フランス（ストラスブール大学 ）	1 ヶ月・ 1 ヶ月 3 週間 9 日 5 名 1 ヶ月 半月 5 週間 4 名 3 週間 半月
学部 1 年（6）	中国（大連理工大学） カザフスタン（アルファラビカザフ国立大学） フランス（ストラスブール大学 2 名） アメリカ（ノースカロライナ州立大学） オーストラリア（西オーストラリア大学）	9 日 3 週間 半月 2 名 3 週間 5 週間

注：オンライン研修は太字で示されている。
　　協定校は下線で示されている。
出典：文系教務課

資料1–2–3　留学生経費支払実績額（2023年度）

区　分	学期	支払実績額（千円）	備　考
チューター謝金	前期	1,490	60名
	後期	1,626	67名
ネイティブチェック支援	前期	126	8 名
	後期	875	51名

出典：文系教務課

資料1–2–4　大学院留学生の受入実績（2023年度）

研修先の国名（機関名）	研修期間	人数
東呉大学	6 ヶ月	2
上海外国語大学	6 ヶ月	4
中国人民大学	6 ヶ月	1
西安外国語大学	1 年	2
東華大学	6 ヶ月	1
ウォリック大学	8 ヶ月	1

注：オンラインではないものは太字で示されている。
　　協定校は下線で示されている。
出典：文系教務課

1–3　FD

資料1–3–1　ファカルティ・ディベロップメント（FD）開催実績一覧（2023年度）

主催もしくは講師所属先	実施内容	参加者数	日時	講演者
学生支援本部	ポストコロナの名大生における心の健康 ～部局連携のお願い～	90	6/21	松本寿弥学術主任専門職
名古屋大学公正研究委員会 東海国立大学機構研究戦略部研究安全管理課	名古屋大学研究倫理教育 e-Learning	89	7/19	周藤芳幸研究科長
学生支援本部 アビリティ支援センター	改めて、合理的配慮について	86	9/13	工藤晋平センター長
IR 戦略室	大学ランキングの仕組みと現状	90	12/20	堤良恵リサーチ・アドミニストレータ
東海国立大学機構法人統括管理責任者	研究費等の適正な使用について	87	1/17	中東正文機構長補佐

出典：文系総務課

1–4　大学院生・若手研究者等の支援

資料1–4–1　大学院生支援事業実施状況（2023年度）

事業名	前期課程（件数）			後期課程（件数）			計	助成決定額（千円）
	国内	国外	謝金	国内	国外	謝金		
研究発表支援事業				0	3		3	462
フィールド調査プロジェクト	5	1	2	1	1	1	11	723
計	5	1	2	1	4	1	14	1,185

出典：教育研究推進室

資料1–4–2　各種研究員等受入状況

	博士研究員	博士候補研究員	CHT 共同研究員	TCS 共同研究員	YLC 助教	客員研究員
2019年度	16	23	10	1	5	17
2020年度	17	21	8	0	0	6
2021年度	15	25	8	2	3	7
2022年度	17	29	6	1	4	10
2023年度	23	27	7	1	4	5

注：CHT＝人類文化遺産テクスト学研究センター
　　TCS＝超域文化社会センター
出典：文系総務課

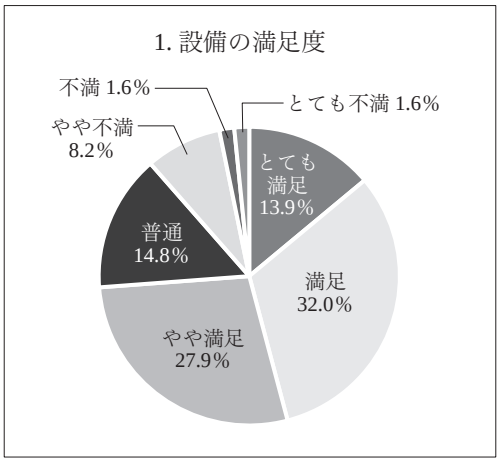
1-5　教育の成果

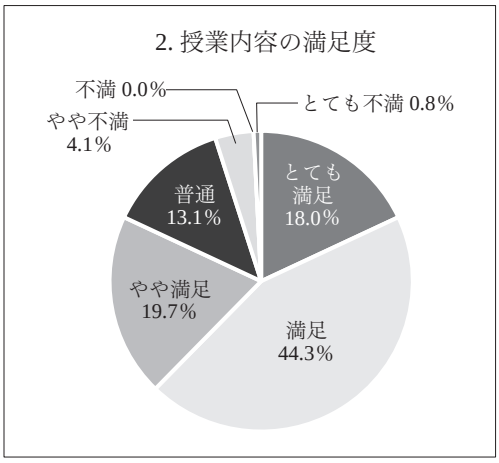
資料1-5-1　教育環境の満足度調査（2023年度）

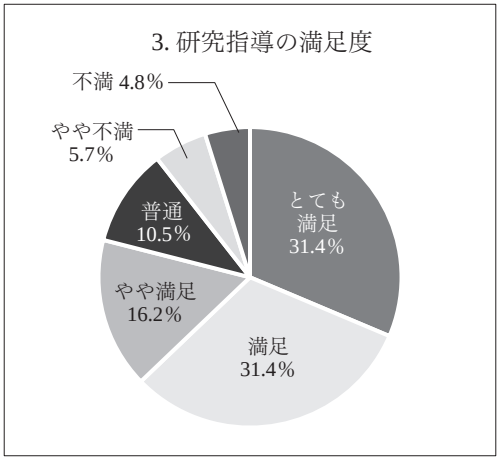
・教育環境の満足度調査の項目
1．教室や図書室などの施設設備の満足度を教えてください。
2．シラバスや受講している授業の内容についての満足度を教えてください。
3．所属する分野・専門の教員からの研究指導などについての満足度を教えてください。
4．全般的にみた、本学部・研究科の教育および学習環境についての満足度を教えてください。

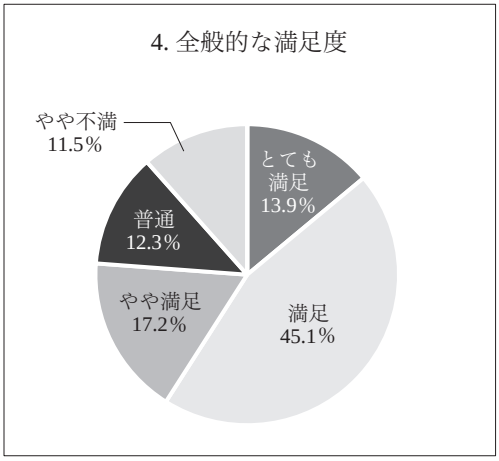
・教育環境の満足度調査の結果（%）

設問	とても満足	満足	やや満足	普通	やや不満	不満	とても不満
1	13.9	32.0	27.9	14.8	8.2	1.6	1.6
2	18.0	44.3	19.7	13.1	4.1	0.0	0.8
3	31.4	31.4	16.2	10.5	5.7	4.8	0.0
4	13.9	45.1	17.2	12.3	11.5	0.0	0.0









出典：文系教務課

資料1−5−2　大学院生等の研究業績件数

	論文発表		学会発表		受賞	研究助成
	査読有	査読無	国際	国内		
2019年度	74	27	43	83	1	4
2020年度	76	22	39	72	4	1
2021年度	6	6	3	16	5	7
2022年度	22	3	5	28	1	12
2023年度	41	13	15	53	5	15

〈受賞〉　名称　学年（年度）

日本語／日本語教育研究会第11回研究大会ポスター賞　D2（2019年度）
朝鮮大学人文学研究院・518記念財団優秀論文賞　D3（2020年度）
日本英語学会大会優秀発表賞　D3（2020年度）
日語教育与日本学研究国際会議研究生学述論壇優秀論文評選　D3（2020年度）／M1（2022年度）　通算 2 名
第16回日本近世文学会賞　D1（2020年度）
日本中国学会賞　研究員（2021年度）
「伊勢の御師フォーラム2021」懸賞論文最優秀賞　D（2021年度）
TMI QE1優秀賞　M（2021年度）
漢日対比語言学研討会大学院生フォーラム優秀賞　D3（2021年度）／D1（2023年度）　通算 2 名
全国学生英語プレゼンテーションコンテストトップ50入賞　M（2021年度）
日本語用論学会第26回大会発表賞　D3（2023年度）
SCMS　Urbanism/ Geography/ Architecture SIG Student Writing Award　D3（2023年度）
宮本賞　D3（2023年度）
THERS 優秀リサーチャー　D3（2023年度）

〈研究助成〉　名称　学年（年度）

公益財団法人松下幸之助記念志財団研究助成　D1（2019年度）／D3（2019年度）　通算 2 名
ロータリー米山記念奨学金　D 2（2019年度）／D 2（2021年度）　通算 2 名
東海ジェンダー研究所研究助成　D 2（2019年度）
公益財団法人鍋島報效会研究助成　研究員（2020年度）
TM1卓越大学院プログラム履修生　M（2021年度）
笹川科学研究助成　研究員（2021年度）／D3（2022年度）　2 名　通算 3 名
日本学術振興会特別研究員 DC2　D2（2021年度）
名古屋大学融合フロンティアフェローシップ事業（アジア未来創造分野）　D1（2021年度）／D2（2022年度）／D1（2023年度）　2 名／D2（2023年度）　通算 5 名
伊藤忠兵衛基金　D1（2021年度）／D2（2022年度）／D3（2023年度）　通算 3 名
東海国立大学機構融合フロンティア次世代リサーチャー事業　D3（2021年度）／D1（2022年度）／D2（2022年度）2 名／D3（2022年度）／D2（2023年度）　2 名／D3（2023年度）　通算 8 名
日本学術振興会特別研究員奨励費　D2（2022年度）／D3（2022年度）／D3（2023年度）　通算 3 名
人文学研究科フィールド調査プロジェクト　D1（2022年度）／D2（2022年度）／M2（2023年度）／D2（2023年度）　通算 4 名
丸山奨学金　研究員（2023年度）
ヒロセ財団奨学金　M2（2023年度）
人文学研究科研究発表支援事業　D1（2023年度）／D3（2023年度）　通算 2 名
大幸財団第43回学芸奨励生　D3（2023年度）

出典：教育研究推進室

1-6　進路

資料1-6-1　就職活動セミナー開催実績一覧（2023年度）

開催日	名　称	講　師
2023年９月20日	留学生のための就活ガイダンス	坂口真美（キャリアコンサルタント） 李永昊（東洋史学） 趙宇飛（メデイア文化社会論）
2023年11月17日	文学部・人文学研究科 就職セミナー2023	キャリアサポーター（株式会社マイナビ） 船津静代（学修総合センター　就職相談部門）
2023年12月15日	文学部・人文学研究科 教職セミナー2023	野々垣秀将（愛知県立豊田西高校　英語科） 林ゆきの（愛知県立横須賀高校　国語科） 上野晃平（私立滝学園　社会科）

出典：文系教務課・国際化推進室

資料1-6-2　学芸員・自治体職員・教員の養成人数

	学芸員	自治体職員	教　員
2019年度	2		
2020年度	3		
2021年度	3		
2022年度	7		
2023年度	13（1）	11	22（14）

注：学芸員のカッコ内は、内数でリカレント教育
　　教員のカッコ内は、内数で大学教員
　　2023年度より、自治体職員・教員のカウントを開始
出典：教育研究推進室

1–7　高大連携

資料1–7–1　教員による高校訪問、高校による大学訪問、出張講義等実施実績一覧

2019年度		2020年度		2021年度		2022年度		2023年度	
5月15日	私立麗澤瑞浪高校	10月1日	私立愛知淑徳高校	6月3日	私立愛知淑徳高校	6月15日	名古屋市立緑高校	6月21日	私立静岡理工科大学星稜高校
5月23日	岐阜県立斐太高校	11月9日	愛知県立江南高校	6月29.30日	私立福井南高等学校	7月7日	名古屋大学教育学部附属高校	8月16日	愛知県立知立東高校
6月10日	浜松市立浜松高校	11月12日	名古屋市立菊里高校	7月第1週	名古屋大学教育学部付属高校	7月11日	三重県立桑名高校	9月21日	愛知教育大学付属高校
7月9日	愛知県立明和高校	12月21日	愛知県立明和高校	10月15日	愛知県立半田高校	7月14日	愛知県立明和高校	10月18日	愛知県立豊橋東高校
7月27日	私立聖隷クリストファー高校	3月12日	福井県立藤島高校	10月21日	愛知県立刈谷北高校	7月15日	私立聖隷クリストファー高校	10月19日	愛知県立刈谷北高校
8月6日	愛知県立知立東高校			10月25日	愛知県立岡崎高校	9月15日	静岡県立磐田南高校	10月19日	愛知県立西尾高校
9月3日	愛知県立刈谷北高校			10月27日	愛知県立豊橋東高校	10月12日	愛知県立半田高校	11月7日	岐阜県立多治見北高校
9月17日	岐阜県立多治見北高校			10月28日	愛知県立西尾高校	10月20日	愛知県立刈谷北高校	11月9日	愛知県立豊田西高校
9月20日	岐阜県立岐阜北高校			11月8日	愛知県立江南高校	10月25日	愛知県立豊橋東高校	11月10日	愛知県立半田高校
9月27日	愛知県立松蔭高校			11月10日	愛知県立豊田北高校	10月25日	私立南山高校男子部	11月13日	愛知県立江南高校
10月16日	愛知県立半田高校			11月11日	名古屋市立菊里高校	10月27日	愛知県立西尾高校	以下日付不明	名古屋市立菊里高校
10月18日	私立愛知高校			11月16日	岐阜県立岐阜北高校	11月8日	岐阜県立多治見北高校		愛知県立東郷高校
10月21日	愛知県立岡崎北高校			11月16日	岐阜県立多治見北高校	11月10日	名古屋市立菊里高校		私立クラーク記念国際高校
10月28日	愛知県立江南高校			11月18日	愛知県立豊田西高校	11月14日	愛知県立江南高校		名古屋大学教育学部附属高校
10月29日	私立南山高校・中学男子部			12月20日	愛知県立明和高校	11月17日	愛知県立豊田西高校		静岡県立磐田南高校
10月31日	愛知県立西尾高校								愛知県立明和高校
11月7日	愛知県立豊田西高校								
11月12日	岐阜県立多治見北高校								
11月13日	愛知県立豊田北高校								
11月22日	愛知県立半田東高校								
1月21日	名古屋市立菊里高校								
3月12日	福井県立藤島高校								

出典：文系教務課・広報体制委員会議事録・教育研究推進室

２．研究の現況

2-1　研究の成果

資料2-1-1　教員の研究活動状況

	著書数		招待論文数		査読付き論文数		その他
	日本語	外国語	日本語	外国語	日本語	外国語	
2019年度	28（6）	12（3）	36	14	29	21	275
2020年度	40（8）	13（0）	33	3	19	29	203
2021年度	53（3）	7（1）	0	0	38	35	69
2022年度	33（6）	17（2）	22（4）	14（7）	17	24	
2023年度	20（2）	6（1）	24	13	14	25	71

注：著書数については、内数（カッコ内）として「単著」の数を記載。
　　学会発表や「査読付き論文」に当たらない論文などについては、「その他」としてカウント。
　　「招待」かつ「査読付き」の場合は、「招待」でカウント。
　　カウントの基準の変更によって、例年と数値が異なる場合がある。
出典：教育研究推進室

資料2-1-2　国際／国内研究集会開催件数（教員延べ件数）

	国際研究集会	国内研究集会
2019年度	16	16
2020年度	12	29
2021年度	46	44
2022年度	15	45
2023年度	16	47

出典：教育研究推進室

資料2-1-3　共同研究実施件数（教員延べ件数）

経　費	授業料	科学研究費補助金	名古屋大学全学諸経費	人文学研究科プロジェクト経費	その他
2019年度	6	57	10	6	46
2020年度	2	37	0	1	17
2021年度	11	65	5	6	25
2022年度	0	89	4	3	24
2023年度	21	74	4	6	26

出典：教育研究推進室

資料2–1–4　海外における調査・フィールドワーク件数

実施国	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
アメリカ	3	1（1）		1	1
イギリス	5	4（4）		24（18）	24
イタリア	1				3
インドネシア					2
ウズベキスタン				2	3
エジプト	1				1
エチオピア		1（1）	1		3
エルサルバドル	2				
オーストラリア				1	
オーストリア			1		2
カメルーン		3（3）			
韓国	2				3
ギリシャ	1				1
キルギス	1			1	1
グアテマラ	1				
サマルカンド				2	
スペイン	1	1（1）		1	
台湾	4			1	2
中国	5		6（6）	8（8）	10（5）
ドイツ	2			1	4
トルコ	1				1
ノルウェー	1				
フィリピン	1		1（1）		2
フィンランド				1	1
ブラジル					1
フランス	6	2（2）	1（1）	4	3
マレーシア					1
メキシコ	1		1（1）		
ラオス	1				3
ロシア	1				
不明		1（1）		24	3（1）

注：（　）内はオンラインの内数
出典：教育研究推進室

資料2−1−5　研究会実施回数

学会・研究会の名称	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
奥田靖雄プロジェクト研究会	1	6	12	12	
フーコー研究：人文科学の再批判と新展開	6				
イマージュ論研究会	3				
名古屋大学会話分析データセッション	12	5	10	10	12
名古屋大学英語学談話会	10				
「身体と記憶の共鳴」研究会 （2019年度より「予測を生み出す推論装置」研究会へ名称変更）	3	1	4	1	
名古屋平安文学研究会	2	1		2	2
日本語教育研究集会	1			1	
名古屋音声研究会	10	3	2	1	2
名古屋言語研究会	5	5	5	5	1
名古屋大学国語国文学会	2	1	1		1
Nagoya Iconicity in Language and Literature Society（NILLS）	1				
名古屋大学アメリカ文学・文化研究会	1	1			
フェミニズム・ジェンダー読書会	7	3	4	4	4
1930年前後左翼運動の文化実践におけるジェンダーとセクシュアリティ	3	1			
1930年代における東アジア女性雑誌の比較研究	3	2		4	4
賢愚経研究会	6				
先導的人文学研究	3				
歴史教育研究会	1				
東アジアと同時代日本語文学フォーラム	1	1	1	1	1
古書の会	11				
象徴天皇制研究会	4	3		1	4
名古屋大学西洋古典研究会	1				
仏教教学研究会	5				
日中文献交流史研究会	6				
比較人文学研究会	15				
中世史研究会	10	10			
中国語文献を読む会（in 名古屋）	1	2	3	3	3
中国社会研究会	6	8			
日本フランス語フランス文学会中部支部大会	1	1	1		
ボルヘス原書読書会	30				
「訳官使・通信使とその周辺」研究会	3			10	
六度集経研究会	3				
「言説と情動」研究会	5		3	2	
名古屋大学東洋史研究会大会・例会	1				2
「地域と宗教」研究会	2				
名古屋哲学フォーラム	1			1	
中部人類学談話会	5				
リーディング・語彙研究会		12		1	
「日本言語文化研究」学術研究会		1			
上海師範大学・名古屋大学言語文化学術交流会		1		1	1
アコリス考古学プロジェクト		1		1	1
アルプス科研研究会		1			

学会・研究会の名称	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
電算文学研究会		1	12	12	1
オンライン映画上映と監督との対話シリーズ		4			
Global Hardy		1	1		
日本ハーディ協会		1	1	1	
ダンス・スコーレ特別講座シンポジウム		1	1	1	1
多様な観点からの日本映画		1			
ベルギー・ナミュール大学教授 Jean-François Nieus 講演会		1			
西洋古代史インターユニヴァーシティ・ワークショップ		1	1	1	
エジプト領域部研究の新展開		1			
日本オリエント学会		1			
日本ナイル・エチオピア学会		1			
日本言語学会		1	2		
考古遺物から見た仏教文化の伝播と交流：古代日本と中央アジア		1			
超域文化社会センター 国際シンポジウム		1	1		1
Japanese and Korean Linguistics Conference		2	1		
「古代地中海世界における知の動態と文化的記憶」研究会		2			
グローバル化時代における「観光化／脱–観光化」のダイナミズムに関する研究会		2			
International Workshop on Mimetics IV		1			
「コンピュータを使った近現代文学研究」勉強会		3			
フランス・アカデミーの総合的研究		3			
上海財経大学・名古屋大学共同研究会		1	1	1	
Zora Neale Hurston, “The Swear”		1			
テキストの中の文法研究会			2	2	2
国立民族学博物館共同研究			7		
東アジア日本研究者協議会（パネル数）			2		
Logic and Engineering of Natural Language Semantics			1		
伊保谷から見た豊田市の古代			1		
Gender, economy and mobilities in the Upper Mekong region			1	1	
メコン川上流地域における宗教・経済・ジェンダー			2	1	
中世社会と書状―文書実践の日欧比較―			1		
西洋古代におけるジェンダー			9		
日韓学術交流会			1	1	
東アジア日本語学研究国際シンポジウム			1	1	1
名古屋大学英文学会			1		
中华学术外译项目《古汉语通论》日译研讨会			1		
中华学术外译项目《古汉语通论》申报汇报会			1		
玄奘三蔵がつなぐ中央アジアと日本			1	1	
学僧慈円学会			1	1	
バーミヤーン・フォーラム―二大仏の破壊前と現在：課題と展望―			1	1	
西域・中国からの水脈―仏典と翻刻・俗講			1		
「テキストマイニング」研究会			2		
「シン・人文学」研究会			3		
先導的人社研			1	1	
会話分析研究（発表）会			1	1	1

学会・研究会の名称	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
ミシェル・フーコー「コレージュ・ド・フランス講義」を読む、公開書評会			1		
歴史語用論・歴史社会言語学研究会			1		
名古屋歴史科学研究会（愛知県歴史教育者協議会との合同例会を含む）			1		1
名古屋大学最先端国際研究ユニット中間成果報告会			1	1	
日本認知言語学会チュートリアル			1	1	
The International Cultural Seminar by the Japanese Society for German Studies			1		
国際オンライン講演会（名古屋／トゥーロン）			1		
中唐文学会大会「唐代仏教霊験譚の研究」			1		
International Conference of the European association for Japanese Studies (EAJS), panel			1		1
日本に住む脱北した元「帰国者」の記憶・夢・声―アートプロジェクト『朝露』			1		
『NO NUKES ―〈ポスト3.11〉映画の力、アートの力』刊行記念講演			1		
植物遺伝学とテクスト理論の関連について			1		
Colloque international à l’occation du 40e anniversaire de la Société franco-japonaise d’art et d’archéologie			1		
新約聖書図像研究会			1		
北東アジア研究会「近代家族論の射程と中国における社会主義的近代化―『中国の家族とジェンダー』とその後」			1		
日仏社会学会大会			1		
上野千鶴子氏講演会＋座談会「30年目の『家父長制と資本制』：中国・日本女性における今日的な意義」			1		
名古屋大学人文学研究科言語学分野公開講演会			1		
東海縄文研究会				1	
名古屋大学人文学研究科英語学分野公開講演会				1	
名古屋大学人文学研究科文献思想学繋西洋古典学セミナー				1	1
ELO Conference 2022				1	
映画プロデューサー渡邉一孝トーク				1	
中国における仏教怪異故事の流通				1	
中国・マンガ・メディア研究会				1	2
Reimagining the Buddhist Landscape of Ancient Rajagrha/ Rajgir				1	
日本語文法学会第23回大会シンポジウム				1	
ヴェセル・クルル教授／ヨシネ・ブロク教授講演会				1	
イラッド・マルキン教授講演会				1	
Workshop on Typology of Ideophones				1	
Atelier Cinematographique				1	
YLC 共同研究助成月例研究会				9	
名古屋大學―屏東大學・文學交流暨論文發表會				1	1
建国初期中国を移動する身体メディア・プロパガンダ―戦時期からの継承と展開				1	
労働と身体の大衆文化論―戦時下・戦後の接続の試論として				3	
International Conference on Head-Driven Phrase Structure Grammer				1	
会話分析中級（以上）者セミナー				1	
学術知プロジェクト研究会				15	
「予測と創発―理知と感情の人文学」刊行記念シンポジウム				1	
人文知共創センター設立記念シンポジウム				1	

学会・研究会の名称	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
Making Micro-Anarchic Voices: Questioning Body, Sexuality, and State Power with Moving Images				1	
Ezra Pound International Conference				1	
Screen and Energy Symposium				1	
ケアの倫理と人文学				1	
現代の第一線の研究者による古代哲学講演				4	
考古学研究会東海例会					1
Workshop on the problems concerning Getica					1
ヴァルター・ポール氏・ヘルムート・ライミッツ氏講演会					1
International Joint Conference on Social Studies and Humanities					1
Matteo Compareti 教授講演会					1
ウズベキスタンの考古遺物の保存と活用に向けた取り組み					1
アントレプレナーの倫理ワークショップ					1
西洋古代哲学キャリアワークショップ					1
西洋古代哲学サマースクール					1
AI で切り拓く人文学の未来					1
古代哲学研究ネットワーク第 2 回ワークショップ					1
名古屋日韓平和ワークショップ					1
日本西洋史学会（小シンポジウム含む）					3
貫戦期の東アジアにおける映画と諸芸術					1
名古屋大学・木浦大学校院生研究集会					1
“Ideophones in Motion Description” Workshop					1
近現代史研究会					1
森野旧薬園春期展覧会					1
Kyoto University Ancient Seminar					1
歴史フェス（名古屋大学）					1
中部地区英語教育学会愛知地区大会					1
What About China?　上映会					1
Anthropocene Calling-Human, Philosophy, Technology, and Arts in the Age of Anthropocene					1
AAA プロジェクト全体研究集会					2
An Afternoon with Trinh T. Minh-ha					1
データサイエンス時代の言語教育第 4 回					1
日中社会学会第35回大会シンポジウム					1
Euro-Japanese Colloquium on the Ancient Mediterranean World, The Past in the Present					1
日本西洋古典学会フォーラム					1
Sarah McGrath 講演会					1
名古屋大学応用哲学・応用倫理学講演会					1
豊秋奨学会研究助成費に基づく国際研究集会					1
中国現代史研究会東海例会					3
ドイツ語圏文化学講演会					1

出典：教育研究推進室

2-2　研究資金の状況

資料2-2-1　科学研究費等受入状況

			新規採択	継続採択	合　計
2019年度	件　数		23件 （うち基盤S：0件 基盤A：0件）	48件 （うち基盤S：0件 基盤A：2件）	71件 （うち基盤S：0件 基盤A：2件）
	受入金額	直接経費	37,500,000円	53,800,000円	91,300,000円
		間接経費	11,250,000円	16,140,000円	27,390,000円
		合　計	48,750,000円	69,940,000円	118,690,000円
2020年度	件　数		18件 （うち基盤S：0件 基盤A：1件）	57件 （うち基盤S：0件 基盤A：2件）	75件 （うち基盤S：0件 基盤A：3件）
	受入金額	直接経費	28,200,000円	67,831,555円	96,031,555円
		間接経費	8,460,000円	19,296,000円	27,756,000円
		合　計	36,660,000円	87,127,555円	123,787,555円
2021年度	件　数		19件 （うち基盤S：0件 基盤A：0件）	44件 （うち基盤S：0件 基盤A：3件）	63件 （うち基盤S：0件 基盤A：3件）
	受入金額	直接経費	21,000,000円	72,142,160円	93,142,160円
		間接経費	5,400,000円	21,351,000円	26,751,000円
		合　計	26,400,000円	93,493,160円	119,893,160円
2022年度	件　数		14件 （うち基盤S：0件 基盤A：0件）	50件 （うち基盤S：0件 基盤A：2件）	64件 （うち基盤S：0件 基盤A：2件）
	受入金額	直接経費	13,500,000円	63,275,699円	76,775,699円
		間接経費	4,050,000円	18,849,000円	22,899,000円
		合　計	17,550,000円	82,124,699円	99,674,699円
2023年度	件　数		19件 （うち基盤S：0件 基盤A：1件）	47件 （うち基盤S：0件 基盤A：1件）	66件 （うち基盤S：0件 基盤A：2件）
	受入金額	直接経費	34,700,000円	48,042,442円	82,742,442円
		間接経費	10,410,000円	11,580,000円	21,990,000円
		合　計	45,110,000円	59,622,442円	104,732,442円

出典：研究事業課

資料2−2−2　寄付金等受入状況（2022年度及び2023年度）

2022年度

種　別	課題名	出　所	代表者	受入金額
補助金	科学技術人材育成費補助金	文部科学省（学内配分）	樋口 諒	3,000,000円

2023年度

種　別	課題名	出　所	代表者	受入金額
寄付金		公益財団法人大幸財団	和田 光弘	230,000円
寄付金		公益財団法人住友財団	影山 悦子	1,500,000円
寄付金		公益財団法人三島雲母記念財団	伊藤 早苗	1,000,000円
寄付金		秋田　喜美（国立国語研究所）	秋田 喜美	300,000円
寄付金		公益財団法人豊秋奨学会	佐野 誠子	200,000円
寄付金		公益財団法人大幸財団	影山 悦子	900,000円
寄付金		名古屋大学全学同窓会	周藤 芳幸	500,000円
寄付金		公益財団法人電気通信普及財団	梶原 義実	2,000,000円
寄付金		公益財団法人大幸財団	藤木 秀朗	100,000円
寄付金		公益財団法人萩原学術振興財団	岩田 直也	2,000,000円
寄付金		名古屋大学全学同窓会	河西 秀哉	350,000円
共同研究	考古遺物自動実測システムに関する研究	株式会社イビソク	梶原 義実	390,000円
受託事業	舞木古窯に関する調査	豊田市	梶原 義実	496,210円
受託事業	「国際日本研究」コンソーシアム事業	大学共同利用機関法人人間文化研究機構 国際日本文化研究センター	日比 嘉高	985,292円
受託研究	課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業（学術知共創プログラム）	独立行政法人日本学術振興会	中村 靖子	15,142,400円
補助金	科学技術人材育成費補助金	文部科学省（学内配分）	樋口 諒	2,507,500円
補助金	次世代研究者挑戦的研究プログラム助成事業（東海国立大学機構融合フロンティア次世代研究事業）	国立研究開発法人科学技術振興機構（学内配分）	許 燕 外13名	4,500,000円
補助金	次世代研究者挑戦的研究プログラム助成事業（次世代リサーチャー海外渡航費支援）	国立研究開発法人科学技術振興機構（学内配分）	Carmel 外２名	750,000円
補助金	科学技術イノベーション創出に向けた大学フェローシップ創設事業	文部科学省（学内配分）	徐 韻文 外24名	5,645,306円

注：2022年度分は、昨年度年報未掲載分
　寄附金は、財務課作成『R5年度寄附金受入等一覧』より人文学研究科分を抽出（2023年度中に入金のあったもののみ）
　受託事業・受託研究等は、外部資金データより人文学研究科分を抽出し、学内分担分を含まない
　科研費は、プロジェクト受入状況照会より人文学研究科分・高等研究院（人）を抽出
出典：研究事業課

資料2−2−3　人文学研究科教育実施経費配分状況（2023年度）

プロジェクト名	代表者	配分額
美術史実習1a／2aおよび美術史実習1b／2b	美学美術史学	245,120円
考古博物館実習Ⅱ・考古学実習Ⅲ	考古学	156,000円
日本史博物館実習Ⅰ	日本史学	31,000円
文化資源学研究Ⅰ	歴史文化学繋共通（考古学・日本史学）	18,000円
文化資源学研究Ⅲ	歴史文化学繋共通	56,000円
文化人類学フィールド実習Ⅰa	文化人類学	179,580円
文化人類学フィールド実習Ⅰb	文化人類学	293,080円
文化人類学フィールド入門実習Ⅰ	文化人類学	57,620円

出典：文系総務課

資料2–2–4　人文学研究科プロジェクト経費配分状況（2023年度）

プロジェクト名	代表者	配分額
日中学術交流推進プロジェクト	杉村 泰	390,000円
第10回 名古屋大学・台湾大学 大学院生研究発表会	飯田 祐子	377,320円
名古屋大学と木浦大学による大学院生研究発表会	安井 永子	393,780円
文化財三次元閲覧システムの商標登録および維持に関するプロジェクト	梶原 義実	135,080円
インドネシア国立スラバヤ大学での国際研究集会「文化遺産と科学技術」開催に向けて	影山 悦子	400,000円

出典：文系総務課

2–3　研究成果の社会還元

資料2–3–1　社会還元活動実施状況

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
市民向け講演・公開シンポジウム、カルチャースクール等	90	57	75	60	14
新聞記事の掲載・テレビ出演等	104	48	24	34	75
高等学校への出張授業等	21	5	16	22	16
その他	18	20	4	6	28

注：カウントの基準の変更によって、例年と数値が異なる場合がある。
出典：教育研究推進室

資料2–3–2　地域連携活動一覧

	種　別	内　容
2019年度	自治体史等	愛知県史、鳥取県史、豊田市史、知立市史、西尾市史、小松市史、鳥取市史
	文化財調査事業等	愛知県、名古屋市、稲沢市、刈谷市、豊川市･豊田市、設楽町、東栄町、豊根村、岐阜県大垣市
	博物館美術館等	東京国立博物館、国立歴史民俗博物館、三重県立美術館、名古屋市博物館（２件）、岡崎市美術博物館、稲沢市荻須記念美術館、一宮市博物館、西尾市岩瀬文庫〈羽島市不二竹鼻町屋ギャラリー、愛知県〉
	その他団体	北設楽花祭保存会、公益財団法人東海ジェンダー研究所、国立女性教育会館、特定非営利活動法人難民支援室
2020年度	自治体史等	愛知県史、知立市史、西尾市史（４件）、豊田市史、新修豊田市史（２件）、小松市史、新修鳥取市史、明石市史
	文化財調査事業等	愛知県、名古屋市、岡崎市（２件）、稲沢市（２件）、豊田市、豊川市（２件）、一宮市、あま市、岐阜県垂井町・白川町・大垣市（２件）、福島県只見町・金山町、長野県阿智村・飯田市
	博物館美術館等	名古屋市博物館（２件）、特別史跡名古屋城、愛知県埋蔵文化センター、西尾市岩瀬文庫、国立歴史民俗博物館（２件）、静岡県立美術館、三重県立美術館、大学共同利用機関法人国文学研究資料館、花祭会館、ハーバード美術館（アメリカ）〈三井記念美術館、名古屋市美術館、岡崎市美術博物館、名古屋市教育委員会〉
	その他団体	名古屋テレビ、大須観音真福寺、大須商工会議所、特定非営利活動法人名古屋難民支援室、中部日本ミツバチの会、一般財団法人日ロ友好愛知の会、サントリー文化財団、国立女性教育会館、公益財団法人東海ジェンダー研究所
2021年度	自治体（自治体史・文化財調査事業等）	名古屋市、豊田市（３件）、一宮市、犬山市、知立市、西尾市（３件）、豊川市、岐阜県、大垣市、石川県、小松市、鳥取市、明石市、福島県只見町・金山町
	博物館美術館等	名古屋市博物館、大須観音真福寺宝生院文庫、愛知県公文書館、愛知県埋蔵文化センター、愛知芸術文化センター、岩瀬文庫、豊田市美術館、史跡大曲輪貝塚、稲沢市荻須記念美術館、国立歴史民俗博物館、静岡県立美術館、三重県立美術館、平洲記念館、ハーバード美術館（アメリカ）〈都城市博物館、高岡市美術館、福井県立美術館、一宮市博物館〉
	その他団体	名古屋テレビ、大須商工会議所、特定非営利活動法人名古屋難民支援室、日ロ交流愛知の会、国立女性教育会館、公益財団法人東海ジェンダー研究所、東京都港区立男女平等参画センター、文化遺産国際協力コンソーシアム（３件）、長野県白馬村観光局
2022年度	自治体（自治体史・文化財調査事業・その他）	愛知県（４件）、豊川市（３件）、犬山市（２件）、豊田市、稲沢市、西尾市、岐阜県中津川市、大垣市（３件）、関ケ原町、垂井町、石川県小松市、かほく市、兵庫県姫路市、明石市
	博物館美術館等	名古屋市博物館（３件）、特別史跡名古屋城、東栄町花祭会館、岩瀬文庫、史跡大曲輪貝塚、奈良文化財研究所、奈良県立橿原考古学研究所〈徳島県立美術館、府中市美術館、四日市市立博物館、岐阜県文化財センター、小牧市教育委員会、大阪城天守閣、沼田市歴史資料館、石水博物館（津市）〉
	その他団体	名古屋難民支援弁護団、花祭の未来を考える実行委員会、日ロ友好愛知の会、公益財団法人東海ジェンダー研究所、国立女性教育会館
2023年度	自治体（自治体史・文化財調査事業・その他）	名古屋市（２件）、愛知県（２件）、豊川市（２件）、犬山市（２件）、豊田市、一宮市、稲沢市、西尾市（２件）、岐阜県、大垣市、土岐市、関ケ原町、坂祝町、香川県、岡山県、福岡県、筑紫野市、高知県、石川県野々市市、兵庫県明石市、〈名古屋市（２名）、愛知県（５名）、一宮市、岡崎市、岩倉市、幸田町、岐阜県、岐阜市、養老町、静岡県（２名）、徳島県、京都府福知山市〉
	博物館美術館等	名古屋市博物館、特別史跡名古屋城、愛知県埋蔵文化センター、愛知県芸術劇場、愛知県公文書館、東栄町花祭会館、国会図書館、奈良県立橿原考古学研究所、国立民族博物館、古代オリエント博物館、東洋文庫〈名古屋市美術館、愛知県美術館、野外民族博物館リトルワールド、安曇野ちひろ美術館、長浜市曳山博物館、岐阜県文化財センター
	その他団体	名古屋難民支援室、日ロ友好愛知の会、公益財団法人東海ジェンダー研究所、Common-S サカエ大学、ZIP-FM、NHK、国立女性教育会館、出版文化産業振興財団、一般社団法人 Glocal Academy、東京弁護士会

注：博物館美術館等の〈　〉内は、学芸員等の就職先を示す（臨時職員・現職リカレント教育を含む）
　　自治体の〈　〉内は、自治体職員の就職先を示す
出典：教育研究推進室

編集委員

秋　田　喜　美

崔　　境　眞

川　本　悠紀子

McGEE Dylan

三　輪　晃　司

長　山　智香子

小　川　翔　太
（教育研究推進室幹事）

佐　野　誠　子

周　藤　芳　幸
（人文学研究科長）

吉　田　早悠里

（アルファベット順）

年報2023　名古屋大学大学院人文学研究科教育研究推進室

2024年11月30日発行

発行　名古屋大学大学院人文学研究科教育研究推進室
〒464−8601　名古屋市千種区不老町
TEL（052）747−6391

組版　株式会社 あ る む
〒460−0012　名古屋市中区千代田3−1−12
TEL（052）332−0861